

新しい家庭科

わく

結婚の風景



1985 5



逐次刊行物

60.4.17 和

立婦人教育会館
情報図書室

遊びの風物詩

五月の節句——野山は新緑に空と水も美しく、田園に華やかな原色の鯉のぼりが空に舞う風景は見事なものです。

最近の男の子たちは鯉のぼり程元気がないような気がします。「男女同権」のせいか母親の過保護で兄弟が少ないせいなのか、TVのCMの「わんぱくてもいい」のことは虚しく。おとなしいより元気がないのでと思います。私たちの子供の時は木のほりも足でひと校ごと確かめてのぼつたものです。行動力のない子でもテレビで覚えた個性のないことは達者です。女の子より男の方がおしゃべりです。

乱暴なとわんぱくと間違っている場合もあります。わんぱく教育を自慢にしている幼稚園に行った時、私の少々肥満した腹をいやというほど園児に蹴とばされました。思わず私もけりかえしてやりました。男の子は泣きそうな顔をしました。「君が痛いように先生も痛いのだよ」その子は泣かなかったが自由教育の履きかいで、自分にだけ自由があるようなそだて方は困りものだ、相手にも自由があることを認めてから自分の自由を主張してもらいたいものです。

(田沢 茂)

結婚したくないあなたへ

上野千鶴子

「結婚なんか、しません。」

と頬を紅潮させて言い放つ女子学生が、私の教える女子短大のクラスにも、毎年一人か二人はいる。結婚だけが人生の唯一の目標みたいに、結婚になだれこむ多数派の女の子たちも困りものだけれども、「結婚なんか」と突つばる女の子も、真剣なだけ、よけいに始末が悪い。どちらも、結婚とはどんなものか、という思いこみでがんじがらめになっている点で、同じくらいアタマが固いのだ。

ねえ、もつちよつと肩の力を抜いたら？——私は、やれやれと彼女の顔をながめる。百人いたら百とおり顔がちがうように、百組の夫婦がいたら百とおりの暮らし方があるのだから、結婚でこんなもの、と思ひこむことはない。むやみに懂れるのも、ひたすら軽蔑するのも、同じくらいまちがっている。なるほど結婚についての思いこみは、世間があなたに教えこんだもので、それは世間の変わり方と同じくらい遅々として歩みがおそいけれども、一回きりの自分の人生の中で、あなたは自分らしい結婚をつくつていける。それに他人のいる人生つて、いいものよ…。

そんな相手が見つかるかしら、と心配しているあなたへ。——と昔前は、すんだ女の子たちが、自分にふさわしい男がいないと嘆いた。今では「やつぱり家でごはん作つて待つてくれる女性がいい」と言うおくれた男たちが、自分にふさわしい相手が見つからなくて「婚期を逸する」時代が、すぐそこまで来てるのだから。（平安女子短期大学）

~~~~~ 結婚の風景 ~~~~~

〈巻頭言〉 結婚したくないあなたへ……………上野千鶴子 1

❀ 結婚の風景 ❀

|                         |       |    |
|-------------------------|-------|----|
| 結婚しようとする時の男たち・女たち……………  | 松原 康子 | 4  |
| 「男にとって結婚とは」について……………    | 田中 正彦 | 9  |
| 女にとって結婚とは—独身女性の増加を考える—… | 小玉美意子 | 14 |
| 情報 「婦人に関する世論調査」から……………  |       | 18 |

❀ 発 言 ❀

学習の主人公たち「ケツコン」って何？

|                                 |          |
|---------------------------------|----------|
| ……………新潟県立黒崎高等学校の生徒たち            | 38       |
| 母や祖母たちの結婚……………                  | 平井 和子 22 |
| 「せめぎあい」の中で……………                 | 日比野幸子 24 |
| 専業主婦の場合……………                    | 加藤 弘子 26 |
| 結婚を、私はこう位置づける……………              | 西風 弥生 28 |
| 「結婚」を、私はこう位置づける……………            | 大嶋 正 30  |
| 結婚して思うこと……………                   | 林 直子 31  |
| 男子が張り切る料理コンクール……………             | 山口 富造 33 |
| <small>あこがれ</small> 憧れの王子様…………… | 大仏 レア 35 |
| 家庭科教育に関する検討会議の「報告」を読んで……        | 福留美奈子 36 |



○情報☆「家庭科男女共修」母親たちの意見 77  
 ☆日教組「男女共学の家庭科構想（第1次案）」より 80  
 ○波 「結婚」半田たつ子 84  
 ○ひと 高瀬斎さん 37

### ✿ 新しい家庭科を創るために ✿

|                          |                     |    |
|--------------------------|---------------------|----|
| 小学校では                    | 「歯とおやつ」の実践から……野原 春江 | 41 |
| 中学校では                    | 編物を授業で……森 陽子        | 45 |
| 高等学校では                   | 男女共修への夢ふくらむ…森 幸枝    | 50 |
| 家庭科の新しい役割－民衆の生活文化復権の場として |                     | 2  |
|                          | 小沢 有作               | 55 |

### ✿ 連 載 ✿

|                      |                         |    |
|----------------------|-------------------------|----|
| 遊びの風物詩               | ……田沢 茂                  |    |
| 教室の窓                 | オー君の死……植垣 一彦            | 60 |
| カウンセリングの応用<br>－現場から－ | 「つながる」その2 ……児玉すみ子       | 62 |
| 霞通信                  | 夕暮れに玄関のチャイムが鳴る…武田 秀夫    | 64 |
| 男の台所                 | アラ煮……高瀬 斉               | 68 |
| 土                    | 村の情報網はおばあさん…五十嵐愛子       | 70 |
| 政治の目                 | 高まる指紋捺捺拒否への視点 ……宮本なおみ   | 71 |
| フェミニスト・テレビ考          | CMの原則を軽視する風潮 ……鈴木みどり    | 72 |
| Weブックランド             | 女たちは何をうみだしてきたのか ……長谷川公一 | 73 |
| フウフウフウふうふ            | 役割分担……ウツのみや             | 76 |
| 思えば思われる物語            | 人間の記憶は？……丸山 光子          | 74 |
| 子どもって…               | 「基地」ものがたり……稲邑 恭子        | 75 |

○ “We” EDITOR'S NOTE 96    ○ あんてな 94    ○ 十字路 92  
 ○ この号をよむために 82

表紙デザイン 加藤由美子  
 目次イラスト 馬場洋子  
 本文イラスト 編集部

# 結婚しようとする時のく

## 男たち・女たち

松 原 康 子



コンサルタントばやりの昨今、ブライダル・コンサルタントなるものが存在してもあながち不思議ではない。私にはその肩書きがついている。冠婚葬祭の古いしきたりを教えてくれるお年寄りのいない核家族の中で結婚話が持ちあがれば、何をどうしていいのか見当のつかない人は結構多いのである。今子供を結婚させようという親たちの世代は、戦争中の生活簡素化の波に洗われ、戦後はアメリカ的合理主義を叩き込まれ、古きはみな悪しきなりと思い込んで成長したから、日本的慣習には比較的うといのだ。

しかし、もともとセレモニーの好きな国民性である。衣食あり余る今となって旧来の風習が勢いを盛り返し、それに新しい流行が加わって結婚式風景も大きく変化を見せて来た。しきたりを守り、なおかつ流行にもおくれたくないとながう

若者たちやその親たちが、毎日私共のコーナーを訪れる。

慣習とは厄介なもので、法律に定められているわけでもなく、その時代や地方でそれぞれ異なり、絶対にこうでなくてはならぬという事は一つもない。従って質問に対する回答の目安は相手を安心させる事にある。つまり常識の範囲内でその人の望むような答えをしてあげればそれでよいのである。

メインの仕事は結婚式場の紹介なのだが、そのほか結婚の事から服装、挨拶の仕方、仲人へのお礼、心付け等々結婚に関するありとあらゆる相談が持ち込まれ、中には息子の恋人が初めて家へ遊びに来るのだが、どんな料理を出したらよいか、家族と一緒に食事した方がいいのか、別室で二人だけにすべきだろうかなど大真面目で訊いて来る人もある。かと思えば、三十万ぼっちのお金で娘一人取られるなんて泣

き出す母親をなだめたり、息子にこれこれの縁談があつて本人はその氣になつてゐるが私はどうも氣に入らない、どうしたものかという電話がかかつて来たり、さながら人生相談の様相を呈する事もある。しかし、何はともあれ新しい門出のお手伝い、主婦のアルバイトとしては冥利につきるといふべきだろう。

ところでその結婚式は年々デラックスになり、費用も高騰の一途を辿つてゐる。結納品に並べてエンゲージリングを差し出す和洋混交のやり方も定着しつつある。招待客の人数も次第に増え、披露宴はいやが上にも華やかに、ドライアイスの霧の中のケーキカットやキャンドルサービスはもはや当たり前、ゴンドラに乗つた新郎新婦が空中からおりて来るサーカスの演出も珍しくなくなった。新婦と同時にお色直し（！）をする仲人夫人や母親まで現れる始末だ。ハネムーンはほとんど海外、新居も四畳半一間は昔話でしかない。結婚に要する費用総額が一組平均六百万円という統計が出てゐるから、大半は親持ちということになり、従つて親の意向もある程度尊重しなくてはならないと見え、以前のように自己主張の強い若者が少なくなつた。概して保守的であり、妥協的である。「ぼくはあまり氣にしない方ですが、やっぱ、仏滅はいやですね。母親がうるさいから大安か友引でお願いします」などと言う。

余談になるがこの六輝というしろもの、辞典を引けば「曆日上の迷信」とはつきり書いてある通り、何の根拠も無いものである。私自身、以前は六輝などとは全く無縁の生活をして来たので、この仕事を始めてから、世間には大安仏滅を基準に日々の行動を定める人があまりにも多い事、しかも若い人々がそれに左右され、もしくは安易に妥協して疑問を感じない事に少なからず戸惑いを感じた。しかし、男女の結びつきは、古来（特に農耕民族に於ては）生産を意味する重要な儀礼であり、吉日を選び、不吉を忌んで神の祟りを避けようとする風習に基づくものであるならば、それはそれでいいのかも知れない。この件に関して私は、一種の社会的マナーと割切る事によつて自分自身を納得させた。とはいへ、たまに仏滅がいいです。空いてるし安いから、などと明るく言うカップルが来たりすると、思わず身を乗り出して共感の意を表してしまふ。事なかれ主義の若者はやはり物足りない。

この仕事を始めて七年になる。何百組の婚約者たちの相談を受けて来た中にはくつきりと心に刻み込まれた何人かの人がいる。

挙式目前に花嫁が急死したり、花婿が交通事故で重傷を負つて意識不明というような悲劇を耳にした時はつらい。好感

の持てるカップルであつた時はなおさらである。

国際結婚も時々あるが、面白いのは例外なく女性の国のやり方で挙式することだ。やはり結婚式の主役は花嫁なのか、男性の思いやりなのか。

なるべく早くと希望して来るのはほとんど女性が妊娠しているためだし、同棲していたり入籍済みだったりとはちつとも珍しくない。赤ちゃん連れで来る人たちは、大抵衣裳を着た写真だけ撮りたい、と言う。式を挙げる必要はないが、子供が大きくなった時、結婚写真がないと具合が悪いというわけだ。

結婚したがるのは若い人ばかりとは限らない。再婚の人もいるから、年配の男性が前に座つても父親と決めてかかつてはいけない。相手の女性は初婚だから式だけはきちんと挙げたい、という例は大変多いのである。それにしても男の人はいいですね。頭が禿げてても初婚の若い女性と結婚出来るのですから。白髪の老女が初婚の青年と結ばれるなんて？ 通常はほとんどあり得ませんものね。

禿げた人（ハゲにこだわるようで申し訳ないがやはり印象が強いで御容赦）の相談は二度受けた。どちらも五十過ぎ、一人は温和なやせ型の紳士で、七年前妻を亡くし、今まで喪に服して来たが、年を取るにつれ身辺不自由でもあり、ちよいどいい話があつて子供たちも賛成してくれた、亡妻も

多分許してくれると思いますのでと言う。この紳士はある小さい地味な式場で、身内ばかり三十人ほどの和やかな式をあげられた。

もう一人はガラガラした感じのずんぐりしたギョロ眼の男性で、今にも爆発せんばかりに興奮してやつて来た。口から泡を飛ばして亡妻のおのろけやら再婚のいきさつやらをしやべりまくり、四十二歳という相手の女性の写真を何枚も出して見せ、「処女ですよ、処女。信じられますか、奥さん！」と叫んで私の手をつかんだ。この人は式場が決まつてからも二度ばかり現れて、結婚したら妻と一緒に風呂に入つてはいけないでしようか。高三の息子がいるのですが、などと質問し、私は四十二歳の処女である相手の女性が案じられてならなかった。

再婚ではないけれど、そして式場も決まらなかつたけれど、忘れ難い人がいる。頭髮に大分白いものの混じつた四十年配の実直そうな男性であつた。結婚当時は貧乏で式も挙げないまま十二年間妻と二人で働いてやつと一軒店を持つことが出来たので、一度妻に花嫁衣裳を着せてやりたい。ほんの身内だけでささやかに、とはにかみながら言うのである。その人の自宅に近い、小さいが親切な式場を紹介したら大変気に入つてお礼を言つて来た。ところが二、三日してその奥さんという人から電話がかかつたのである。



「お父さんがねえ、私に内緒で決めちゃったんですけどね、もう五年生の子供がいるんですよ。今更結婚式なんて冗談じやない。恥ずかしくっていやですよ。お父さんの気持はほんとにうれいんですけど、私は式なんかやらなくたって幸せなんですからいいんです。御親切にしてくださいのにすみません」

働き者のおかみさんらしい、カラツとした気持ちのいい笑い声が受話器の中から響いて来た。

どうも中年の話を身が入り過ぎたようだ。若い人の話にもどるとしよう。元来私は若者に好意的な物分りのいいオバサンであり、「今の若い者」的発言は嫌いなのだが、その私でさえ微笑んでばかりいられない時もある。

昔から人間は「ハレ」(祭)と「ケ」(日常)の二つの場に生きて来て、つい最近までそれは比較的明確に分けられていた。しかしここ二、三年、若者たちの社会ではこの二つが次第にまざり合い、日常を祭のごとく過ごす生き方が志向されているのではないかと思われる。「まつり」という言葉が流行しているのはその現れかも知れない。

結婚式は確かに人生最大のハレの場であるが、そのあとに長い「ケ」の生活が続く事を忘れないでほしい。今思い出し

ても胸のふさがるカップルの例を引いてみよう。

女性の方はちよつとわがままな、よくあるタイプのお金持のお嬢さん。あの式場はじゅうたんが汚なかった。あそこはシャンデリアが豪華でとてもいい。庭のある所がよくて、有名な所、きれいな衣裳が沢山そろつてゐる所、と子供がおねだりでもするように一人で熱心に述べ立てる。リーゼントにジャンパー姿の男性は、その間カウンターに肘を突いてガムを噛んでおり、最後まで会話らしい会話は一言もしやべらなかつた。ただ、彼女の話の切れ目切れ目で、「パツとやろうぜ、パツと」というせりふを、あたかも囁き言葉さながらに叫ぶのである。結局彼等はある有名な一流の式場を申込んだのだが、二ヶ月位たつてその式場からキャンセルになった旨の報告があつた。「御破談のようです」という式場の人の声を、ほろ苦い気持で聞いた。

これは多少極端な例であり、堅実な若者たちだつてたくさんいるのだが、概括して言えることは年を追う毎に女性主導型のカップルが増えつつあることだ。しっかりとした女性が目立つのと相対的に幼児的男性を多く目にする。男性の話の方は一応論理的に聞こえるのだが、内容が未消化である。照れて汗をかいたり逆に虚勢を張つたりするのも男性であるのに比し、女性にはにかみもせず冷静に聞きたい事の核心を簡潔に突いて来る。恐らく数年前まで(もしかすると現在も)、「え

「つ、ウソーオッ、ほんとーオ」とやっていたに違いない彼女たちが、礼儀正しくにこやかに挨拶して立ち去るのを見送る時、その変わり身の早さに感嘆してしまふ。

神話学者の吉田敦彦氏によれば、日本神話の中に現れるスサノヲの暴力性と幼児性、即ち亡母を慕って泣きわめいたり、姉のアマテラスの優しさに甘えて乱暴をはたらいたり、娘のスセリヒメを奪われまいと、その恋人のオオクニヌシを殺そうとしたりするスサノヲの性格が、女性に甘え、べったり固着して女から自立出来ない日本男性のプロト・タイプであるという。これに対し父性原理に支配されるヨーロッパの男性は、自我の確立が早く、女から自立して個々に成長して行くのだそうである。最近ヨーロッパ旅行で四組のハネムーンと同行する機会があった時、この事をしみじみ痛感した。四人の夫たちは終始浮かれはしやぎ、かと思えば疲れたと言つてふくれ、腹が減つたとわめき、高い所に登れば怖がり、英語が通じないと腹を立て、全く幼児そのものであった。ところが妻たちの方は、それぞれタイプは異なるものものいずれもクールに落着き払い、何の苦情も言わず、逆に夫たちをたしなめたりおだてたり思うようにあやつり、買物する折も地に着いた生活感覚で品物をえらび、実にあつぱれなのである。

かつて女は父に夫に子に従う三従の道を強いられた時代が

ある。その頃でさえ、家庭で事実上男を操るのは女であると言われ続けて来た。いま、家庭における男たちが、昔の男に不可欠であった家父長的威厳をかなぐり捨てて、おおっぴらに母に甘え妻に甘え、娘に甘える三甘の道(?)を歩んでいる間に、女はジリジリと男社会に侵入しつつあるのではないだろうか。家庭で女に甘え慣れた男たちが、やがて社会においても女に甘え、依存する時代が来るのではないか。実際に男性社会の波に揉まれてゐる女性たちには樂觀に過ぎると叱られるかも知れないが、これは仕事を通してかいま見る若者たちの姿に、私が抱く幻想である。

終りにちよつと私事を書かせていただく。長年人さまの結婚式の相談に乗り、「おめでとうございます」と繰り返しているあいだに、何たる事ぞ、私の一人息子は聖職者の道をえらび、さつさと家を出て行つてしまった。息子の結婚式は私が最も好きなあのホテルで、などというひそかなもくろみも破れ、理想的な姑になろうと一人力んでいたのにオヨメサンが来ないのでは姑になりようもない。世の中とは不公平なのである。

## 「男にとって結婚とは」について

田 中正彦



「男にとって結婚とは」が与えられたテーマだが、〈男〉がこれに答えることは不可能やないかとぼくは思っている。ここでいう〈男〉とは、この〈社会〉を形成し、権力を握っている信じ、そして〈男〉が〈男〉によって認知され合うことによつてそのような幻想を抱き続けている男たちを指す。それ以外の男は子ども〈青年〉であり、〈男〉になり切れぬ、なる気もない、はやり言葉でいえばピーターパン、未熟ととらえられている。

言い替えれば〈男Ⅱ社会〉との意味での〈男〉である。

男はいかにして〈社会〉から〈男〉と認知されるかのキイのひとつに〈結婚〉がある。女との愛情、婚前後の性交渉、子どもの有無等はひとまずは関係なく、結婚式、披露宴、入籍がこの制度のそれぞれ倫理的・社会的・法的儀式となつて

いる。それらを経た後、男は父から独立し、周辺から認められ、責任ある〈社会〉の一人、〈男〉として登録される。

そこでの女の役割は、男↓〈男〉への触媒機能といえる。実際の所重要なのは両性の結びつきではなく（それが重要となるのは新たな男の再生産、つまり子産みの段階）、女を〈男〉（家↓社会）に所属させ得る能力を彼が有しているのを、そしてこの国等では、その女の姓は仮のものであり、彼が彼女の姓を替える力（別にそれを愛情と呼んでもかまわないが）を持っている。つまりは女の姓は替え得る程度のものであるのを、すでにそうしたプロセスを踏んだ〈男〉たちの前で、自らも示してみせることである。この儀式が終わればほぼ、女の役割は終わり、〈妻〉となり、次の出番は〈母〉になる時となる。

一昨年の正月、ぼくは高校時代の男友達と何年かぶりでワイワイやった。全員今は既婚者である。内に高校時代のカッブルがゴールインしたのが二組いて、その一組の家で集まった。男七名女二名。すると男たちはテーブルを囲み飯を食い酒を呑み、思ひ出話に花を咲かす。女たちはその家の住人も客の女も、エプロン姿で男たちの世話をする。「!?」と発言するとしらけ、ぼくもまた「郷に入っては」を早々に決め込む。

かつて彼女たちはぼくも含めた幾人かが恋した女（まあ振られたワケ）。もちろん当時も彼女たちは身につけ（つけさせられ）た女らしさでぼくたちを魅了し、ぼくたちも又、身につけた男らしさでアタックをしていた。が、幻想ではあっても彼女たちとぼくたちは時と場を共有しているように見えていた（でなければ恋などしない）。何かが変わったのか？　そうではないだろう。それは「男」社会が「大人」でもある故に、我々子どもが準備期間にいる者として処遇されていたにすぎない。常に懷に『禁止』を用意した認可。予定調和の世界へ向けての歩みから外れぬ限り許される共有観。大人たちはほほましい光景であるかのようにそれを眺める。が、男の子は「男」になること、女の子は「女」ではなく「妻」になることを期待されており、その意味で両者は分断されている。分断が見えにくいのは、両者が「子どもらしさ」

のオブラートで一括されているからにすぎない。

両者の分断ということでは例えば児童文学の中に動物物語と称される一群の作品がある。その内子どもが主人公のものは彼らの成長が描かれる。使用される要素は、出会い、所有、管理（飼う）、別れ（死）。動物の命は短いので、人生のプロセスが凝縮され易く、主人公の子どもが子どものままでそれを体験出来るわけである。不慮の死や突然の蒸発や、親の強制による別離も相手が人間であるより動物の方が描き易い。そして体験を我身に刻みつけ、子どもは成長する。

ところが、この子どもとは殆ど男の子である。つまり、出会、所有し、管理し、別れるまでのプロセスを経て成長するのは子どもではなく男の子なのだ。この場合の動物とは、女の子であり「妻」であり「母」であるのいうまでもない。

ともかくにも酒を呑み談笑する男たちは無事に「結婚」を成就させ、「男」として認知され、女たちは台所へ消えた。

それなりには楽しい思ひ出話に浸りながらも、

—— ああそうかいな、この社会はホモの世界なんや。ナルホド。

というのがぼくの感想。

恋人は「妻」となり男を「男」にし、結婚は「嫁」を媒介として「男」と「男」（家と家）を結びつける。要するに「男」

は女によって晴れて互いに手を握り合うことが出来る。当たり前のようでいて、くそおもしろくもない事実。よくよく考えると、まるでセクシイやない。あーあ。本物のホモはそんな手間かけない人たちなのだ。で、世間の人の目は冷たい。「あいつら手抜きしやがって」って。

しかし「結婚」はどうあれ、女は「母」になれる。これはスゴイのだ、と、一部の女は主張する。「母性」信仰。が、単純なことだが、それに別に「男」は反論しない。むしろ大いに首肯く。「確かに「母性」は素晴らしい。それはあんなたちの領分だ」。

それは、そのことで「男」社会は補強されこそすれ、揺らぎもしないからである。何故なら「母」としての子産みの感動いかにかわらず、子はただちに「男」社会に登録され、例の準備期間に入る。腹を痛めた我が子との絆を否定する論拠も資格も男であるぼくにはないが、しかし少なくとも「男」社会と、それを支える「結婚」制度を女が「母性」によって解消して欲しくないし、又出来るとも思えない。ぼくの祖母は二年前にあちらへ旅立った。享年九二歳。その日まで彼女は毎日仏前に一盛のご飯と日本茶を供え、手を合わせていた。ぼくはてつきり夫、つまりぼくの祖父へのものだと思っていたのだが、後に母に聞くと違った。祖父は明治の、しかも田舎の人にしてはめずらしくコーヒ―党で、茶

の代りにそれを飲んでいたという。で、祖母の日本茶は実は彼女の父へのものだった。理由は、祖父は祖母との間に四人の子を成しながらも、外に女をつくり、ある時から家には住まず、そちらで暮らした。当時のこと故か、結婚式の当日まで二人は顔を合わすことなく、初夜に祖母は祖父と向かい合ったとたん、この男は駄目だと思い、逃げ出し、友人の家の納屋に隠れ、発見され、つれもどされ、一緒になった。そうした祖母の行動や勝気さも原因だったのだろうが、結果は彼女の予想通りになり、父には腹違いの妹がいる。祖母は毎年、盆と暮れに子どもたちの手を引き相手の家へ「夫がお世話になりました」と挨拶に行っていたという。

それでも、もちろん子があり、孫が出来て、幸福はあったに違いない。が、祖母が死ぬまで一度も祖父の好物のコーヒ―を仏前に供えなかったのは、彼女にとつての「結婚」がそうした幸福で解消されなかったのを示していると思う。

嫁であるぼくの母に祖母は時折言っていたそうである。

「あの人も、いい女も若うて死んだから、あちらで若いまま楽しんでやる。出来るだけこっちに長いこといたいに。あの人がが極楽にいやはるのやつたら、私、地獄へ行くに」

又一方以前、(そして一部では今も)「結婚」も含めた制度と、それに支えられている「男」社会が、いまわしいものだから

らと、男から社会のイニシアティブを奪おうという元氣ない戦があつた。「女は乗せない戦車隊」ならぬ、「男は入れない茶店」も存在した。入れないのだからどないなつてんのか知らない。友人が女装して潜入を試みたが見事失敗。残念。

しかしもちろんそれは「男」社会の「男」を「女」に替えただけの話で、形成される社会はシンボルを男根から女陰「女陰」は差別語だったかなにしたにすぎない。抑圧された女は一見消えるかもしれないし、「男」は「報いじや、崇りじや、ザマアミロ」で仕方ないかもしれないが、「大人」社会や、「健常者」社会の中での子どもや障害者と呼ばれてしまっている人々は相かわらずの、歪な社会といえる。だから、問う必要のあるのは「男」だけではなく、この社会を司る「男」＋「大人」＋「健常者」（まだあるだろうが）なのだ。

昨年知り合いになつた自立障害者のH氏が三ヶ月入院した。栄養失調と塩分過多による腎臓疾患。原因は介護者の男たちが作れる料理が野菜のためと焼ソバぐらいだったこと。他のものを食べたい時は外食。週に一、二度介護に入る男たちはその時H氏とそれを食べるだけだが、H氏の側は毎日毎日、七年間。

障害者解放運動に誠実にかかわつて来た男たちであることは間違いないことだが、家事の自立、つまり女性問題との

連動はなされていなかった故の結果。そしていつもその鑑寄せは被差別者の側に来る。

さて、最初の問いは「男にとって結婚とは」であつた。この問いは、「男」を「男」と考えた場合、ごく簡単にここまで述べたことから次のように書き替えることが出来る。

「社会にとって制度とは」

そして問いかけられているのは「社会」である。彼（？）自身が答えられるだろうか。彼（社会）は制度によって形造られ、成立しているものであるから肯定以外には答えは出て来ない。もし「制度」に疑問をさしはさむなら彼は彼自身ではなくなつてしまう。で、彼は答えた瞬間にもう答える資格を喪失する。

ヤバイ、実にヤバイ。

が、しかしここは考え所である。女たちの中からはずでに、「母性」だけに身を寄せるのではなく、「男」からイニシアティブを奪い取るのでもなく、制度によって縛られた「妻」や「母」を脱ぎ捨て、「男」を補う存在としての女からおさらばし、本物の女へ向けて歩む人々が現れている。すでに「男」が認知される「社会」はほころび始めている。情眠を取るか、覚醒を取るか、判断の正念場である。前者ならば例えば単身赴任、退職後の突如の妻からの離婚宣言、妻に先

立たれた老人等の悲哀という危険性が待っている。幾人かはそれらに堪えきれずにそのまま戦死するだろう。後者ならば、〈男〉失格、女々しい（あつ差別用語だ）付き合ひの悪い奴、出世よサヨナラといった〈男〉からの蔑視が待っている。あーあ、どうすればいいのやろ。どっちでもいいけど（などと書く所は、やっぱ男だからだったりして）。

ただし、ぼくのお推めは後者、〈男Ⅱ社会〉からの覚醒。さつきも書いたように女を媒介にしたホモ社会など好みではないので。本物の女のいる社会の方が楽しいもの。

が、すでに〈結婚〉し、〈男〉となっている方々、過激に覚醒して、「離婚じゃあ」は止めましょう。それよりも出来得る辺りから、〈男〉を脱ぎ捨て、〈結婚〉に反対するのではなく〈結婚〉を無化、つまりへ〜を取って非・〈結婚〉へと持つて行きましょう。「反」より「非」。男を〈男〉たらしめている諸々の事を「？」と考える。例えば、黄色いショーンベンのついたパンツを洗わない自由、口を空ければ飯が入って来る不思議、結婚記念日や参観日に有給休暇を取れない（一、三度なら、遠縁の叔父さんに死んでもらったりするのはエンマ様に舌抜かれるから駄目なの？）連帯、三語族を笑えない「おい、お茶」の雄々しいお姿、家計を顧みず「男の料理」をやる倒錯した悦楽等々。具体的行動は仕事がハードで難しい人も多いだろうから、〈男〉から男へ向けての変身

の志を常日頃抱き、今の状態がベストではない、いつかきつとほくだつてというお心で励みましょう。

ぼくの場合、〈結婚〉については最初から〈男〉をパスしてしまった。別に努力したのではない。〈男〉を脱ぐのはじやまくさいから、着なかつただけである。確かに共に暮らしている人と猫はいる（どちらも男じゃない！）。が、幸いなことに相手も又、〈妻〉パスの人だった。まあ、でないと互いに異性と暮らす気にはならなかつたのだろうけど。結婚式も披露宴も、戸籍もみいんなパス。戸籍は素朴な疑問から出発したのである。「入籍ちゆうことはどっちかが、どっちかに入るわけやな。ほしたらどっちが入るのやろ？」慣習は抜きにして二人で三晩ほど考えた結果、わからず（知ってる方、ご連絡を）パス。従つて表札は両名列記。いちいちご近所に「わてとこ入籍してませんね」と言い回る必要もないので、前の借家ではぼくの姓で回覧板が回り、今は相手の姓。そうしていると色々ややこしいこともあるが、紙数が尽きた（便利な言葉）。

以来五年、まだまだ未熟故、かつこ良い自立には至っていない。相方が定職についてしまい、かつて半々だった家事も、ここ一年は五・二でぼくの方が多い。その分収入は一・四になっているが、「これから、まだまだよ」と三二歳になつても考えている日々である。（児童文学者）

## 女にとって結婚とは

——独身女性の増加を考える——

小 玉 美 意 子



女はルンルン、男はミジメ——、これはとりとめのない雑談の果てに達した、独身者に対するある結論。女性の独身者は自由を楽しみながら、独立した一人の人間として充実した日を送っているのに対し、男の独身者は、女ひとりも手に入れることができない甲斐性なしと見られながら、背中を丸めて買物カゴをぶらさげる、という想像図から出てきたものである。

もちろん、これはカリカチュアライズされた姿であって、社会全体を見回して正しくとらえたものではない。女でも、心の中では早くお嫁にいきたいとあせっている人があるし、男でも結婚どころではないというくらい、他のことに生き甲斐を見出している人もいる。しかし、現在の新しい傾向だけをすくってみると、たしかに、女性の独身者はイキイキして

いるのに、男性の独身者は心なしか影が薄くなっている。人間としての魅力や、仕事上の能力を比べると、決してそれらの男性が他の同性と比べて劣っているわけではなく、また、独身の女性と比べて劣っているのでもない。にもかかわらず、なんとなく世をはばかっている感じがするのである。一体これはどうしたことなのか。

そこで、ネクラ（根が暗い——）というところからきた流行語）と言われる三十代の独身男性に聞いてみた。

「正直なところ、結婚に何を求めるのかしら？」

「ウーン」

とうなつてから、こう言うした後でドヤされるかも知れないとおどけて見せながら、こう答えた。



「まず、独身者に対する社会的圧力から逃れること。第二に性的欲求を満たすこと。第三に炊事・洗濯等身の回りのことを自分でしなくてすむこと……」

「ウーン」

と今度は私のうなる番だった。この男性の答えが意外に正直だと思えたからである。もちろん、これと違う答えをする独身男性はいるだろうが、この男性の言うのが男性の立場からの真実をついているように感じられたのであった。

まず第一の社会的圧力。「社会的」と言っても社会全体が彼に圧力をかけているのではない。もっと具体的には親、兄弟姉妹、親戚が早く身をかためると言い、勤め先の同僚や上司が何かと世話を焼きたがる、ということに違いない。この点では女性も同じだ。同じというより、かつては女性の方により強くこの圧力がかかっていた。それは社会的にも経済的にも一人前の人間として認知されなかった女性が、生きていくためのひとつの手段としての意味を、結婚がもっていたからであろう。商品なら新鮮なうちに高く売った方がよいからである。

しかし、今は少し違ってきた。男女平等は未だ不十分とは言いがた、部分的には実現されたところもある。社会的地位も改善され、柔軟思考の男性の間では女性だからと言って

低く見られることも少なくなった。逆に、過渡期特有のひねり現象で、男性と同程度の能力のある女性が、目立って能力があるように評価されることも時々はある。それは、「へ本来女は能力が低いものなのに、その先入観に反して」、あの女性「はできる」という、女性全体への差別観が個別の評価にながっていったと見ることできよう。こうして、男並みに仕事のできる女性は、自分自身の中にもひそむ女性差別観をバネにして、「できる女」「並み以上の女」として生き生きとした生活ができることになる。また、社会もそれを認めて、あの人は仕事ができるから結婚しなくても良いとして、本来、二者択一的性格のものではない仕事と結婚を同列において、女性への結婚プレッシャーを弱めていくのである。冒頭に述べた「女はルンルン」の女とは、主にこういうキャリア型独身女性のことである。

それに対して男性は、仕事ができるのは当たり前と考えられているから、そのことで評価はされない。周囲の人と同じにしなければ一人前でないとする日本の習俗の論理からいって、三十過ぎても結婚していないなんて、それこそ妻を養う能力のない男か、よほど変わり者である。変わり者は自分たちの仲間にしておくことはできないから追い出してしまう以外にない。しかし、それほど無能力でもないし、今まで一緒にやってきた仲間である。それじゃ皆で救ってやろうじやな

いかということ、あるときは冷かし、ある時は心配しながら、寄つてたかつて、独身者を結婚させようとするのである。受け取る側もそれを迷惑六分、ありがたさ四分というのが実状ではないだろうか。一人前に認められたいとする気持は誰にもあるから、社会的圧力から逃れるために結婚するのも悪くはないと思うのである。そして、人はえてして、自分とはともかく他人は変わり者であることを好まないから、今度は他人の結婚のことに気をもむ側に回る。

第二の性的欲求については、個人差の大きいところである。しかし、概して男性はこれこそ結婚動機そのものだと考えているのに対し、女性にはそういう人が少ない。昔だったら恥ずかしいからそう答えないと言えたかも知れないが、性意識の解放が進んだ現在の匿名の調査でも、女性の動機としては大きな比率で出てこないから、やはり性的動機は小さい方だと言えよう。それより女性は精神的、経済的安定を求めて結婚する傾向がより強いのである。さらに既婚女性の調査で、「夫から求められた時、拒否することがある」と答える率が、経済力のある女性に高く、経済力のない女性に低いことが、何かを示していると思える。

第三の家政婦的役割についてはどうか。男は職場、女は家庭

という性役割分担を容認した女性にとっては、家事役割を仕事と考え、その代償として経済的安定を手に入れるのは悪くない。しかし、それに反対する立場の女性にとっては、結婚は家事の発想は返上したいものの代表だから、こんなものを求められて結婚したのではたまらない。ことに仕事を持った女性の間では、「奥さんが欲しい」という冗談が出るほど。男性側の要求とは合わないわけである。

さて、女性の側が結婚に求めるものとしては、すでに所々で述べてきたように、経済的・社会的安定などがあるが、ここでよく強調される精神的安定についても少し考えてみたい。つまり、独身女性が精神的に不安定かどうかの問題である。

これまで、結婚前はゆらいでいたが、結婚して精神的におちついたと述べる人が多かったが、彼女たちの多くは二〇代で結婚しているのではないか——ということ。また、経済的にも力を持ち得なかったのではないか——ということである。

三〇代になったからといって、一生独身を通す決意をするとか、お嫁のもらい手がないとあきらめるといふことは今は少ない。いつでもどこでもだれでも、結婚のチャンスはめぐってくるから、彼女たちはそんなことは考えていない。「その気になれば」結婚しても良いのである。しかし、三〇代に

入り、社会の荒波を十年以上にわたって生き抜いてくると、仕事にもそれなりの自信が付き、経済的不安は少なくなる。

苦境に陥っても「何とかなるわ」という気分がわく。この、人生を乗り切る自信は精神的安定にもつながる。さらに、この頃になると、生活の面でも自分のライフスタイルというのができ上がってきて、居心地のよい環境の中に自分を置くことができるようになる。既婚者の精神的安定が相手を信頼し、相手に裏切られないことによって成り立つ相互信頼関係であるとすれば、独身者のそれは自分を知り、自分を裏切らないことで成り立つ自己依存の関係である。自分をコントロールすること、外界と自分との間をバランスよく保つことができるようになると、独身が楽しくなってくる。

現在、三〇代以上の女性は、子供の時は役割分業観の色濃い教育を受けたので、家事能力を知らず知らずの内に身につけ、それらを苦でなくこなすことができる。そして、大人になる過程で、女性が社会に出て働いても良いことを身をもって知り、その中の一歩は経済力をも身につけた。彼女たちは思考と能力の面で、男女両性の能力を具有しているとも考えられる。このようにアンドロジナスな能力をもつ女性たちにとって、従来の結婚がもつ意味は極端に薄れてきているのではないか。不自由と依存の関係で生きるより、自由と独立の道を選ぶ方が良いに違いない。社会的・経済的・肉体的・精

神的その他色々な意味を含めて、結婚を男女の壮大な取り引きと考えた時、自立した女性にとってこの取引はあまり利益が期待されないのである。

近年、統計にみる独身女性の増加が著しい。その原因のひとつは、このように一部の女性については意識革命が進み、伝統の枠にとられない新しい生き方が出てきていることである。それを世間もある程度認め、結婚プレッシャーを加減するようになった。それに対し男性は、独身者本人も社会も、そしてある場合には啓かれた(?)女性までが、男はこうあるべきとの価値観を押しつけ、結婚が社会人共通一次試験のように言うのである。そして、そこで期待する結婚の内容は相も変わらぬ役割分業であり、本人が納得している場合でも、周囲が伝統的価値観を期待して、新しい生き方に水をかける。

独身女性増加が意味するところは、このように人間の自立と解放についての意識改革の遅れた人々と、幸か不幸か自分のことであつたために真剣に意識改革に取り組まざるを得なかった女性との、意識の差とみることはできないだろうか。

(テレビ司会者)

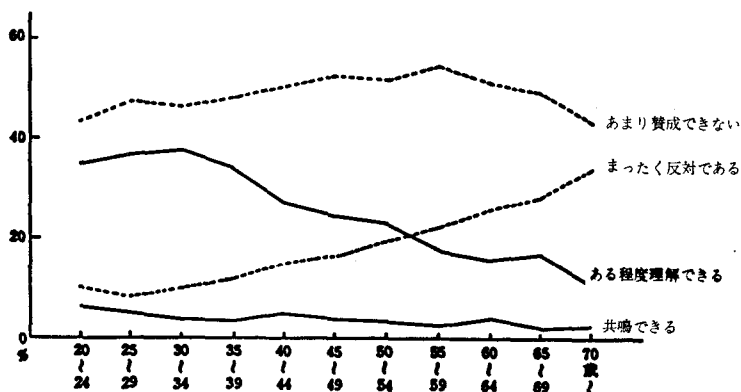
## 2. 離婚観

(1)離婚肯定者はふえるが3割、  
女性が多い

「結婚しても相手に満足できないときは、いつでも離婚すればよい」という考え方について

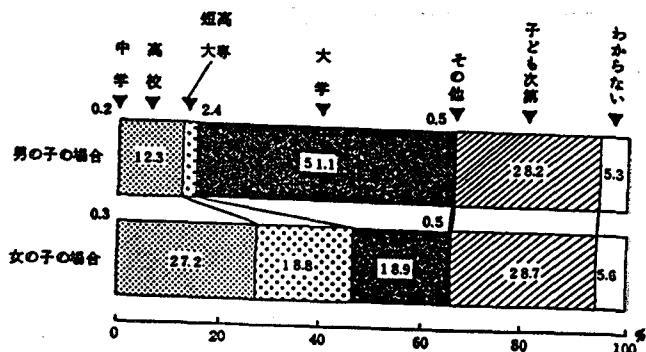
|           | 54年5月 | 59年5月 |      |
|-----------|-------|-------|------|
| 共鳴できる     | 3     | 3.7   | 30.3 |
| ある程度共鳴できる | 21    | 26.6  |      |
| あまり賛成できない | 47    | 48.8  | 65.5 |
| まったく反対である | 23    | 16.7  |      |
| わからない     | 6     | 4.2   |      |

(2)離婚絶対反対と、ある程度理解できるの交叉点は50歳代前半に



## 3. 子どもの教育

(1)男の子は大学へ51.1%，女の子なら18.9%



## 「婦人に関する世論調査」から

総理府は、昭和47年10月、51年8月、54年5月、54年10月、59年5月、59年9月に「婦人に関する世論調査」を実施してきた。一番新しい、59年の調査結果を中心に、過去の調査とも比較しながら、婦人に関する意識の現状と推移をつかもう。

ここには、特に「結婚」にかかわる項

と「子どものしつけ・教育」「家庭科教育」「性別役割分担」「男女平等意識」などを紹介する。

なお59年5月の調査対象は全国20歳以上の者10,000人、9月は全国20歳以上の女性3,000人である。

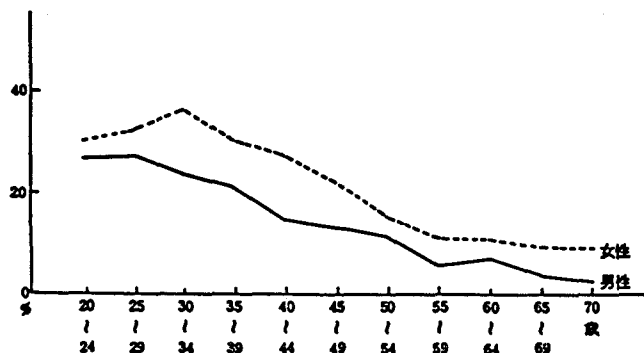
### 1. 結婚観

#### (1) 変わりつつある結婚観

「あえて結婚しなくてもよい」は男14.7%、女24.1%

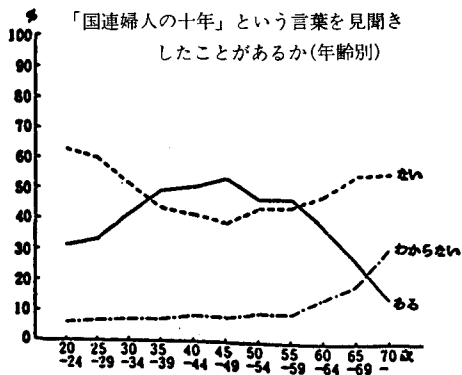
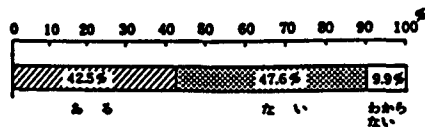
|                                  | (女 性)  |       |       | (男 性)  |       |       |
|----------------------------------|--------|-------|-------|--------|-------|-------|
|                                  | 47年10月 | 54年5月 | 59年5月 | 47年10月 | 54年5月 | 59年5月 |
| ① なんといっても女の幸福は結婚にあるのだから結婚したほうがよい | 40 %   | 32 %  | 30.4% | 36 %   | 33 %  | 32.9% |
| ② 精神的にも経済的にも安定するから結婚したほうがよい      | 21     | 21    | 21.8  | 22     | 23    | 20.7  |
| ③ 人間である以上当然のことだから結婚したほうがよい       | 20     | 18    | 17.6  | 26     | 22    | 22.1  |
| ④ 一人立ちできればあえて結婚しなくてもよい           | 13     | 23    | 24.1  | 7      | 13    | 14.7  |
| ⑤ 結婚は女性の自由を束縛するから、一生結婚しないほうがよい   | 0      | 0     | 0.5   | 0      | 0     | 0.4   |
| ⑥ わからない                          | 6      | 6     | 5.6   | 9      | 9     | 9.3   |
| 計                                | 100 %  | 100 % | 100 % | 100 %  | 100 % | 100 % |

(2)「あえて結婚しなくてもよい」は、30～34歳の女性が最高 (36.6%)



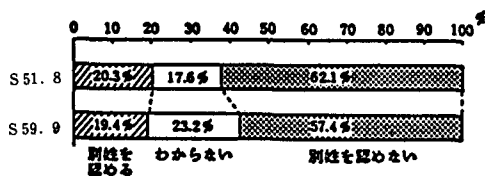
- (3)「国連婦人の十年」の認識い  
まだし  
「見聞きしたことがない」は  
20歳代で60%を越す！

「国連婦人の十年」という言葉を見聞きしたことがあるか

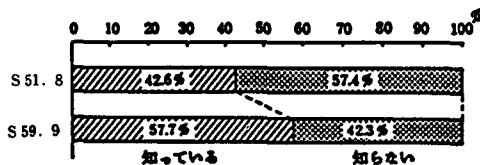


## 5. 夫婦の姓

- (1)夫婦の別姓を認めるか

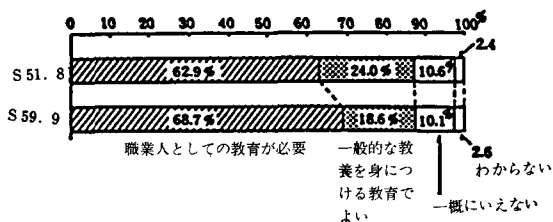
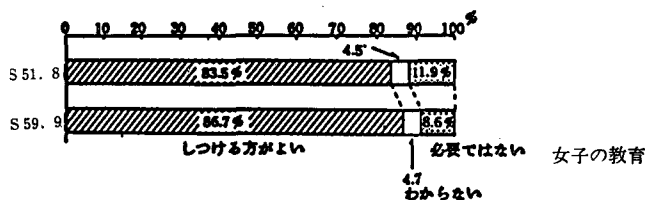


- (2)離婚した女性が結婚中の姓を  
名のってもよいことを知って  
いるか

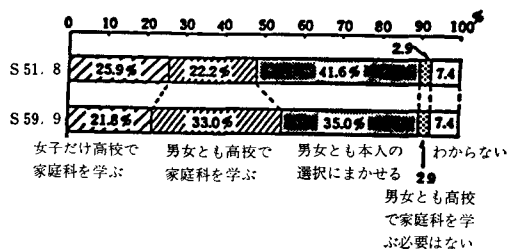


- (2)男の子も身の回りのことを  
女の子も職業人として自立できるように

男の子の食事作り、ボタンつけ等

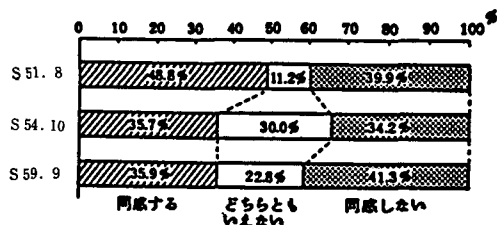


- (3)「男女共に家庭科を」はす  
「女子だけ」は2割強

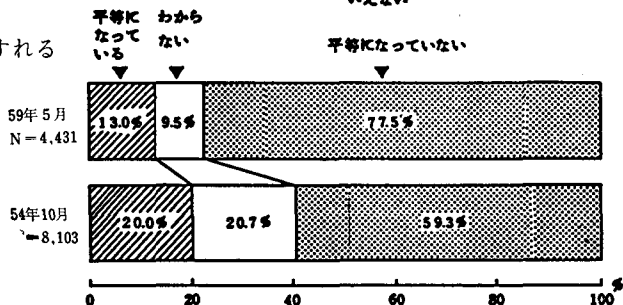


#### 4. 性別役割分担, 男女平等など

- (1)「男は仕事・女は家庭」  
同感しない<同感する



- (2)男女の地位平等感うする



(対象は女性のみ)

## 母や祖母たちの結婚

平井和子

『広報といまち』（土肥町）の「郷土の昔話」欄に、めずらしく女性の事が載っているのを見つけた。要約すると、「文化二年（一八〇五）、土肥村のりせの孝養・貞節ぶりが幕府に聞え、葦山代官江川太郎左衛門からも青さし錢三貫文が下された。表彰の内容は、『舅を大切にいたし、先妻の子をいくし、その子も実母同様に慕い親子の情愛厚く、舅が難病にかかりし時は、吐痰を吸取り、且両便不通の節も種々心を尽し、夫へも貞節を尽し、男女の子供を養育いたし、実母に對してもねんごろに安否を相尋ね、常々の行跡宜敷万端定意を尽し、夫も又、真実の者にて、親族は勿論、近隣の交りも親しく農業に精出し、奇特の儀に候事云々』となっている」ということで、筆者の郷土史家氏（男性）は、「私たちの町

の誇りです」と結ばれている。

私はこれを読んで、「なぜ、直接関係のない幕府が褒美をくれたのだらう？」と、不思議だったし、女の立場から実感として、「りせさん、さぞしんどかったでしょうに」と思った。室町時代以降、女の地位低下が進み、江戸時代には三從七去を説く女訓書が、体制を黙々と無償で支える力として、女性差別の意識を上から下へ張りめぐらせつつあった。「孝婦りせ」は、正に当時の権力にとって、「期待される嫁像」であり、都合の良い「女の鏡」であったのだ。なんの痛みも感じず、「私たちの誇り」という感想しか持たない郷土史家。だから、歴史を男にだけまかせておかれないんだ。

「孝婦りせ」は、江戸の昔の女性ではなく、明治大正を生きた母や祖母たちでもあり、そして、私たちも男たちが作った美名の下、「孝婦りせ」にされかねない。

ある日のニュースで、県内の引佐町役場が、町内で寝たきりの親を看護しているお嫁さんたちに、表彰状を贈った、と聞いてびびくりした。表彰された約五十人の五十代くらいの女性たちの表情は、どれもとまどい気味（それだけが救いであつた）。表彰状と記念品。なんと安い福祉の肩代わりだろう。



結婚について、この地の農家のおばあさんたちは異口同音に、「家に縛られた結婚だった」という。Oさん(73)は、「父の都合(養子であった)で、家と家とをしつかりと結ぶために嫁に来さされた」といい、Sさん(80)は、「恋愛は恥で父に反対され、駆け落ちです」と。Oさん(91)は、「日露戦争へ出征中の人の所へ嫁に来た人があり、毎晩無事帰れるようお百度を踏んでいたよ」といい、Iさん(62)は「出征中の夫の所へ嫁ぎ、大家族の世話と農業に明け暮れ、夫婦二人きりになれたのは、里帰りの時、あの山の麓まで荷物を持って送ってくれた、一度きり」という。

どのおばあさんたちも、この地の農家にとって唯一の現金収入である「お蚕さん」のため、幼いうちから桑を背負って奥山を往復し、Kさん(84)は、「オギヤーと生まれてから重い物を背負いばなしで、こんなに腰が曲がるです」という。学校を出ると待つてました、とばかりに、Yさん(73)は土肥金山へ選鉱婦として、Tさん(63)は峠を越えて奉公に。強力な家父長権の下、娘は無償の労働力として、口減らしとして、働かされた。結婚に際しては、労働力として、後継ぎを産むために、家長と家長の間で取り引きされた。言葉を読み込み、口をへの字に曲げて女たちは働きに働き、際限なく続く細々とした雑用も一人で受け持つて来た。家長を頂点とする一軒一軒の家が、実は天皇を頂点とする巨大なピラ

ミッドを支え、色々な差別を温存し利用することに役立って来た。

今、中曽根総理は家族制度を「日本古来の美風」といい、結婚式場では、〇〇家と〇〇家の結婚式、が何の疑いもなく行われている。そして、母や祖母たちの口から、「嫁にやる」「片付ける」「手間をもらう」という言葉が何の痛みもなく出て来ることが悲しい。それは、飼ひ慣された奴隷の言葉である。

農家の長男の嫁として苦労して来た夫の母が、年末の慌ただしい中でぶつかって夫婦喧嘩となり、その苦労の原因を、父への個人的恨みにしていることが分かった。私はその奥に、でん! としている伝統的家族制度と対決せざるをえない。その最大の被害者である母は、しかし、家を主体に、人間の方を付属物と考え、無意識のうちに自分を苦しめていたものを温存し、新しい加害者として生きようとしている。

こういう両親を、夫は、「死ななきや直らないさ」と、のんきに構えているが、これこそが、私につきつけられた、逃げられない問題である。女性史を本気でやって行こうと思っている私の生き方が厳しく問われているのだ、と思う。

結婚のありよう―それは、私にとって闘いの原点です。

## 「せめぎあい」の中で

日比野 幸子

正月休みがあけてUターンしてきた友人たちの口から一斉に不満が吹き出してくる。

Aは、十二月三十日まで仕事であったが、風邪で発熱したので三十日は仕事を休んで、家の中を急いで片付けると夫の実家に向かった。夫の方は二十九日から休みに入り、子供たちと一足先に帰省していた。大晦日から新年の五日まで、男たちは朝から酒だ、麻雀だと遊び騒ぎ、彼女は姑と裏方に徹して酒肴の用意、食事の仕度、後片付け、洗たく、子供たちの世話と目まぐるしく働き、五日の夜自分の家に着いた時は疲労と腹立たしきで夫と口を聞く気にもなれなかったという。一年中働いてやっと自分の休みがとれて、読みたい本もあり、見たい演劇・映画もある。日常働いているがために後まわしになっている精神的飢えを癒したいのに、裏方は女の

役と決まっている。たまに家事の手があいても姑や義妹相手では話題がない。息のつまる五日間だったので、来年は二度とこんなことはしないと夫に宣言したという。

Bは教師なので、十二月二十四日に同僚の男性とお互いに持っている本を十冊ずつ交換して、冬休み中に読んでくるところを約した。ところが年末に少し掃除を始めると、とめどもなく汚れが気になり、夫・子供を動員したが、中心になって動かなければならないのは彼女である。結局大掃除に三日間つづれ、その後は正月の用意に忙殺されて予定の半分も本が読めなかった。掃除をしている間中、彼は今頃悠悠と本を読んでいると思うと悔しくて……と彼女は怒る。来年は何とか対策を考えなければと言う。

Cは正月は温泉ですぐすと割り切っている。今年もホテルを予約し、用意万端整えたところで、舅が脳血栓で入院した。予定は全部中止し介護にふりまわされた。老人問題が目前に迫ってきたと、表情も普段より暗い。

核家族で夫婦で働き、仕事も家事もこなしつつ主体的に生きている女たちも、いったん夫の実家、自分の実家に帰るや、単なる「嫁」「娘」としての昔ながらの女の役割が待っ

ていることを思い知らされる。外に出ると七人の敵がいるのは、男ばかりではないのである。

男と女のかかわり方のほんの一つの形だと思って結婚するや否や、世の中は自分たちが温存している役割を要求してくる。いわゆる「妻として」「嫁として」「母として」の良妻賢母型の役割に順応するためには、女自身が自己を明け渡さないう限り不可能である。それはちょうど男たちが就職する時、企業に自分を明け渡して企業の立場のみで物を見てゆくことが要求されると同じである。そこにあるのは「役割」としての人間、だけなのである。

独身時代、あるいは結婚当初、個性的で魅力に満ちていた女たちが、だんだんつまらなくなるのは、徐々に「自己」を役割に明け渡し、自分を育てなくなるからである。自己を明け渡した自分や、役割人間に徹している自分が見えなくなるからである。

昨年の夏、僻地で教師をしながら二十代をすごした従妹の結婚式に出た。その式が全くホテルの定石どおりの式だったのであきれていると、後で「自分はこんな式にはしたくなかったけれど、親や職場のことを考えるとこうなってしまう……」と嘆いたという。自分たちの出発点から周囲とせめぎあう気をなくしては、とても自分を育てていくことはできな

い。結婚するにしろしないにしろ、ちゃんと生きようと思えば「せめぎあい」の連続ではなからうか。仕事の場で立派に「せめぎあい」女でも、家庭でせめぎあわないのなら、仕事上のそれも本物かどうか疑わしい。仕事での「せめぎあい」は、建前が先行することが多く、それは知識や理性に依拠できるが、家庭でのそれはもっと奥深い意識のもとでの「せめぎあい」である。意識が変わらないで思想や主義を論じても、所詮根無し草である。せめぎあわない女に限って被害者意識が強く、「女は損」で終わってしまう。あとは夫や子供の話で終始し、夫や子供の話も客観視できないので自慢話の域を出ない。自分をも突き放して何もかも相対化してこそ、次にすすむ契機がつかめるというのに。

私が結婚した時、先輩が下さった手紙の一節に、「結婚は夫を育て子供を育て、さらに自分を育てなければならぬので大変ですね」とあった。私はこの中で一番肝心なのは自分を育てることにあると思っていた。前述の友人たちが好もしいのは、押しつけられた役割を演じつつも、そこからの脱脚をめざし、脱脚の理由に自己を太らせることをおいている点である。自分たち女が豊かにならないかぎり、夫も子供も育てられないと思うからである。

この一年の彼女たちの健闘を期待したい。

## 専業主婦の場合

加藤 弘子

結婚して十三年、二人の子どもができてふつうの家庭生活を送っている私、三十七歳、専業主婦。夫は矯正施設に勤める公務員で転勤のための引越し三回、現在の住まいも職場と同じ敷地内にある官舎です。私のいうふつうの家庭生活とは、子どもの成長を喜び、病気を心配し、限られた収入で何とかし、夫と足並みがあわなくなるとふつと離婚の手だてを思い描いてみるが実行せず（するのふつう）、人生が一幕の猿芝居ならば、まずはがまんすべしと、従来の性別役割分業にいそしみ、夫に扶養してもらっている生活のことです。

女性の約半数が就業ときけば、残り半数の一人としては呻吟しつつ、生計の糧を得る側の身分でないことが不服に思え、我ながら卑屈に生きているなど自嘲することもありません。昨年の暮れ、近くに住む夫の両親と秋田に住む私の両親に厚手の下着を送った時のこと、後日電話で気の毒そうにい

う母のことばに苦笑しました。「夫のとってくる給料は気がねなしには使えないからね。これで十分、ありがとう」。やっぱりジャケツトくらいにすればよかったかと、手拔きの孝行を恥じるはめに。おしなべて自分の身内や知人の慶弔費なんか、夫に対して遠慮してしまうのです。

そんな些事の中で感じる主婦の悲哀、長男の嫁というかたがきの抗しがたさ、その上やはり内なる敵、我が自身にひそむ性差意識に一瞬ひるむのです。やりもどせる人生ならばと一人悶々として結婚記念日を忘れていると、夫が私の好きなワインなんか買ってくるのです。どうして相性が悪いの、生き方をかえろのと丁発止やり合うことができましょう。夫の優しさにこたえるべく、笑顔をうかべながら心の中はぶあつい黙示録になっていくのです。「長い支配と被支配の関係の中に浸されてきた人間関係の意識は、他者を隙あらば物としてみようとする。それは雄雌の長い支配被支配関係にこそ最も露骨にあらわれている……」（高橋和己著『黄昏の橋』）私も夫も東北の人間、だから良くも悪くも東北にこだわります。木村伊兵衛氏の写真集『秋田民俗』の昭和三十年前後は、ちょうど私の子どもの時代、当時のムラ社会の慣習や封建性の中で、分家の子というやや肩身の狭い思いのほかはくっ

たなく育ち、そこにお嫁さんがくるといえば大勢の子どもの中に混じって見物にあるいたものです。どのお嫁さんもきれいで人形のようにでしたが、二、三日もすると化粧をおとして別人のような女の姿となり、いそいそと嫁ぎ先の家人と共に働き出すのでした。そのたびに子どもの私は単純に、でもなぜかがつかりしました。このころ、嫁とは、乳役兼無角牛にたとえられていたのでしょう。男尊女卑が正義だった頃を思い出すのも、昭和六十年の東北人の意識が、底のところではあまり変わっていないという気持ちのせいです。

宮城の女性に鈴木梅子という人がいて印象的なことを残しています。「読書で新しい時代の風潮を知るにつけ、人間としての本質、女性としてのいきがいを見出そうと苦悩したが、封建的家庭の殻から抜け出る道はついに見出されなかった」(中山栄子著『宮城の女性』)

またかつて会津美人とうたわれた若い女性の弁、「カカア天下は世間がさげすむ、能力があるほど夫をもち立てるもの」(毎日新聞社編『東北人』)。会津には武家教育の名残りで良妻賢母教育の土壌があるとか」

すると私も伊達藩主のおひざ元仙台の古い家柄の長男と結婚したとなれば、夫をたてよという妻のたしなみを、夫の母から説かれたこともうなずけるのです。夫の生家の床の間の掛け軸が教育勸語のそれであったことも、いかにじやじゃ馬

といえども口に出さぬ分、私の驚きは大きく、その掛け軸と対峙して思いました。「イデオロギーの相克だ」と。「私はいへの嫁ではないですよ、一人の男と生きることにした一人の女で、自由が好きですよ」こんなことも、声高に叫ぶかわりに、ぬらりくらりと周囲をかわしながらつぶやいているうち十三年がたつたんですね。

結婚し、家庭の中で扶養される立場の女は、武器といったら時間しかない、その時間を使って生きることの思想とか信念、思惟信条をつくり上げること、これは家庭における女の孤独です。夫と共に生きることとは、私の場合、いへの長男然として彼の生き方の背後にあるものとぶつかり合うことになるし、夫の職階が妻のそれでもあるかのような官舎の暮らし方をおかしいと思えば、それも目の前に立ちふさがってごわい壁となります。さらに「離婚なんかしないで」と十歳の息子にいわせる分、私たち夫婦には負い目もあります。「家庭の教育力の原点は、一対の男女の生き方と『観』の問題」(須長茂夫著『自立のための子育て』)だという点で。どんなに結婚式がいまふうに行われても、両家ということは重宝されている様子。招待状の送り主にしても、両家より当人たちである方が、主体的に生きることにつながるということを、鍛冶千鶴子さんの『いま、夫婦って何だろう』で考えさせられました。

## 結婚を、私はこう位置づける

### 西 風 弥 生

九歳の時に母を亡くして以来、私は家庭というものの埒外で勝手に育ってきたような気がする。厳格な父や気の合わない継母との間に心を通い合わせる道筋もなく、家庭はただの冷え冷えとした宿りに過ぎなかった。だから、北陸の片田舎の高校を卒業すると、躊躇なく東京の大学を選んでいたので、大学を卒業する時は、親から経済的にも離れたい一心で就職の道を選んだ。

就職の壁はあつかった。男子数十人に対して女子の採用はゼロないし一名という新聞社、面接で「将来ケツコンするつもりは？」などと男子になら決してたずねないような奇問を發する出版社……軒なみだめだった。あの時、自分の力不足のせいだとナゲかずに、どうしてもっと深くイカらなかつたのだらうと、いま思えばフシギなのだが、敗戦の年に小学校一年生だった私は、曲りなりにも民主主義教育の洗礼をたっぷり受けていたし、温室的ながらアメリカのよきリベラリズム

ムがただよう大学で青春を送った。男女差別のありように眼を開いていなかったわけではない。ただ、戦前と違つて男女の平等が法的に保障されているのだから、女の一人一人がもつとドリヨクさえすれば、出産と授乳能力の有無だけからくる性差別などヒツゼンのに消滅していく——そんな甘い幻想が認識の底にあつたのだらうと思う。

しかし、女の生きにくいしくみが、個々の努力だけではどうしようもなく根強いことを思い知らされたのは、結婚にかかわる問題に向き合わされた時だった。就職が不首尾に終わったあと、ある青年組織で機関紙編集のアルバイトをするようになった私は、そこで一人の男性と出会い、共同生活がはじまった。結婚というカタチにとらわれるのがいやで、あくまでも共同生活のつもりだったから、結婚式も挙げず、姓も変えず、仕事はもちろんそのままつづけた。

ところが、彼が国会の選挙に出るようになったとたん、私のつもりはなしに崩れていった。「候補者のオクサンは正式のオクサンでないと困る」「政策ビラや公報の原稿作りなどしなくてよろしい。オクサンには演説会や座談会に出て頭を下げてもらわないと……」周囲の圧力におされて、私は「正式の奥さん」になり「主婦」になっていった。いくら

自由でいたいと望んでも、よほどの自覚と強靱な意志がない限り、女をややすやすとその枠組みの中にかからめとりしぱりつけてしまうのが制度としての結婚なのだ。しかし、負け惜しみのようだが、からめとられてかえってよかったのだと、いまでは思っている。男性優位の社会を支え再生産する結婚制度の枠の外にいては、身をもって実感し見ることができなかつたものを、自分の問題として抱えこむことができたという意味で。大方の女が受ける痛みを共有できたという意味で。

奥さん、家内、主人、父兄、嫁にやる、かたづける……といった類いの言葉がいまもすたれずに活躍し、子どもが学校に提出する書類の保護者欄には通常父親の名前を記入するのが慣いとされ、夫はいつでも自由に外へ出て行けるのに、妻が家を空けると一大決心が要る。

育児についていえば、母親まかせのいまの状況は、ちょうど、土俵に上がっているのはPだけという、PTAの片肺的症候に似通っている。TをひきこもうとあれこれやってきたPTA活動八年後の結論は、結局教師の自覚にまっよりほかないという、残念ながら後ろ向きのものであったが、父親の育児への主体的な参加も、その自覚をまっ上で制度上の保障を要求していく、たいそう気の遠くなるような手続きでしか実現しないのだろうか？ 出産、授乳の時期では母親が当然育児の主役を引き受けることになる。しかし、小さな生

命の毎日の生長に寄り添うことによって、自分の内部にも人間らしいしなやかな感性を回復し育んでいくという、この煩雑で素晴らしい営為を母親だけがあとあとまで独占していては、もう一方の親に対して気の毒というものだろう。

そしてたとえば、意地悪い見方をするなら、通例夫は妻より年上であることによって、老後と死の面倒を妻に見てもらえる確率が高いという点でも、結婚制度は男にとつてたいへん都合のいいシステムになっているのである。女にとつても永久就職という見方からすれば、これまた都合のいいシステムなのかもしれないが、それなら、時には夫にイヤな顔をされながらも敢然と再就職し、ハナもアラシもふみこえてパートに出かけていく主婦があちこちで増えつづけているのはどうしてだろう？

いま、大勢の妻たちが、どこかおかしいと思いながらあるいは家事や育児に明け暮れ、あるいは家庭と仕事の両立に奮闘している。そして大方の夫は決してそんなギモンは抱かず、仕事か家庭かと決して悩まないのだ。身のまわりの世話を妻や母親にさせ、それを当然だと考えている男たちが行い論じる業績がどんなにすぐれたものであっても、私にはそれをすんなり認めることができない。

認めることができないと頑張っても、ゴマメノハギシリになっ

事を自分の生活の中心にすえ、ざっと二十年の出遅れをいささかでも挽回しようと馬力をかけている。家事については、足の不自由な彼には自分の身のまわりのことしかしてもらえないが、高一の娘と中二の息子の手に行き渡るだけ分散し、また家族とのつきあいは、お手本を知らずに育ったのを幸い、我流でやらせてもらっている。子どもたちからは「へんな母親」とからかわれるのだが、とにかく、彼らが将来もし家庭を持つようになった時、それが、精神的・経済的・生活的自立を遂げ、もしくはめざす人間同士の結びつきの場となるよ

発言

## 「結婚」を、私はこう位置づける

大 嶋 正

「こんにちわ、あら、どうしたの？ うかない顔して」  
「原稿が書けない。『結婚』を、私はこう位置づける』というタイトルなんだけど」

「へへえ。で、どう位置づけてるの？」

「それが自分でもよくわからないから、こうして真っ白の原稿用紙を前にうなっているのじゃない」

うに、なんとか効果的にじわじわと、「へんなこと」を彼らに吹きこんでいきたいものだと思っている。「女ってソンやわあ」とぼやきながらオオしく頑張っているパートの主婦が、私のまわりにたくさんいる。これからも増えはしても減りはしないだろう。彼女たちがぼやき合いの中から矛盾の奥にあるものを見きわめていく過程で、そして一方、いまの娘たちが結婚志向型の情報の波に囲まれて成長していくその先で、女と男の結びつきかは少しずつでも変わっていくのだろうか、変らないのだろうか？

発言

「ところであなたは結婚しない主義の人なんですよ」

「主義ねえ。というより自分が結婚するというのが考えられないといったらいいのかな」

「むかしからそうなの？」

「そんなことはない。中学生の時に書いた『二十年後の自分』という作文なんて、典型的なマイホームパパだもんね」  
「それがなぜ今は」

「やはり人との関係の中で現実を認識したんじゃない」

「というところ？」

「つまり、一夫と一婦でお互い貞操を守って、という具合にならないのが恋の常で、かなりややこしい関係に巻きこまれ



たりするのが、私にとっての現実だったわけ」

「いわゆる不倫の恋ね」

「大体、なにが不倫だ。それって自分たちは傷つかない所でしたり顔している手合いのいう言葉じゃない」

「まあそう熱くならない。つまりあなたはあくまでも恋愛の純粋性を追求したいんだ。ロマンチストだねえ」

「何とでも呼びなさい。あなただってその口じやない」

「それはともかくあなたも誰かと一緒に住みたいという気持ちがあったからそうしていたのだろうし、今でもあるのでしよう？」

「うん」

「その時に婚姻届を出さない、ということとは大きな違いがあると思うのだけど。周囲が、あの二人は結婚しているんだ、

発言

## 結婚して思うこと

林 直子

私は昨年五月に結婚したばかりで、まだ子供はいません。それでも夕方五時半に会社が終わって家に帰ると夕食を作っ

という認識をもつことってあるじゃない。おひろめのパーティーをやるうものなら特にそうね。大体、『私たちはセックスなんかしちやっているんだ』って言ってるみたいで私は嫌なんだ」

「一緒に住んでながくいれば、関係が結婚に近づいてくるじやないか、と言いたいのか？」

「そういうことかしら」

「当人たちの意志とは違うところで……結婚に近づく？……（ぶつぶつ）……あー、わかんなくなった。結婚という言葉を不用意に使ってきたけど、結婚って何だろうね」

「それをどこかに位置づけるのが今回のあなたのテーマでしよう」

「はあ、全くその通りで」

発言

て食べて、片付けをするまでは仕事が終わったことにならず、月曜・火曜あたりは機嫌がよくても、水曜・木曜あたりになると、なんとなく夫にあたりちらしたりして、後になって反省したりすることが多いこの頃です。

夫は料理好きで、男のメンツなんて考える人ではありませんが、しばらく一緒に暮らしてみてもわかったのは、たとえばいため物はできるが、煮物はできない——というような技

術的な困難さがあることです。本人もせっかく作ったのに失敗すると気分を害するようですし、自分でも情なくなるみたい。「なんで中学・高校でも必修にしてくれなかったのか」と考えてしまいます。

私の友人の男性たちは皆、小学校でやった家庭科のことを、それはなつかしそうに、楽しそうに話します。考えてみれば、男性たちにとって、小学校の家庭科を終えてしまうのと、料理、ミシンを使う、編物、洗たくなんていうほのぼのとした作業とは、一生縁が切れてしまつて、一種のなつかしさみたいなものを感じる世界になつてしまふのではないでしようか。

それでも最近、編物がとてもうまいイラストレーターがいたり、糸井重里なんかでも「家庭科」の思い出について書いていたりして、中学校へ行つて、突然「女子は料理」「男子は棚作り」と分かれてしまふあのしらじらしさに對する疑問はだんだん広がってくるだろうという期待感があります（私だってコンセントが切れた時に直す技術、家庭の方も習いたかった！ 大学で演劇部に入つて、初めてコンセントが切れたのを直した時は、なんと簡単なことを人まかせにしていたのだろう、とあきれました）。

ほんとうに中学・高校で生活科Ⅱ家庭科を必修していないのは時代遅れだと思ひます。私が、男性の家庭科の先生がいらつしやるというのを聞いて思つたのは（小学校では教員免許のシステムがどうかのかわかりませんが、中学・高校の先生で家庭科を受け持とうと思つても、免許状をとる機関がないのではないかということです。家政学部が全部女子大にしかないとなれば、男性が家庭科の教師になるためには、通信教育に頼るくらいしか方法がないこととなります。それなのに、家に帰れば夫も料理をするし洗たくもする（または、せざるを得ない）……なんだか変ですよ、これは。

これからしばらく、「家庭科」のことについて考えていこうかなあと思ひています。やはりひとつは家庭科そのものの内容を考える問題、もうひとつは必修を実現するための問題です。この二つは並行して考えていかななくてはダメだと思ひています。

\*

## 男子が張り切る料理コンクール

山 口 富 造

国際婦人年を期して、埼玉県嵐山町に創設された国立婦人教育会館には、シャレた試食堂まで備えた調理教室が設けられていることを、この欄の読者はご存知だろうか。

ところが、なぜかあまり利用度はかんばしくないときいた。

そこで春秋二回恒例の学生の社会教育施設合宿をこの会館で行うときの主な行事として、「調理実習」を組み込み、これを通じて、食の現状を語り、あわよくば若ものをめぐる暮らしの問題に迫ろうとひそかに目算<sup>めくろ</sup>んだ。もちろん、男女学生がチームを組んで文字どおり「実習」をするわけだ。

参加者は私の勤める教育学部の学生のほか、私と妻が非常勤で行っている学校二校、合計約四〇名。

さて、当日、調理台の前に男女混合で四名ずつ半信半疑の態で立っている学生の前に、使い込んだエプロンを一着に及んで現れた私たち夫婦の格好は、学生たちの「遊び心」をい

たく刺激して歓声があがったが、当の私としては、あくまでも日常の講義に関係のあるいわばマジな「意図」を、この合宿が終わるまでには分かってほしいと願っていたのだ。

その「意図」とは——かつて私は某女子短大に務めていた。昼食時、調理実習の「試食」を依頼された私は、一食のご馳走にありついた代償として、「評価」を求められたものだ。そこで私はこう学生にたずねたものだ。

「この料理の材料は、どこで、いくらで購入したの？」

そして、「この料理にしようときめたのは誰なの？」

「試食」を二人がかりで運んだ学生は、「妙なことを聞くオジサンだ」という顔を見合わせて事もなげにこう答えた。

「材料は助手の先生が昨日のうちに業者に注文しておいたのです。私たちが教室へいったときは、必要分が洗って調理台の上においてありました。誰がきめたか、ですって！

先生にきまつてるじゃありませんか」

私はイラ立ちを抑えてこう聞いた。

「じゃあ、君たちは、誰かが、どこかで買ってきた材料を使って、誰かがきめた料理を、黒板に誰かが書いた手順どおりにきざんだり、焼いたり、煮たりしただけなんだね」と。

鼻白んだ面持ちで去った二人が、その後、「試食」を運び

つづけてくれたかどうか、残念ながら憶えていない。

しかし、こんなの、料理じゃない、という思いは、あれから二〇年たったいまも、頭の隅にこびりついていた。

料理とは——私の体験によれば、献立の立案と計画。材料の選定と購入。保存と管理。下ごしらえと調理。そして食事。さらに後片付け、食器、道具の洗浄と始末の一切の流れを指す。

どうやら、学校では、料理のごく一部分しか教えぬらしい。

男どもが、料理を女こどもの家事の一部としておしこめておいて、経済戦争という男の闘いに明け暮れている間に、料理観がすっかりゆがんでしまったように思えてならぬのだ。

さて、わが「調理実習」のほうに話をもどそう。

材料費は一人五〇〇円以内、所定時間内に献立、材料の購入、調理、配膳の一切を完了するという条件でスタート。

四人で額を寄せての作戦会議ののち、買物は楽しくなくちゃあ、とぞろぞろ街へくり出すあたりさすがは遊び心も心得た当世の若もの。それにしても自炊の腕前を発揮して生き生きとハリキル男子、アラ、おソースがちがうわ、などと枝葉末節の料理常識をふりかざしてオロオロする女子。日頃、教室では見られぬ表情と仕草を垣間見せてくれて教師たるもの興味しんしんだった的一幕だった。

五〇〇円の材料費をどう工面したのか、安もののワインまで添えて小ぎれいに盛りつけて満足気な一同が、話題にとりあげたのは、そこいらの料理教室の先生が猫なで声でしゃべる料理のヒケツなんぞではなかったことはいまでもないことだ。

それにしても男子がハリキリ、女子がシラケ気味だったのは何故だろう。

料理をわがことと考えずにすむ教育を受け、卒業後も性別役割人生が待つ（と思っている）男子にとって、料理はいわば異国の楽しいお遊びであるにひきかえ、女子にとっては卒業後の妻の座にいやでもまつわる「家事」の一部として、早くもウンザリイメージしか湧かぬものだったのではないのか。

「料理は、ことに今日のように複雑に発達した流通経済の下では、高度な知的判断を要するすぐれて文化的行動なのだ」「だからして、男性にこそ料理を通して生活者として自立を、いや今日では女性もだ」……

その夜、会館のレストランをボーコットして試食室に坐りこんで行われた料理と性別役割をめぐる討論で、私はワインのグラスを重ねながら二〇年前のできごとを思い出して昂奮し、高邁な食文化論の割には下手な手料理を前にしてシャベリまくったのだった。

（群馬大学）

# 憧憬の王子様

## 大 仏 レ ア

およそ未婚女性が、結婚を想像し夫を夢見るとき、それは「王子様」の規格化ではないでしょうか（背が高く、ハンサムで、逞しく、生活力があって、優しく）。もちろん、男性からの「王女様」の規格もあるでしょう。規格・選別の条件にかなうのは、様々な差別を肯定した結果残る人なのです。

そして、ふるいの目にひっかかることのできない人の多くにいろんな意味での被差別者が含まれているのではないのでしょうか。いまだに社会において結婚ということが「一人前」の人格として認められるのに必要なこととしたら、それらの人々は人格すら否定されているとも言えるのだと思います。

幼い頃からの障害者との共同生活の中で、差別する・差別される惨めさを骨身に浸みて知っていると自惚れていた私

は、自分の結婚について「好き」とか「愛」とかいう言葉を使うのをおそれていました。夫となる人に対する感情は、実は他者との比較・選別を行っているのではないかと常に考えていたのです。

「もしも、私があなたと結婚するとしたら、それはあなたが障害者でもなく、低学歴者でもなく、被差別者でないからかもしれません」。十年近く前の小雨降る終戦記念日に、昼食を共にした彼に、私が答えられたのはこんな言葉でした。

結婚する事が具体的にになると、父はそれまで障害者運動と一緒に闘ってきた人々に「どうして和尚の娘が健全者と結婚するのだ!!」と突き上げられたのです（婚姻届けには未成年だったので親の承諾書が必要でした）。私自身、やはり言われたかという思いと、どうして個人の解放・自立を叫んでいるはずの人々が、誰その娘だからという考え方をするのかとがっかりしました。

夫婦とは、男女共に互いの人格を認めあった上で成り立つと、そして、自己を主張することがあらゆる差別から解放される道であると、私は夫に別姓婚を申し入れました。

それは、夫の「家」に対する反発ではないか、私の姓を名乗るのは自分の「家」を名乗っているにすぎないのでは、と

いう自己反問が続きました。

今は現実との妥協のように入籍しています。嫁として、妻として仮面をかぶった生活をしている自分の中から、障害者問題・差別問題から抜け出ることはないだろうとわかった時に、自分の言葉で語ろうとして選びとったのがWeに載せていただいている名前です。私の生まれた時からの名前です。

発言

## 家庭科教育に関する検討会議の

「報告」を読んで

福 留 美奈子

待望の「報告書」。まず、戦後の教育史の中で初めて家庭科教育に公的レベルでスポットがあたり、意義や重要性が明記されたこと。「撤廃条約」の精神がわずかながらも生かされ、「女子のみ必修」に終止符が打たれたことなどは大いに

昨夏、父が死にました。両親にとつての、「結婚」「家族」の意味は何であったのかと思ひめぐらしながらごたごたした葬儀の後片付けをしていると、居合わせた方々の一人から、「どうして和尚の娘が、なんちゅうか、エリートと結婚したのか不思議だ」と言われました（実物の夫はエリートから程遠いのです）。その時に、私はこう答えました。「それは結婚が最大の闘争の場だからよ」。

評価できるように思います。

しかし、その重要性を提起しながらも、「女子教育や母性教育での役割」と「男女が協力して家庭を築いていくという観点から、男女共に学べる内容に改善を」という指摘があったと提示するだけで、本検討会議自身の家庭科教育論及び教育観そのものが明記されてはいません。

しかも、履修について、高校では、選択履修とし「新しいタイプの家庭に関する科目」と「他教科」との組合せです。前者については、家庭生活に必要な知識・技術に重点を置くとしても、各々は生活の断片にすぎず、「基本的な考え方」で提示された家庭教育力の活性化を図る力となり得ません。又女子のみ「家庭一般」設置校が大多数の現状において、選択履修者増加の見通しは暗い。後者については「家庭科」の

発言

「男の台所」の

高瀬 斉さん



必要性や改善充実を示唆する一方で、他教科との併置選択などというのは全くの論外であり、教育的観点・配慮とはほど遠いといえるのではないだろうか。

しかし、今、家庭科は、この報告書により0地点に到達したように思います。公教育としての市民権を確保し、世界的な動向をふまえ、社会・家庭の質的変化や子どもの実態をし

っかりととらえること。これからの教育にふさわしい内容と履修形態を、現場の具体的な実践を足がかりに、継続的なつながりの中で、家庭科教師自身が共に学び共に励まし合って、作り上げていくことが必要です。より素晴らしい家庭科教育の確立と男女共学実現をめざして共に頑張りましょう。

(東京都立農業高等学校)

新潟ご出身だが、中学の時、今もお住まいの中央線沿線荻窪に引っ越されて26年になる。

「子供のころからまんがが好きで、まんがばかり読んでいた」。中学の時も、まんがを教科書の倍ぐらい持っていつて先生にさんざんおこられたという。早稲田大学に入学すると同時に、クラブはまんが研究会へ。

まんが家は夢、なるつもりはなかったけれど、四年の時、アルバイトで初任給(三万円)以上は稼いでいたこともあり、そのままこの世界に。

主に大人向けのナンセンスまんがを描いておられるが、「男の料理」は、四、五年前、ビックコミックのオリジナルという雑誌に二年間連載したのが始まり。

お酒が好きで、料理好き。飲み屋で出された味にトライ。「この味!」もっと旨い味を作り出せた時もあったとか。自分のカンの正しさに自信を持つ。それが仕事の上にも……。おつれあいとは外、自分は内。結婚当初、夕食は、おつれあいが帰ってから作っていたが「おなかがすいちやうわけ、それならと、お酒のさかなを作り始めて、だんだんなんでもやるようになった」

家族って何? 「カミさんは学生時代、クラブと同じで、仲間みたいな感じ、子供も友達みたいなところがある」

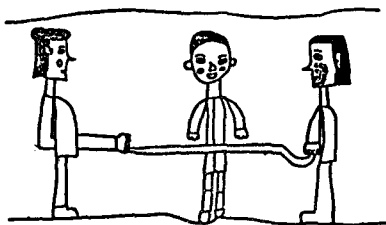
入れていただいた紅茶がおいしかった。ずっとそばにいたエミちゃん。パパと遊ぶ日課をじやましてしまった。

(馬場洋子)

## 水学習の主人公たち\*

### 「ケッコン」って何？

新潟県立黒崎高等学校の生徒たち



え・寺門賢剛

生徒の文を読んで、私の授業の内容が彼女等に受け入れられていないことを悲しく思いました。「生き方」というのは、育ってきた環境に、まったく大きく影響されるものである、と感じました。

(高橋 素子)

### 〈三年女子〉

チエミ

良くわからないけど第二の人生って感じに思えます。でも私はケッコンというものにしてはられないので、オールドミスをねらっています。私が思うケッコンとは、自由を失うという印象が強いので嫌いです。だいたい男の人と一生ズーッと一緒に暮らすなんて不思議すぎていやですね。

こどもは好きだけど産みたくなし、育てる自信はゼロ。

人が結婚するとか言っているのは、とっていいと思うけど、自分のケッコンとなるとパスです。友達のようにケッコンを夢見るこのできない私には全く関係ないことです。私、男に生まれたかったです。

弘美

私は結婚にとってもあこがれています。

私は結婚したらこうするんだっていうのが、たくさんあります。まず一つは、今は女性も働く時代だというふうにいわれていますが、私は結婚したら、主婦業専門で朝晩なさんをおくつたら、そうじ、洗たくをし、テレビなんかを見たりして、その後夕食の買い物に出たり、ごく平凡な本当におくさんっていうおくさんになりたいなと思っています。そしてママさんバレーに入ったりなんかしてバレーをやりたいなと思っています。

結婚、早くしたい。

みのり

今まで結婚なんて言われたり聞いたりしてもピンときませんでした。だけど今の彼氏とつきあって考えさせられるようになりました。結婚は一生に一度のことだと思う、離婚したりする人はどう考えているのか知りたいです。私もあとすこしで結婚しますが、大切に考えていきたいです。

千秋

結婚は、男と女が結ばれて家庭を築こうというこ。私は近い将来、結婚し、子供を産み育てる。

女は家のことをしなくてはいけないが、男は何もしないなんて不公平だと思う。

今の私は家の仕事なんて、めんどろなこととはしたくないと思っているが、家庭に入れば、ちゃんとするだろう。

公子

世界にはたくさんの方がいるわけですから、いろいろな結婚の形があると思います。

昔は、男が働き女は男にしたがい家で家事をする形が多かったけれど、今は男も女も働いているので、男女関係が平等という形の夫婦がふえていると思います。お互いのいい



るな都合によって、いろいろな形の家庭を作り出しています。それにはお互いが信頼されて、愛し合っていないといけないと思います。

#### 里 美

結婚とは、絶対切れることのない愛の出発点と思っていましたが、少し考え方が変わりました。どう変わったかという、自分が愛する分だけ、愛されることはないのではないのでしょうか？と疑問を抱くようになったからです。結婚は慎重に、その場の感情だけでするものではないと思います。一生連れそう人なんですから。

#### 美和子

「卒業したら三年間働いてお金をため、結婚する」というのが私の夢です。結婚するといっても、決して簡単なことではありません。料理も作らないといけないし、子供を育てなければなりません。今の私ではゼツタイ無理だと思います。私は昔は、結婚しても、子供が生まれるまで働き、子供に手がかからなくなったら働こうと思っていましたが、今はずっと家において、子供が帰って来たら「お帰り」と言っただけなんです。

利恵子  
私の理想の結婚相手はSさんです。  
Sさんは二歳上で、この学校の卒業生です。本当に結婚できたらいいと思っています。

顔GOOD、性格GOOD、スタイルGOOD、別に顔やスタイルで結婚相手を決めようとは思いません。本当に好きな人と結婚しようと思います。

#### 春 子

近々、姉が結婚します。相手は高校の同級生だった人、まだ二十歳。

結婚するにはまだ早い、もう一年ぐらい我慢したほうがいい、父が死んで、やっと家が落ちつきかけてきたのに。姉は自分のことしか考えていないのだから、いくら母が許したといえ、私はちよつと考えてしまいます。でも、結婚したら、幸せになつてもらいたい。

#### 幸 子

昔はただ単にあこがれて、二十二、三歳で結婚できれば良いと考えていました。でも今は違います。結婚だけが女の人生ではないと思うんです。女だって仕事を持てば男に負けないと思います。

私は結婚したくありません。でも本当に愛する人ができたら結婚するかも。

絹 子  
やっぱり結婚するのなら、金持ちとがいいと思う。

#### 順 子

私は二十歳で結婚します  
相手の家には 姑 小姑がいてとても、苦しめられそうです。でも、そんなに負けずがんばって結婚生活を  
おくりたいと思っています。

#### 由美子

結婚するのなら、ハワイの教会で。まっ白なWARGENと、5LDKの木造りタイプの山小屋風の家、それと毎日「BIGI」や「MELROSE」の洋服を着て、部屋着はHB、犬はボメラニアンかって——。

でも本当は大好きな人といっしょだったらこんなものもないりません。

ただ白いワージェンと、3LDKの家さえあれば。ついでに指輪はアンティークの白のルビー。

### 〈三年男子〉

結婚するなら次の条件に合う人。

孝 宏

- 一、料理がうまい人で、煙草を吸わない人
- 二、やさしく、健康な人
- 三、言葉づかいの良い人
- 四、頭の良い人
- 五、顔のわりにきれいな人
- 六、一緒に遊んでくれる人

康 衛

とにかく人間で、女で、そして五体満足で心のやさしい人、こんな人がいたら結婚してやってもいい。できれば、顔のバランスがとれていれば一番いいと、オラは思う。

充

結婚だって？ 軽薄でなきやいい、美眉秀麗でなきやいい、白痴でなきやいい、要するにその辺の誰とでも結婚できるということ。

### 〈二年女子〉

かおる

結婚って何と聞かれてもよくわからない。だけど私にとって結婚は理想です。好きな人とずーといっしょに暮らしたいです。

私は早く結婚したいと思っていましたが、今では、お金をためて、ちゃんと生活できるようにしてから結婚したいと思います。

美智子

二十四歳くらいまでにはしたいと思ってる。でも相手がいなくてできないことだからがんばっていい人をさがそうと思う。そのためには、人に好かれるかわいい女の子になりたいなあ。

でも、私、結婚できるのかなあ。

時 雨

ケツコン、私にとっては関係のないことです。ケツコンしたいと思いません。

ケツコンしたって、しぼられるだけです。

家事、子供の世話、時間の無駄だと思う。一人で自由にやっていく方がいいと思う。

紀 子

いい人を見つけて、その人に何もかもまかせられるような人がいたら……結婚したい。男の人って勝手っぽいから、ほんとに私のこと思ってくれているのかどうか、よく見定めなくては。

康 子

少し前まではお嫁さんにあこがれていました。今、離婚が増えているということをきく

と、自分の結婚も考えてしまいます。絶対に離婚をしない結婚をしたい。

一 枝

結婚は人生の一番大きな節目。

私は早く結婚し、しあわせな生活をおくりたいです。とにかく今の生活とちがった何かがたくさんあると思うから。

### 〈一年女子〉

美奈子

結婚とは、男と女がいっしょになる、夫婦になること。私だったら結婚は、その日の気分によって相手の人がいたらすぐにしてもいい！ と考える時もあるけど、それとは別にいろいろ大変じゃないかなあーと不安みたいなものもあります。一言で言って、私の正直な気持では結婚したいですね。うん、なるべくなら二十二歳前までに。

美乃利

私は絶対に結婚したくありません。どうしてかと言うと、結婚すれば、子供のめんどろもみなければならぬし、さしずせそにあるように、裁縫、食事、炊事、洗たく、掃除をやらなければならぬからです。そういうのは、はつきり言っていやです。

# 新しい家庭科を創るために◇◇小学校では

— 一年生 —

## 「歯とおやつ」

### の実践から

野原 春江

#### 一、はじめに

一年生の私の学級の子たちは、昨年の六月以降九ヶ月間に、その六十パーセントが、歯が生えかわっている（表1参照）。この時期の子は乳歯が抜け、永久歯に生えかわる。

本校では、数年前から歯の衛生には特に力を入れ、むし歯をなくす運動をすすめてきた。

その方法は、

1、給食後全校で一斉に歯みがきをする

2、年に六回、十五日間単位で、親子歯みがきカードをもとに、家庭での歯みがきをすすめる、カードに記入して確かめる

3、月に二〜三回、ノー菓子デーを位置づけて実行させる

4、年に三回歯科医の検診を受ける

5、歯科医検診の折に、サフランテストを行い、自分の歯のみがき方を点検する

といったことである。

従って、本校ではむし歯の子はほとんどいない。

全校児童数  
153人  
43人 55本  
28%

〈表1〉 59年6月〜60年2月に歯が抜けた児童の数

| 学年 | 人数         | 本数  | 学年 | 人数        | 本数 |
|----|------------|-----|----|-----------|----|
| 1年 | 10人<br>59% | 13本 | 4年 | 6人<br>20% | 6本 |
| 2年 | 6<br>29%   | 7   | 5年 | 3<br>10%  | 4  |
| 3年 | 11<br>37%  | 20  | 6年 | 3<br>10%  | 5  |

しかし、冒頭でも述べたように、一年生〜三年生は、歯が生えかわる時期でもあり、また、その時期にどんな食事やおやつをとるかということ、新しく生えてくる永久歯に多大の影響を与える。

学校教育の重点の一つとして、むし歯をなくす運動を行っている、子どもたちもある程度の知識はもち、実践もしているが、子どもたちの知識はいまいであり、ま

〈表2〉 1週間に食べたおやつ調べの結果

- |            |                                                          |
|------------|----------------------------------------------------------|
| ○自分で買った＝   | ・ガム・ポテトチップ・ひなあられ<br>・あめ・ベビーシュークリーム                       |
| ○お母さんが買った＝ | ・あられ・あんまん・ビスケット<br>・ポテトチップ・ケーキ・キャラメル<br>・パン・キャラメルコーン・みかん |
| ○うちで作った＝   | ・ホットケーキ・お好み焼き・おかき<br>・ドーナツ・むしパン・だいがくいも                   |

た、カードに記入しなければならないので、仕方なしに歯みがきをしているといった児童も見受けられる。

従って、この時期に、歯に対する正しい知識をもたせるとともに、自分のおやつとり方やむし歯予防のしかたを見なおさせ、一生自分の歯を大切にしていこうとする気持ちを育てたいと思う。

更に、表2からもわかるように、本学級の児童は、自分でおやつを買うことは少なく、家の人の手作りや、買いおきを食べている傾向が強い。そこで、こうした学習を機に、家庭への連絡を強め、家庭の協力を得るように、呼びかけていくことも大切である。

## 二、「歯とおやつ」の 実践から

(一) 事前調査 (表2参照)

(二) 本時の目標

○むし歯の原因がわかる

○歯によいおやつを選んで食べようとする

(三) 学習活動及び児童の反応

T みんながよく食べているおやつには、どんなものがあるでしょう

C ポテトチップ。スナック

C あらはは甘くないでよい

T おやつ調べの結果、みんなはこんなおやつを食べているよ (表2を見せる)

C ガムは砂糖が入っているでいかんよ

C むし歯になるでいかんね

T よく知っているね。それでは、どうしてむし歯になるのでしょうか

C バイキンがいるで

T そうだね。それでは、「むし歯になるわけ」という、スライドを見てみましょう

(食べたものが歯垢となり、ミュータンス菌によって酸化し歯のエナメル質を溶かし、ぞうげ質を犯し、歯ずいにまで達していく様子を、わかりやすく解説した内容のスライド)

T 歯のばい菌、ミュータンスがふえないようにするには、どうするとよいでしょう

C お砂糖がたくさん入ったお菓子を食べない

T それでは、どんなおやつがよいでしょう

C あられやポテトチップだったら、甘くないでよいと思います

C 食べたあと歯にねばねばしたのがくっつくで、やっぱり  
いかんね

C りんごやみかんだったらいいと思います

C ごはんの後にりんごをたべると、歯をきれいにする、と  
お母さんが言っていたよ

T そうだね。よいことを知っていますね。あられやポテト  
チップも食べたままにしておくと、ねばねばしてきて、ミ  
ュータンスが喜ぶよ。くだものはよいね

C うちでは、お母さんが買ってきてくれるから、あられや  
ビスケットを食べるけど、どうしたらよいですか

T そんなとき、どうしたらよいと思いますか

C 食べたらすぐ歯をみがくか、うがいをする

C お母さんにたのんで、甘いものを買わないようにしても  
らう

C おかしは少しにして、くだものを食べる

T そうだね。みんな大事なことであります。みんなが言っ  
てくれたように、次のことを守りましょう

① お菓子は少しにして、くだものを食べる。みんなの家に  
ある大豆の煎ったものもよい

② 食べたらすぐにうがいをする

③ おかあさんにたのんで、甘いお菓子よりも、くだものを  
買ってもらう

—右の三点を板書でたしかめた—

④事後の実践

1、M子の日記から

#### —前略—

うちにえつたら、ポテトチップをたべました。そし  
て、ミルクコーヒーものみました。

でもあまりたべませんでした。先生が、  
「あまいものをたべるとむしになるよ」  
と、いいなさったから、あまりたべませんでした。そ  
れから、ブクブクうがいをしました。

2、学級通信から——M子の作文とともに次のような通信を  
発行した

#### ◎おうちの方へ

「あまいものをたべたら、すぐうがいをしよう」

M子さんが次のような日記を書いてきました。

(M子の日記を紹介して)

先日「歯とおやつ」の勉強をしました。

糖分のあるものを食べたり、酸味の強い飲み物を飲ん  
だりすると、歯についた歯垢が酸化して、ミュータンス  
という菌が繁殖して、ますます酸化を強め、歯の表面を

溶かしていくことを学びました。

そして、あまいものや、酸味の強いもの（飲み物）をできるだけ食べないこと、また食べたらず歯をみがくか、ブクブクうがいをするを約束しました。

みんなの子たちもM子さんと同じように気をつけているようです。ご家庭でも、歯や身体への影響を考えて、親子でよいおやつを選んで下さい。

### 三、まとめ

私は先号で、小学校の家庭科は五年生まで待つのではなくその発達段階に応じて、一番適切な時期に、必要な内容を教えることが大切である旨述べた。

このことを「おやつ」についてみたとき、多く歯が生えかわる、一年生から三年生の間に、歯との関連でとらえさせ、五年生では、自分や家族の健康及び家族や客との人間関係を潤すにふさわしいおやつの工夫へと、発展させていくことが必要であると思う。「歯とおやつ」の実践を行って、歯が抜け、また新しい歯が生えてきて、歯への関心が高まると共に、自分でおやつを選ぶ能力ができてくるこの時期に、歯とおやつの関連を見なおさせることが、是非必要であることを痛感した。

（岐阜県揖斐郡池田町立宮地小学校）



編集室から  
あなたに

あなたも、Weのつくり手に……

〈夏季フォーラムのテーマ・実行委員、10月号の投稿募集中〉

#### ◆'85年夏季フォーラム

先月号でお知らせしましたように、期日を8月10・11・12日に変更します。

場所は、埼玉県武蔵嵐山にある国立婦人教育会館です。全体会のほか、分科会をいくつも設けて、小人数で心ゆくまで語り合いたいと願っています。詳細は、確定次第、折り込みチラシでご案内しますが、いま、フォーラム実行委員と分科会テーマを募集しています。実行委員を引き受けて下さる方、話し合いたいテーマ、今すぐお申し出下さい。

ウィ書房とWeの会共催の一大イベント、夏季フォーラムを楽しく盛り上げるためにぜひ、あなたのお力をお貸し下さい。

#### ◆10月号テーマ「いま、熱く女の時代」

国連婦人の十年最終年の今年を期して編む号です。女である人も、女でない人も、共に考えてみましょう。「女の時代」とは何なのか。国連婦人の十年は、地殻にひびを入れたのか、入れなかったのか。また、どういう問題提起をしたのか。男を変えたのか、変えなかったのか。

あなたにとって、この十年は？  
あなたにとって、いまの時代とは？  
あなたが抱いている希望は？  
あなたがいま怒っている現実とは？  
あなたがふり返る過去は？

発言欄にあなたの心をお寄せ下さい。  
2千字以内、メ切りは5月6日です。

## 新しい家庭科を創るために◇◇中学校では

### 編物を授業で

森 陽 子

#### 1、とまどい

男子が編物か……しんどいなあ。授業でとりあげるのは。でも、編物をする男の人って素敵だ。遠い遠い記憶に、スキー小屋でセーターを編むという男子学生がいた。その時は、何となく不思議な人だなあと思った程度だったが、今ならその人と仲良くなりたいと思う。そして、いろんな事を聞いてみたい。「なぜ編物なんかするの?」「いつ、どのようにして編み方を覚えたの?」と。

ところで、私の夫ならどうだろう。ちょっときいてみた。「編物ならやった事あるよ。うまいもんや、妹に教えてもらったから」と、編んでいる途中のメリヤス編みを、編み方をききながらやって見せてくれた。ちよつと教えてもらったにしては、結構できるものだなあと感じた。「だいが編んだのに、妹は、編み方がおかしいと言つて、全部ほじめてしまった」と残念そう。

「でも、これは男には耐えられん。長時間単純作業は、女の方が向いてる。女はなんで編物なんか楽しいんかなあ」と。またまた、私を、カッカさせるようなことを言う。ユユしい差別発言! 何を言うか。昔からずーと、編物は男の仕事だったんだぞ、単純作業を続けるのは女だって辛いんだ。そんな仕事しかないから、頑張っているのが労働実態なのだ。それに、編物を楽しむのは、今や趣味の問題、編物に耐えられない女だっているし、編物が好きな男もいるだろう。

でも、正直いつて、私はいま一步のところで踏ん切りがつかないでいた。授業でとり上げて、私の生徒たちはやるだろうか。どの位の子が楽しんでやれるだろう。まず、編物は女のする事だという意識を乗り越えさせられるか、頭から受けつけない子がいるのではないか。無器用な手が多い中、個人指導をしなければならぬのに、やりきれるか。家庭的にしんどい子が多いことを考えると、材料の準備さえ満足にでき

ないのではないか。

しかし、「女のすること」になっているからこそ、今、教育の場で男子にも経験させていく必要がある。編物の歴史を押さえ、身のまわりの編物に目を向けさせながら、編物の特徴を学習しよう。クラスで何人かの意識を変えられたらそれでいい。とにかくやってみることだ。家庭科教育研究者連盟での実践も学んできた。

このことを校内の教科会議で、技術科の先生に話してみた。何となく、「ええ？」という感じ。無理もないとは思っている私。でも、さすが我が校の先生、「僕も、一緒に授業に入って、教えてもらわんとあかん」とのこと。三年間全面共学の本校では、互いに全領域を教えられるようにしておかなくてはならない。今回の授業は、私が全クラスを担当するからよいとしても、ちょっと申し訳ないかなという気がしたり、いや、そういう意識こそいけないのだと自戒してみたり。

## 2、男の編物

でも、世の中には、私などよりずっと器用な男の人たちがいて、セーターでも何でもどんな編んでいるのだ。数年前『チャレンジニット』という本を見つけて心が騒いだ。ついに、男の編物の本が出たのだ（他にもあったかもしれないけど）。

ど）。見ると、すでに第三巻が出ていて、そこには編む男が何人もいた。もちろん、編まない男もいっぱい登場しているが、『三冊目チャレンジニット 編む男のセーターブック』だ。そこから編物好きの人の言葉を紹介しよう。

### ◆古田光太郎さん（マガジンハウス勤務）

カミさんが僕のセーターを編んでくれたのを見てたら、むしろにやりたくなっちゃった。その時、タイムリーにもヴォーグ社のチャレンジニット第1巻がでていて、あの本を見て始めたんです。それ以来、おもしろくておもしろくて、時間があれば編み棒を動かしています。……（略）……会社で堂堂と編物しました。会社の連中からは、いいようにからかわれましたけどね。

でも、なんといわれようとおもしろいからね。今、4色以上の編み込みに挑戦中。ほんと、夢中です。

### ◆郷裕隆さん（デザイナー）

糸から選んで、自分だけの既製品にないものが創りたい。……（略）……ちゃんと習ってみたいと思ってても、編みもの『女』っていう感じが、教育にもあって男が入りにくい。……（略）……

そろそろ、その考え方やめてほしいですね。門戸を広く解放すべきですよ。そうすれば、もっとニットの分野



で活躍する男性がでてくると思います。だって、僕みたいにファッションに関係している者なら、男女を問わずニットにも興味があるはず。ニットって、我々の生活の一部だしね。

その上、何と、自分で本を書いているシロートの編物人間がいた。『男の編物 橋本治の手トリ足トリ』（河出書房新社）という本を手にして、私のそれまでのこだわりが恥ずかしくなった。もう、ここまでできたらプロだ。山口百恵やジュリーの顔の編み込みセーター、写楽や国芳がどんどんセーターになり、着物にコーディネイトされている。ただただ敬服するばかりだ。

あとがきに、「いい男になりたい」と書いているが、性差意識にこだわらず、人間らしくさりげなく生きている感じが、文句なく素敵だ。

私は、迷わずこの二冊の本を買い求めて、教室に持ち込むことにした。

### 3、編むのは男の仕事だった―編物の歴史―

（『ウールの本』読売新聞社より）

#### 〈起源〉

指だけで編むこともできるのだから、編物の歴史は大変古

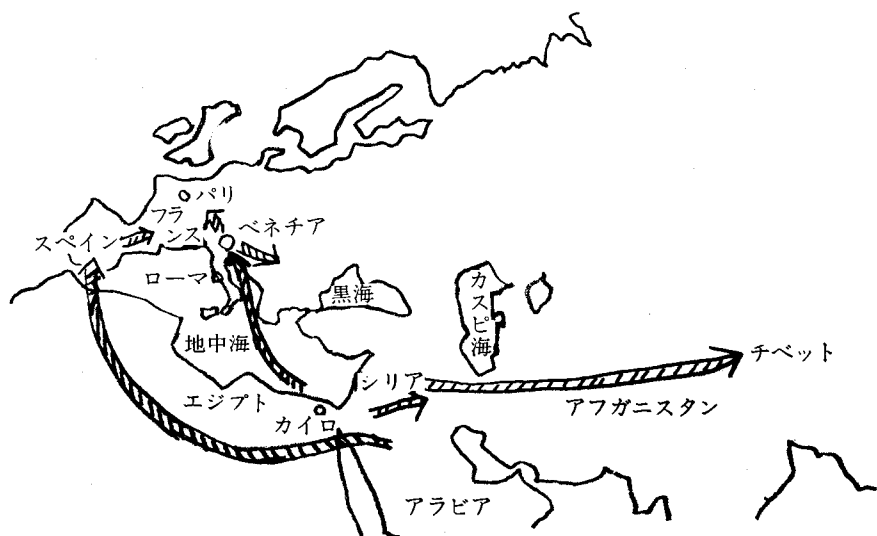
いと思われる。起源は不明で、およそ三千年前、アラビア半島の遊牧民の男性によって始められたと言われている。男性が羊を率いてその毛を刈り、女性が糸に紡ぎ、そして男性が編むのである。古代の物は残っていないくて、最も古い編物としては、四〜五世紀ごろエジプトで発見されたタビ型くつ下、バッグなどがある。

#### 〈ヨーロッパへ〉

ヨーロッパへの伝達は、一般的に編む技術を習得したアラブ人が北部アフリカを横断、七一年頃のイベリア半島征服の際にスペインに持ちこんだと言われている。さらに、アラビア人の商人や船乗りにより、方々に編物を広めていった。東方諸国からの集積港であるベネチアが、大切な中継地点だったことも考えられる。

#### 〈東方へ〉

編物は、ヨーロッパより以前にアラブの隊商によって、シリア、ペルシャを通り、アフガニスタン、チベットにまで広められた。その頃のアジアでは綿が栽培されていたが、編物は毛糸だけでできて、北部山岳地域の遊牧民の間に広まっていくことになった。彼らはここで、自ら飼っている羊や山羊の毛を紡ぎ、山岳地帯の厳しい自然から身を守るための、暖かい着もの、ミトン、靴下、帽子などを編んだ。



#### 〈ヨーロッパに編物ギルド〉

十六世紀ごろ、編物は全盛期を迎え、人々は技術の向上と、仕事の能率を高めるのに努力や工夫を重ねた。フランスランド地方の男性は、竹馬に乗って羊番をしながら編物までしたと伝えられている。

一五二七年、パリにできた編物ギルドを皮切りに、ヨーロッパ各都市につきつぎとギルドが設立され、編物技術の向上に貢献した。ここでもやはり、編み手は男たちである。

まず少年は、三年間師匠について見習い奉公をしたあと、三年間旅に出て腕をみがき、終了試験を受けた。熟練職人の中には、一分間に二百目も編む人がいたという。

#### 〈近代から現代へ〉

十八世紀に入ると、機械が発明され、速く手編みをする必要がなくなった。その結果、手編みは社交界で手芸の一つとしてもてはやされ、一九世紀になると、一般の人の間でも人氣が高まって、身のまわりのあらゆる物を編物で作出すようになった。

二十世紀に入ると、編物は、手芸、実用、ファッションと多様になり、伸縮性や保温性がよいことから、利用範囲が広がって、今や織物をしのぐほどになっている。

#### 4、編もう！

私は、大急ぎで毛糸編みの帽子を2、3個作って授業に行った。「こんな帽子を編んで、スケート教室にかぶっていい」と言った。スケートでは、こんだ時頭を打ったりけがをしないように、帽子は必要だ。去年は、天候が悪くなり昼頃から雨が降り始めたので、帽子のない子は髪がぬれて、頭がとても寒かった。帽子をかぶっていた子らは、平気ですべていた、などと話しながら、「みんなが自分で編んだ帽子をかぶってスケートなんて、サイコー！」と言ったが、即座に、「先生、マフラーやったらあかんの」「私も、帽子はあるからいらんわ」という声。

最初のうちは、輪編みをさせたかったし、帽子の方が編む量が少ないし、第一、スケートにマフラーは危険、などと言っていたのだが、あまりに声が多いのでマフラーでもよい事にした。実際、彼らにはマフラーの方が、日常的に活用できるだろう。

さて、編み針だが、棒針四本を買いに行けば一組四百円近くもする。それを全員に買わせるのはもったいないし、せっかく手で編むのだから、道具だって作ればいいということ、で、てっとり早く菜箸を削ることにした。大中小のセットで七十円也。中と小の四本が同じ太さである事を確めてから、

ナイフで削る。

ただ、これは箸先の方が細くなっているので、先を一センチほど切り落とした方がよい。又、編む時にはいつも太い方から編み始めるように注意がいる。既製の棒針や見本を参考にするのだが、竹がかたいので、よく切れるナイフでないと少しやりにくい。どうしてもうまくいかずガタガタの物から美しいカーブの物までいろいろ作られてくるが、サンドペーパーでこすれば形も整い、何とか使えるようになる。そして、すべりをよくするためには、ロウやニスをぬると使いよくなる。

だから、菜箸として使いこんだ物の方が、油がなじんでいてすべりがよくて具合がいい。調理室で箸先のこげている物や半端な物は、この際全部編み針に化けて、大活躍することになった。

# 新しい家庭科を創るために◇高等学校では

## 男女必修への

## 夢ふくらむ

森 幸 枝

### 女子必修の強化は何をもたらしたか

前回記したように、高等学校の「家庭一般」女子必修は、学習指導要領において、三十一年の「望ましい」から、三十五年には「原則として」と強化され、三十八年には完全実施となった。それは、女子教育としての位置づけが明確になっただけではなく、戦後はじめて、それが法的拘束力を持つに至ったという点で、重要な変質であった。三十一年には、学習指導要領の「試案」が抹消され、学校教育法施行規則第二十五条を変更し

て、小学校には三十三年に、中・高等学校に対しては三十五年に、はじめて学習指導要領を「告示」したのである。

当時、京都市内中心部の府立高校では、多くの学校で各学年に「家庭一般」を置き、三年間の何れかの学年で四単位を履習すればよいことになっていた。その三年生の「家庭一般」では、かなりの数の男子が選択する状況がみられたが、それは、決して怠けたいとか、他教科よりはましとかいったい加減な理由からの選択ではなくて、大学進学者も含むごく一般的な男女の講座編成であった（次表）。そして、次第に周

| B校               | A校  |      |
|------------------|-----|------|
| 36名              | 34名 | 37年度 |
| 46名              | 51名 | 38年度 |
| 15名              | 24名 | 39年度 |
| 33名              | 15名 | 40年度 |
| (家庭一般を履習した男子の人数) |     |      |

辺部の学校に波及するかのように予測されていた。ところが、前記「家庭一般」女子必修が、法的拘束力を持つて降りて来て定着した後には、もう男子が選択をしなくても出来なような教育課程を組む学校が、ほとんどとなってしまったのである。

男子が、新しい時代の動きの中で、全く自主的に家庭科を学びはじめ、大学進学とも両立させながら、それが拡大して行くという、最も望ましいかたちでの実態が、ここで消えてしまったことは、返す返すも残念なことであった。すでに家

庭科の不振がいわれていたこの時代に、性によるこだわりなどなく、学びたい科目を自由に選択した若者の闊達さにこそ、もっと学ぶべきであったと思われる。

その後も、大規模校で選択科目を多く置いていた学校や夜間定時制では、「家庭一般」や「食物」で少数ながら毎年男子の選択が続いていた。そしてこれらの経験は、私たち家庭科の教師に、男子に対しても十分対応出来るという自信を、少なからず与えたことは確かで、後日、男女共修の実施に当たっても大いにプラスになったと思っている。

さらに、この女子必修強化が、現実にはどんな悲劇、男女差別をもたらすことになったかの一例をあげよう。学習指導要領には、「ただし、特別の事情がある場合には、二単位まで減ずることができる」となっていたが、当時、国立大学理系に進む女子は、理科の科目数の必要性から、どうしても単位数の上で「家庭一般」四単位を履習出来ないような教育課程の学校もあった。従って、その場合はこのただし書きを活用せざるを得ず、それらの生徒は二年生の時点で「誓約書」なるものを書かされたのだ。「私は、必ず某大学理学部に進学致しますので……」というわけで、その後の進路変更は許されなかった。このことは、本人たちはもちろん、「こんなことがあってよいのか!」と憤懣やるかたない同性の先生をはじめ、多くの教師の怒りを呼ぶこととなってしまった。

このようにして、「家庭一般」女子必修の強化によって、現場での家庭科教育の位置づけは、女子教育の中核として重視されるどころか、より不安定なものとなり、また、家庭科という教科への批判や不信を募らせる要因ともなった。

### 新設校での実践

四十年に私は新設の学校へ転動したが、その一年目は、家庭科の特別教室が間に合わず、施設設備のほとんどない状態で、普通科二年生の「家庭一般」二単位を受け持つことになる。他方、三十八年度改訂では「家庭経営の立場から」が強調され、家庭経営者を主婦と限定し、「家庭生活全領域にわたって」その改善向上をはかるために、やり方主義による技能の習得が求められていたのであった。

ところで、その頃、家庭科不振が叫ばれる中での様な矛盾に悩みながら、何人かが寄り集まって「家庭一般」の男女共修に向けて、内容改善の学習をはじめていたことは、すでに前回述べた。とにかく、まずは男女を問わず、もともと生活の現状をしっかりと見つめさせたい、そして生活の矛盾にも気付かせ、家族・家庭生活のあり方を社会との関わりの中で追求させたい、そのためには、教科書に何が欠けているのか、など話し合った。まるで、自分が教科書でも書くような気概で、具体的な文章をこつこつ書きはじめてみたりし

ていた。例えば、家族についてだって、何からどのように入って、どこまで高校家庭科で取り上げる必要があるのか、どの位の時間が要るのかなど、具体的に書いて見ないと、さっぱりイメージがわかなかったからである。今にして思うと、本当に一生けんめいで、我ながらほほえましくなるくらいだった。

そこへこの条件というわけで、大義名分が立つて、日頃の仮説が検証出来るよいチャンスだととらえ、一年間の指導計画を練ることにした。いつも、やってみたくても時間不足で出来なかった理論学習、情報資料の詳しい紹介、そしてまた、デイスカッションの積み上げも出来た。その中でも、とくに「家庭生活における男性と女性の役割について」などのテーマのとき、生徒たちは大いにのって、まじめに話し合いをした。女子だけでいても仕方がないと言って、わざわざホームルーム討論に持ち込み、男子の意見を加えて再び話し合った講座もあった。その頃、すでに経済大国への道をひた走る中で、パートタイマーという雇用形態も登場して増え続けていたし、やがて女子雇用者の三分の一が既婚女性となる日を迎えようとしていた。ここでも若い生徒たちは、年に似合わない固定化した旧い女性観や生活観を身につけながらも、目をひとたび社会に向けたときには、その殻に閉じこもってはいられない時代の到来を、感じ取る力を持っていたの

だと思う。

私は、例年のように一年間の学習に対する感想文を書かせて、何を学び得たかを知らうとした。予想に反して、女の子らしく、もっと被服や調理の実習をしたかったのに残念だったと書いた者はごく少なく、家族や家庭生活、男女に関わる問題等を、広い視野から学び、考え、友達と話し合った感激を、家庭科への新しい発見として多くの者が記した。そして、「家庭一般」は、男女共に学ぶべきだとの訴えが、例年に比べて圧倒的に多く、男子が女子よりも、ずっと封建的(女性蔑視)で利己的(自分中心)なのは、「家庭一般」をやらないからだときめつけた者もかなりいて、思わず苦笑をした。

この一年間の実践の一応の成功は、私にとって、とても貴重な経験となった。私は、家庭科教育の改善についてさらに確信を深めたし、何年かの後に、男女共修「家庭一般」の実施を前にその内容を考える際、大いに参考となったのである。

### 予想外の配転

四十三年、私は全く思いもかけず教育委員会に入ることになった。とにかくその時の私は、当時の流行語を借りて言えば「家つき、コブつき、姑つき」で、しかも豊中市からの遠距離通勤であったが、それが更に倍近くも遠くなる。また、民主府政下とはいえ、権力を持つ行政機構の末端に組み込まれ

るのも嫌だった。しかし、そこで私に先ず求められたことは、「家庭科は、他教科に比して現場の実情がさっぱり把握出来ていない。民主的な教育行政を進めるためには、何よりも現場の先生方、とくに教科研究会との意志の疎通が大切、ぜひともパイプ役になってほしい」とのことであった。

今思えば、各種研究会との共催は一切とり止め、上意下達の強行にのみ終始している今日の府教委とは、さすがに天と地ほどのちがいである。迷った私は、親友のI先生に相談、「あなたが、上を見ずに下を見て、常に下意上達のパイプ役でいる限り、全面的に協力し応援する」と言ってくれたところで決心がついた。「節を曲げなければならぬような時には、何時でも現場にもどればよい。なりたくてなるのではないのだから」などと不遜にも心ひそかに思っていた。そして、内外の情勢から考えて、ぜひとも「新しい家庭科を創るために」一役買うことが出来たらなあと、熱い願いもないではなかったが、それはまだ、夢のまた夢であった。

さて、府教委に入った私は、その途端に、いかに家庭科が軽視されていたのかを、イヤという程思い知らされる羽目となった。各教科担当指導主事は、義務教育と高校教育の担当が一応そろっていたにもかかわらず、家庭科は、何と小・中・高を一人で受け持ち、その上幼稚園教育もという有様、しかもなお、その時点では教科指導員として週三日勤務、と

いう他の教科に例のない悪条件なのであった。これでは仕事をやりたくても出来なくて当たり前だ。週に半分いないのは、内部の事情もわからないし、発言権も何もない。何とかしなければ……と私は思った。そこで、四月・五月と我慢をして、その間に学校に出るべき日に、指導員としての任務を優先せざるを得なかった日時を表にして、教育長と学校長に陳情書を提出した。「現状のままでは、双方の仕事に責任が持てない。すぐに、どちらかに決めてほしい。学校にもどれるなら喜んででも」という意味だった。当時の府教委は、それでも怒らずに、九月から必ず全日勤務にすると約束してくれた。

しかし、偉そうにこのようなことをぬけぬけと言ったのだから、その後が大変だった。小・中の家庭科のことなど、ものの本では読んでいても、府下の実態となるとまるでわからない。教研等でごく少数の先生と知り合いだった程度。まして、幼稚園など（家庭科教育には、保育が入っているから何とか出来るだろう、との考え方でもあったのか……）全くの一から勉強しなければ、専門家の前へ出て大きな顔でもが言えない。要求をする立場なら、理念や常識で考えていても何とかなるが、行政としてはそれではつとまらないのである。だから、私個人としては、府教委に入ったおかげで、本当に沢山のことを学ぶことが出来たと思っている。

府教委では、小・中・高と相次ぐ学習指導要領の改訂に際して、憲法・教育基本法に基づく民主的な教育の推進を願ひ、教育の原点に立ち返って、各教科・領域の本質やそのあり方を洗い直す学習をした。その中で、勉強をすればする程、広い視野に立てば立つ程、従来の家庭科教育の矛盾は明確となり、また、家庭科、とくに高校中心の立場でのものを考えていた自分の、視野のせまさを改めて自覚する。また小・中の家庭科の、高校にもまさるきびしい実態を詳しく知って認識を新たにしたのであった。そして、小・中・高を通して矛盾に満ちたこの教科を、一体どうしたら、その体系や科学性をすっきりさせ、筋の通った教科教育として、万人の理解と信頼を得ることが出来るのだろうか、現実の厚いカベを前にして、悩みはますます深まるばかりだった。

### 男女共修への夢ふくらむ

さて、高校「家庭一般」の内容改善への試みは、どうしてもそれを組織にのせ、組織の声にまで広げる必要があると考えていたが、私たちが、先ず京都府立高校家庭科研究会（以下研究会という）の市内ブロックに訴えて、継続的な研究に入ったのは、四十三年五月であった。「高校の家庭科教育、とくに必修の『家庭一般』は、今のままでよいのだろうか」という問いかけだった。そして「必修だからこそ、イヤでも

やらせるだけの中身が必要だ」「生徒達にどんな力をつけたのか、つけるべきなのか」などを根本的に考えようとした。

そこで、先ず自分の日頃の実践をありのまま出し合い、不平不満を卒直に語り合うところから始めた。教科書の検討、関連教科の教科書研究、小・中との関連、領域毎の内容検討、時間配分、文献資料の収集、教育課程への位置づけ等、くり返しくり返し、毎月一回定例で、土曜の午後を返上、いつも時間不足で宿題を持ち帰ることが多かった。多忙な中の作業は苦しくて、集まりも悪く、何度か絶望的になりながらも、互いに励まし合って思い直した。そして研究発表を二回……。

遂に、四十五年八月には総合で「家庭一般」男女共修の必要性を確認、全府下の各ブロックでその内容の検討に入った。ここまで来て、男女共修実現への夢は大きくふくらんだ。何よりも、当事者である私たちが、組織をあげて着実に、それに向かって進みはじめたからである。

（前京都府立田辺高等学校教諭）



## ◇ ◇ ◇ 新しい家庭科を創るために ◇ ◇ ◇

### 家庭科の新しい役割

―民衆の生活文化―

復権の場として― 2

#### 小沢 有 作

生活の場から社会構造を洞察していく識見を、家庭科のなかで教師・生徒が共につくっていく営みが、高度経済成長以降のこんにち、とても大事であるように思います。工業化を軸にした社会の産業化は生活にどのような変容をひきおこしたか、人間的な生活にとつての意味はなにかについて、生活の事実から出発して深くふかく考えていくことの必要を痛感しているのです。産業化は近代化の経済的・生活的な形態ですから、これを言

いかえると、家庭科は家庭科の角度から、近代化とはなんであつたのか、また、あるのか、生活をふり返りながら問いかけていく、そうした課題意識をもつことを、今、客観的にせまられているように感じています。

私がいうまでもなく、生産と消費が分離し、大量生産―大量消費をメカニズムとする産業社会が徹底して、〈消費家族〉が普通になり、そのなかで私たちの日常物質文化は一変して、手づくりを中心として生活の質から大量生産の商品を金であがなう生活の質に移りました。先のことを言えば、企業依存の生活―生活の内容が企業によって決められ、企業が私たちの生活の支配者になつた状況―に変わったことであります。これが高度経済成長が生活にもたらした意味であり、近代化のひとつの結末であります。

おばあさんの世代まで連綿と伝えられ、貯えられてきた物質文化の知恵が、孫の世代においてほとんど受けつがれなくなり・終わろうとしています。たとえば、家のなかでのうどんづくり・そばづくりがインスタントラーメンの購買に移つていったわけですが、それは家のなかであつた食生活の歴史が断ち切られてしまったという一般的な意味にとどまりません。それは、女が歴史の伝え手の役からおろされていくことであり、これと裏腹に、物質文化の「ノウハウ」が民衆の手から企業に移り、大量生産向きに「科学」化され、独占されてい

くことであります。

私の独断では、学校の家庭科も、「近代的生活」を標榜して、地域にある物質文化のゆたかな伝承に目もくれず、むしろそれらを断ち切るよう、子どもたちを先導する役割を果たしてきました。産業社会における生活の質に適応する内容を追ってきました。学習指導要領を読むかぎり、このような考えかたのように思えるのです。家庭科は誰の立場に立つのかという問いが生じてこざるをえません。

産業化・家族の消費単位化のなかで、地域でも学校でも、かつての手間ひまを要する民衆の物質文化はうとんじられ、捨てられてきています。便利さ・こぎれいさ・能率が先に立ち、既成品を金で買ってすますようになってきました。産業的生活様式になじんできたのです。このような生活の変貌は、子どもにたいして、モノへの愛着からモノにたいする冷淡な使いすての心性をうんでいます。また、モノの背後にある作った人びとへの無関心―想像力の欠如―をつくりだしています。あるいは、モノの元である自然との共存の心から自然への恐怖の気持や自然を収奪する対象として見る見かたを伴っています。

私たちがこのような生活の質を見なおそうとすると、それは産業社会における生活を見なおそうとするわけですから、そのなかにどっぷりひたっているは見なおす目をつくり

だすことはできません。別の経験を視野に取り入れることによって、それを対象化することができなのでしょう。

そのさい、欠かせぬ経験・視点のひとつが、歴史からの目であり、わけでも民衆の物質文化の経験の歩みである、と思うのです。もちろん、その経験を知ることとは、ノスタルジャーとして過去をふり返ることでもありませんし、あるいは昔にくらべてこれだけ便利になったという便利史観を強調するためでもあります。それらをとおして、無名人なひとによる工夫のあとを知り、モノや自然とのまっとうなかわりかたを学び、手しごとの人間形成論的な意味を探り、そうした歴史につながることによって民衆（の生活とその知恵）を再発見して、今の生活の質を反省的にとらえ返していくために、であります。

これは私じしんの復習のために言うのですが、一九五八年にインスタントラーメンが「発明」されて以来、日本の生活は本格的な加工食品時代に入った、と言われています。今では食費の60パーセントが加工食品を買うのに支払われています。加工食品の問題は、いうまでもなく、食品添加物―さまざまな化学物質の添加の問題にほかなりませんが、平均一人一日に11グラムの食品添加物を体内に入れていると計算されています。ですから、一年で約4キロ、二五年で約100キロもの化学物質を取り入れることになります。からだによい

ずがありません。ガンの急増がこれに関係しているという説もあります。

これが今の生活の質の一側面ではありますが、これをメンの歴史という民衆の物質文化のタテの流れにおいて、端的には、手づくりによるうどんづくり・そばづくりと企業によるインスタントラーメン製造を対比的に調べたり、作っていったりするならば、そこで子どもは自分のおかれている位置の認識―食生活史におけるこんにちという時代の意味、食品工業の役割、からだへの影響のしかた、などなど―をはじめ、いろいろな発見をするにちがいない、と思うのです。

・ ・ ・

このように家庭科を日常の物質文化にかかわりながら企業依存の生活の質をふり返っていく場であると考えてみますと、これにかかわって、私の頭のなかにある男子学生が書いたエッセイが思いだされてくるのです。彼はたぶん家庭科の実技では優等になるだろう六尺ゆたかな学生で、今は結婚して家事分担以上のことを気軽にこなしている青年です。彼は、産業社会の生活の質、そこで知らずしらずのうちに形成した自分の能力の質―モノや自然とのかかわりかた―について、反省的に書いているのです。私には家庭科教育の内容と関係していると思われるので、文章をちよっと抜き書きしてみます。

「私は料理が得意だと自負している。しかし、薪で米を炊くことは、今現在では不可能だと思う。試行錯誤をくり返せばかならず炊けるようになると思うが、今その能力はない。私は米を電気ガマで炊く。おかずの種類も多く、とくに中華料理はみな好評だが、ガスの火でないと炊めものは上手にできない」

「夏場になると、私は友人と旅に出、山であれ海であれ、かならずバーベキューをする。肉も魚も野菜もうまい。だが、その材料は車でスーパーに行って集めたものがほとんどだ。私には野の草から食料を選びだす能力は皆無だ」

「私は日曜大工も好きで、よく大工仕事を頼まれる。家には卵をうむニワトリが五羽いるのだが、彼女たちの家も私がつくった。台風でもガンとして動かない。だが、それはニワトリは住めても人は住めないシロモノだ。私はクギなしで柱を組むことはできない。手斧ひとつで山に入り、自分のねぐらをつくることはできない」

「（ヨーロッパをヒッピー旅行して）歩いていて感じたことのひとつに、都会を歩ける自分の能力、というものがあつた。地図を買い、タイムテーブルを読めば、言葉は通じなくとも、目的地まで行くことはできた。だが、自然のなかを歩く能力はほとんどないことも、わかつた。目印がわからず、方向がつかめず、距離も測れない。私はやっぱり

都会人でしかなかったのだ」

ゼミでアフリカの子どもの生活誌を描いた本を読んでいるとき、これに触発されて書いてきた文章の一節です。祖父母以前の物質生活誌を知っても、同じような感想——生活と能力の質への見なおし——をもっただろうと思います。

彼は、料理はできても、その資料を自然から選んだり、作ったりすることはできない、というわけです。採集・生産にかかわる場からはなれて育って、かわるモノが一変し、また必然的に自然を読みとる力、自然と共生する能力を失い、せいぜい自然から得たものを二次的に加工する能力をもつにすぎない。いわば、現代産業社会における消費者としての能力はもっていない。前代に共通した日常の物質文化をつくる生産者としての能力は欠けている、というのです。彼は、こうした自分を「都会人でしかなかった」と規定し、その「能力の質」をこう見ているのです。

これは彼だけに起きている現象ではないでしょう。このような生活と能力の質は高度経済成長のなかで日本中の子どもに広まってしまったのだらうと思います。別のことばで言いますと、村の「労働少年少女」が生活のなかで培ってきた諸能力は、そうした子ども世代が「学校少年少女」「消費少年少女」という子ども世代に構造転換するなかで、失われていった、というふうにも言えましよう。他方、学校のなかの家

庭科も、自然から資料を選び、つくるという前段階を省略して、電気・ガス・水道の完備した家に住み、お金で資料を買って加工するという生活を前提にして、これに合うような教育内容を組んできているのではないのでしょうか。

このように生活の位相が変わった状況のなかで、消費者としてのよりかしこい能力を身につける・つけさせるということが、ごんにちの学校家庭科に期待する通念として、できあがっているように感じるのは、先ほど使った文句をくり返すならば、家庭科の目的は消費者として自立する意識と能力をつくりだすことだ、ということですね。たしかに、これは、産業化・都市化した社会の生活構造のなかで生活していくうえで、欠かせない事柄です。

しかしながら、子どもが人間として成長するうえで、これだけでいいのだろうかという疑問が生じます。家庭科の優等生になるであろう彼も、同じ疑問を提出するわけです。じつは、そこから、家庭科の役割にたいする新しい期待が生じてくるのです。

さきほどの彼は、アフリカの子どもの生活誌を知るなかで、自分が自然と交わり、自然を読み、そこから資料を探りだして手づくりする、そうした物質文化の世界が奪われた環境で育って、そうした能力が自分に欠けていることに気づい

て、それを「便利さだけで文明をつくっていくと、人間の手からさまざまな能力がはげ落ちていってしまふ」と言うわけです。そうして、「はげ落ちていった」能力の取りもどしを願ひながら、次のような希望を告げているのです。

「人間性をゆたかにする文明のありかた、というものを考えなければいけないと、ゼミのなかで強く感じました。私は、都会でなければ生活できませんが、しかし自然人としての能力も身につけたいのです。二つは無理なのではないか」

彼は、自然人としての能力も身につけたい、と希望するわけです。それは、彼の文脈にそっくり返して言うならば、自然との共存の能力を取りもどしたいということであり、自然から生産と生活の資料を選びとり、手づくりする術を身につけたいということでもあります。単純化して言えば、消費の領域で生活する術のみならず、生産の領域——といっても、機械制工場生産のそれではなく、手づくりの生産の領域ですが——でも、自立できる能力を獲得したい、というわけです。

(東京都立大学)

『子どもって不思議』長谷川孝著ができました。読んでみませんか！



元気でやさしい日吉南小の子どもたち  
一人一人に本を手渡す長谷川孝さん  
カバーを描いた岡村高志さん  
見返しを描いた斉藤維津子さん



あなたも読んでみませんか  
(『子どもって不思議—学ぶことは生きること』1300円、送料250円)



〈2〉

## 植垣一彦

### オー君の死

絶えず拮抗することが／素手で悲しみを／受けとめる途だ（石原吉郎「物質」）

寒風すさぶ二月、横浜の小学校五年生「オー君」が十三階の高層団地からわが身を宙空にゆだねた。この悲しみに拮抗する何を私たちは持てるか、という設問を立ててみる。

するとたとえば、「自殺の引き金になった」とされる「担任教師の叱責」と姿勢の中に、同じ学校教師としての自分をあたら限り透視する、という課題がひとつ浮かび上がってくる。

さらに、何はともあれ「自殺」という事態は取り返しのつかないべらぼうなことなんだ、とわがクラスの子ども達に喚起すること、私に用意できる。

もとより、これらが、ひとりの少年を生きて生きていることを断念させたその経緯の重みに、

完璧に拮抗しうとは思わない。思わないがしかし、何人もの「オー君」と日々相對する稼業を選びとっている者の、つまりはひとりの学校教師としての、葬送の目札にはなりうるはずである。いや、なすべきはずであると言ひ換えてもよい。

そのように少なくとも私は信じて、可能な限りの情報の入手に努めた。そしてそのつど、子ども達に紹介していった。

子ども達の約半数は、私が触れる以前に、このニュースは既に知っていた。そのほとんどが、たとえば「おじいちゃんがお店からとんできて、新聞を見せてくれました。お母さんが読んでくれたときわたしは、しんじられませんでした」（寺戸麻実）というように、親に知らされている。そのとき、たぶん、親のわが子をおもいやる気持はかぎりなく接近していたはずであり、子どもにもそれは感受

されていたはずであって、そんな場面が持たれてよかったなと私には思われる。

むろん「先生に聞くまではまったく知りませんでした」という子も半数いたわけだが、感想を訊いてみると、いずれの場合も、子ども達の視線のひとつは、担任の叱責の仕方に向けられている。それほど共通して鋭敏になるということは、学校教師の相對の仕方が、子ども達の深層でいつも問題にされているというこの証左のように思われる。

視線の始まりは、オー君の「学校なんて破産しろ」という発言を担当がきつく叱責した、というところに注がれている。

「先生も、考えてみれば、はかいでできるか、できないか、にしきしなかったのも悪いと思う」（辻村澄子）「もしおれだったらそんなにおこない。だいたい学校をはさんずるなんて不可能ってわかるのに、その先生、本気にしておこるんだもん」（大倉正史）という具合である。そんなに勢い込むこともないだろうに、という違和と不可解の表明である。さらに、「おこり方にはげん度があると思います。精神病院いきとか、気がくるつてるといわれる、心にきずがついて、オー君の心がバラバラになってしまうのはあたり



まあだ」(小森雄一朗)「わたしだっていわれたら心にはりがささったようにショックを受けるよ。みんなだって言われたら悲しくなっちゃうでしょ」(寺戸麻実)というように、言葉の問題にも確実に届いている。

たしかに、「精神病院に行くことになる」「気が狂っている」という物言いは、二重に逸脱していると私も思う。ひとつは、「絶対無理にきまっている」(オー君の作文)「冗談とする彼に対しての正当な判断であったか」という意味においてであり、ふたつは、精神病(院)そのものに対しての不当な差別意識の表出という意味においてである。つまり、こういう使い方も、使われ方も、決してあつてはならないと私には思われる。

「言っていい冗談と、悪い冗談がある」とオー君に発した担任教師の認識は、「言葉には、言ってもいい言葉と、言ってわるい言葉があります」(孫銀珠)というように、そのまま担任に返されなくてはならない。

子ども達の鋭くやさしいこのような視線は、「オー君」にも忘れず向けられている。

「オー君は自殺してなになると思ったのかな。死んじやったら、なんにもできないし、たべたり、のんだりすることもできなくなるのに。オー君は、もうかえってこれなくなっちゃった」(武田善之)「きつい言葉を言われたって、がんばって中学・高校をのりこえていけば、もう自由なんです。もう死んだらおわりなんです。二度とかえってこれないんですよ」(千葉真由美)「まだ11年で終わるなんてとんでもないことだと思います」(谷野智恵)「オー君に言いたいと思います。命は一つしかないんだからそんなことで自殺しちゃいけないよ」(木村友香)というように。

オー君に呼びかけるこれらの文章は、とりもなおさず、当の自分自身にも呼びかけているのだと理解してまちがいないはずである。この辺りのはっきりした自己確認は、たとえば、「私だったら自殺しようとは思わないなあ。だってこれから先、またいいことがいっぱいあるかもしれないし、大人になって結婚して、子どもをうんで、みんなでなかよくやっていけるかもしれないし、お母さんにそっくうだんしてゆるしてもらうなあ」(宇治牧子)「ぼくだったら、登校拒否になるぐらいで、自殺までいかない、と思う」(加藤隆之)と

いう文章となつてあらわれてくる。

と、ここまで書いて、私は、学校教師には語るべき恥辱がなんと多いことかと呻吟する。その恥辱は端的に、傲慢さ、視野の狭さ、硬直性、権力性、とても言えようか。あるいはもっと易しく、子どもをどこかしらでナメてかかる態度、と言つてもよい。そしてこれらは、そっくり「教育」の恥辱に見合っているように思われる。こうしたことへの徹底せる自覚が、学校教師を救うひとつの方途であり、ひとりの少年の悲しみに拮抗しうる方法なのかもしれない——と書いて、さらに私の内面はくぐもつてゆく。くぐもりを抜けるために急いで次を付け加えよう。

子ども達の文章はここには部分的にしか引けなかったのだが、私は、全員の全文をみんなの前で読みあげた。そのさいごで私は、「いか……死にたくなったら……そのときは……先生の家に来い! とびきりうまいもん食わせてやる!」と、タンカを切っておいた。

そして、なんと次の日、ピンポンとばかり、三人の悪童連中が申し合せて、さっそく押しかけてきたのである。なんともかわいいう連中だわい、と苦笑した次第であった。

(横浜市立日吉南小学校)

## 「つながる」 その2

—現場から—

### 児玉 すみ子

「つながる」と「かわる」

前号でIという少女との関わりについて考察したが、「関わる」とは、英語なら、“involve”に相当する語で、「巻き込む、包含する、迷惑や面倒をかける」となり、本心をぶつつけ合い、葛藤を経ながら、深まり合う間柄ともいえる。濃密な関わりこそが、人の内面を深め、ひとの結びつきを強め、望ましい共同体を創り上げるのだという考え方からすれば、人と人との「つながり」などは、希薄な関係で、馴れ合いにすぎず、糸が切れれば、孤立に陥るだけということになる。

しかし、日本の学校では、五十名の大世帯が、狭い教室の中で、顔つき合わせて、一日中、暮らしていかなければならないことを考慮に入れよう。生きる知恵として、「関わり」より、「つながり」を求めるのが当然であろう。「つながる」とは、「互に糸で結ばれた、つかず離れずの関係」と定義するのだが、加えて、「人の内面や、事情に立ち入らず、ひとは、その人なりの世界を背負って生きていることを受容し、そのあるがままの存在とつながること」としたい。

これは、親や教師の過干渉—関わり過ぎ—

に辟易している若者たちの、生理的欲求でもある。

「つながる」と「まとまる」

「良いクラスとは、まとまりのあるクラス」と学校内では、定説になっている。確かに、集団としての力が発揮されるのは、成員が一致団結した時であり、それは又、成員に満足感を与えもする。しかし、「まとまる」ことのみを目標にすれば、異分子や非協力者は、除け者にされ、除け者の存在するクラスが、良いクラスであろうはずがない。

差異は差異として、尊重し、適度な距離を置き、互いが固有な点であることを認め、点と点とのつながりに心を配る方が、無理もなく、賢明でもある。ショーペンハウエル寓話に、「二匹の山あらしが、冬の山奥の洞窟の中で、体を寄せ合うのに、試行錯誤の後、針のささらない程度のギリギリの距離を見つけ、寒さをしのいで助かった」というのがあるそうだが、むべなるかなと思う。

「安全な雰囲気」

かくして創り出される雰囲気は、在りのままでいても脅威を感じない、心理的に安全な雰囲気、そのような中で、人は、適応能力を最大限に解放し得ると言われている。所属するグループの仲間による受容は、成員の自尊感情を高め、彼の行動の変容を力づけるともいう。ひとは、固有な個であると同時に、社会的存在でもあるから、その属するグループが、自分にとって、暖かく、魅力的であればある程、受ける影響は、大きくなるのである。

Sの属していたクラスは、まさに、その雰囲気を有していた。



全員に、個性豊かなニックネームがつけられ、「ひとりひとり違うことが楽しい、うれしい」「ひとり、ひとりの一握りの土が、我々のクラスの土台を作った」と、学級日誌に綴られる。数々のクラスの行事の発起人グループは毎回、異なり、主役が交替する。そして、参加、不参加は、個々の意志の尊重が、常に大前提となる。行事の報告は、全員に伝えられ、一部グループの秘密とされない。旅行にでもクラスで出掛けようものなら、不参加者に、ささやかだが、心のこもった、意表をついたお土産が渡される。

### 「置かれた場の中で癒える」

心を病む者が、カウンセリング・ルームの中で、専門家の適切な反応に支えられて、癒やされていくことも事実なら、人が、現実生き悩んでいるその場で、日常的な暮らしの中で、その人を大切に思い、暖かく受容的に接してくれる仲間たちの間で、徐々にではあるが、しかし、自然に、癒えることもあり得るのである。

「専門家以外のさまざまな人が、専門家に匹敵する、ある場合は、それを凌ぐ援助効果を発揮しうる」と述べ、又、

「人間は、実験室の中で純粹に人間になるのではなく、人間の現象に密着しながら、その現象を適確にとらえ、表現する」ことの重要性を説いた心理学者（残念ながら、名前は失念したが）の卓見を、思い起こすのである。

私の眼前で起こった、この、稀有な例を、適確にとらえ、表現するには至らぬ我が力不足のみが、口惜しく思われる。

### 「教師に何ができるか」

仲間の支えで、クラスの持つ雰囲気で、心を解放され、言葉を発するに至ったSの過程を見守りながら、非力な教師の私に、何ができるのであろうかと、考えた。子どもを傷つけこそすれ、癒す力など、現在の学校や、教師に、あろうはずもないという声が聞こえてくる。

しかし、それでも、学校は厳然として存在し、教師は今日も又、子どもと接している。現状が、いかに苛酷であれ、やはり、そこで、何ができるかを問わねばならないだろう。Sのようなことが起こり得ることを思えば、尚更である。

私にできることは、唯一つ、と答えよう。「クラスのひとり、ひとりを、本当に、認めること」である。これを、徹底して、自らに課すことである。どんな些細な事に関しても、一挙一動、一語一語、そして、たとえ一瞬といえども、ひとり、ひとりを、まるごと尊重することである。多くの阻害する条件にも拘らずである。

その一貫した姿勢を探り続ける内に、クラスには、互いを尊重する雰囲気生まれてくる。自分が尊重されれば、当然、他人も尊重するようになるのである。一旦、この雰囲気が創り上げられると、もう、教師の出る幕はない。ただ、暖かく見守るだけでよい。

問題児ひとりを取り上げて、あれこれ、苦肉を労するより、難業に変わりはないが、こうした雰囲気を持つクラスを創る苦勞を、我が身に課す方が、生産的予防的でもあるのだ。

子どもは、本当に大切にされれば、子ども同士、つながり、癒し合っていくのである。

## 夕暮れに



## 玄関のチャイムが鳴る

小学校三年生のMが教室で突然泣き出したときはほんとうにびっくりしました。

「そんなことおれにわかるわけじゃないじゃん！ はなののののはななんてよオ、そんなの、おれによめるわけじゃないじゃん、はなののののはななんてよオ！」

そう泣き叫びながらMは鉛筆をほうり出しノートをほうり投げ、読んでいた谷川俊太郎の「ことばあそびうた」を机の上から払い落とししました。私はなにがおこったのかとつきにわからず、泣き叫ぶMをあつげにとられて見ていました。

「そんなことおれにわかるわけじゃないじゃん！ はなのののののはななんてよオ」

Mは激しくしゃくりあげながら叫びつづけます。

Mの母親は、中学生のとき私が担任した生徒で、卒業後ずいぶんたって会ったときには、二人の子どもをかかえて離婚し、会社勤めをしていました。「短大を卒業して何もわからないうちに結婚して

しまったのよね」と笑いながら、ある大学が開設した社会人向け婦人講座にも出席し、離婚という試験をむしろ積極的のりこえようとしているように私には思われました。それがなにかの折に、「先生、うちのM、みてもらえないかな」という話になり、ようやく文章がひろい読みできるようになったばかりの二年生のMを、「それでは遊びのつもりでよこしてみなよ」と、一対一でみるようになりました。

Mはいつも阪神タイガースの帽子をかぶり、夕方、学童保育からの帰りに私の家の玄関のチャイムを鳴らしました。ドアをあけてやると、夕焼けに染まった大岳山がみえ、野球帽をかぶった小さなMが立っています。

Mは決して自分でドアをあけてはいってやることをしませんでした。こちらがあけてやるまで外に立っています。遠慮しないでいいんだよといっても決してはいってきません。母親はすこしはなれた道路に車を止め、Mの姿が内からあいたドアのかけに消えるまで待っています。ときにはMが離れたがらず愚図るのか、保育園にいつている下の女の子を抱いた母親がMの手をひいて玄関に立っていることもあります。母親がそうしてMをあずけたあと、買物や夕食の仕度をして迎えるころにはすっかり日が暮れています。Mは大あわてでノートや鉛筆を手さげにほうりこみ、私からもらったあめ玉を「ほら、もらったよ、S子にも」と妹に渡しながら、阪神タイガースの帽子をしっかりとかり直して帰っていくのです。

Mは部屋にはいつてくるなり、「先生、カケフのフって書ける？」「オレ、マユミのマって書けるよ」などと言いながら、先のまるくなった鉛筆でいきなり漢字を書いてみせます。担任の先生からも漢

字はよくできるとほめられるんだとうれしそうにしていますが、彼はそれらの漢字を全部、野球の選手の名前から覚えていくのでした。学童保育のチームで今日は五打数三安打だったとか、いまセカンドを守ってるんだとか、とにかく野球に夢中でした。

Mはそのように漢字には自信をもっていました、文章を読ませるとなかなかすらすらいきません。

「Mよ。漢字はよくよめるけど、もう三年生になったんだから、ひらがなのはいった普通の文章ももうすこしよめるようにならないとな」と私が励ますと、Mも、「そうなんだよな、オレ、ひらがなのはいった文がにが手なんだよな」とニコニコしています。

その日も「スーホの白い馬」だったか「スイミー」だったかをうまく読めず、私はまたいつもの気安さで「Mよ。お前さんも漢字はいいけど」といつものことばをくりかえし、それから「よし、今日は時間がすこしあるから、これを読んでみるか」と「ことばあそびうた」を渡し、その本の最初を読ませました。はじめはMも、「なに、こいつ」といいながら、それでも「はなの、のはな? へんだな。なに、こいつ」と読む努力をしていたのですが、だんだんじれてきて、とうとう、私のちよつとしたからかいのことば、あるいは心ない笑いが、彼の内部にふくれあがり限界点に達していた鬱屈に火を点じ、Mは突然大爆発をおこしたのです。

「おれにわかるわけないじゃん、こんなの! はなのののはななんてよオ、おれによめるわけないじゃん、こんなの!」

「ことばあそびうた」を与えると子どもたちはむきになり、私のからかいのことばが薬味<sup>薬味</sup>となってますます夢中になりというように普通は進行します。いつものMなら同様の道筋をたどったでしょう。

しかしそのころ、Mの母親には再婚の相手があらわれてMを海水浴につれていたり勉強をみたりわが子同然にあつかうようになっており、家でMは、母親からも新しく父となる人からもしつかり勉強するように、もつとすらすらと本が読めるようにと励まされ、本人も努力していたのでしよう。それがその日も相変わらずうまく読めなくて自分でも情けなく思っているところへ、ひらがなだけの奇妙な「幼稚な」本を与えられた。「オレは試<sup>ため</sup>された、馬鹿にされた」、Mはおそらくそう感じたのでしよう。それでもむきになって読んでみたもののうまくいかず、とうとうMの中でなにかが切れた。泣き叫ぶMを見守りながら、私は次の一瞬、そのように直感しました。

小さなMは、母親の離婚、そして再婚、新しい父親の出現、にもかかわらず本をよく読めない腑甲斐ない自分、そうした事態に全身で対峙してきた。そのMの魂の全重点をかけた忍耐に、私の手なれた皮肉やからかいがいかに残酷な仕打ちとなったか。私はいまでもあの夕暮の部屋で泣き叫んだMの姿を思うと、激しい羞恥におそわれます。

Mに極度の緊張を強いた再婚は短時日の間に失敗におわり、再度の離婚という事態が母子をおそいました。そしてそれ以後、Mは教室に姿をみせなくなりました。

夕暮れ、玄関のチャイムが鳴ります。すると私は、いまでもなにかのひょうしに、阪神タイガースの帽子をかぶったMが夕焼けの大岳山を背景にしょんぼり立って外で待っているような気がして切なくなります。

(4月号 53頁下段6行目「傷を負うたもの」は「傷を負うたものの」の誤りです。訂正し、おわび申し上げます。編集部)

# Weに なんでもいおう なんでもきこう

◆ヤッホー

久しぶりに気分の良い新聞記事に出逢いました。山本コウタロー氏の「思春期―自立」(朝日2・27)です。家庭科女子の必修、性教育も女子に対してのみ、しかも初潮教育あるいは純潔教育といった日本の現状は、女の子にとっても男の子にとっても、不幸だ、という内容です。

書き手と中身の意外性とも言いますか、深夜のバカライシ番組でよく顔を見るコウタロー氏の意外な一面にびっくりするやら、うれしいやらで、思わずヤッホー。

の歌詞が、いろんな意味で今もそのままだっていることを考えると、これをアタックしないワケにはいきません。朝日新聞にでも、氏直接にでも、大勢で何か言って、コウタロー氏にこだまを返したらどうでしょうか。Weのフォーラムに、このひと来てくれないでしようか。フォークソングの歌詞が若い人たちを支え、励まし、ある意味で思想を固めてもいったように思うのです。やさしさも思いやりも教えたと思います。

(東京・武末久子)

◆『人間って不思議』を読ませてくださいました。この本を読む前に犬養道子さんの『人間の大地』を読み、地球が砂漠化しており、そこに飢えて苦しむ人々がいて、その人々の犠牲の上に、中流の私たちの生活が成り立っている事実を知って、何かしなければ、と思いました。マザー・テレサの本を読んで、この人のように生きられないけれど、別の方法で何かで

きないだろうか、とその方法を探していました。そんな中で、この本に出会いました。

私は、ああ、やっぱり、と言いますのは、以前日本女子大のスクーリングで家庭管理の講義を受けた時、家政学を勉強して、卒業したら家庭科の教師になろうと、とても興奮したことがあったからです。

私が家庭科を意識したのは、高校を卒業してからでした。私の高校の家庭科の先生の授業は、実技的なものより、社会問題になって、いることを中心に皆で考えたり、レポートにまとめたという、小中学校とは異質のものでした。金魚の泳いでいる水槽に合成洗剤を数滴落とすと、まもなく金魚が死んでしまった実感は、大きな衝撃でした。その他に、結婚について食品添加物について、公害病について、化粧品について、などなど。

現在私は、学校の事務職員をしています。日本女子大の通信教

育で家政学を勉強している学生でもあります。勉強を始めた動機は生涯を貫く仕事を見つけたためと金魚の実験について、ある本で金魚が死ぬのは合成洗剤が有害だからではなく、えらが塞がれてしまっただけと書いてあり、どちらが本当なのか調べてみたいという二つの気持ちからでした。

まだ二つとも結論は出ていませんが、生涯を貫く仕事として、家庭科の教師を考えるようになりました。アフリカで飢えに苦しむ人々のこと、障害者のこと、環境破壊のこと、これらのことを知らない人たちに知らせて、どうしたらいいのか一緒に考えたいという理由からです。ですから『人間って不思議』を読んで、私の選ぼうとしている道が間違っていないとわかり、うれしいのですが確信が持てません。

大体私は無器用で、実技はてんで駄目なのです。今まで通信の勉強に費した三年という月日は、振

# Weに なんでもいおう なんでもきこう

り返れば早く過ぎ去ったのに、卒業するまで少なくともあと三年はかかりそうだと、自分のこれまでの怠慢さを思うと、これからの三年間は何と長く遠いものを感じられることでしょうか。

せ卵・合成着色料で染めたウツクシイ毛糸で編んだ十色のチョッキを、NHKテレビで見たのですが、本当にぞっとする気持ちになりました。今年は生協の所属班の班長になりましたので、近いうちにこのような勉強会を近所の人たちとやりたいと思います。

私の目的を達成できるのは、家庭科教師以外にはないのだろうか。怠慢な私だから、いつ卒業できるかわからないのに、今の夢を持ち続けることができるのだろうかとか心が揺れていました。でも、この本に出会ってしまっただけには何かしなければいけないと思いました。(茨城・大槻友江)

◆二・三月号の内容で話したいことがたくさんありますが、そのひとつ「親子で勉強したよ」(脇美智子さん記)とっても感激しました。清涼飲料水・漬物・に

昨日で一年間の連続講座「いま教育を考える」を終了しました。肩の荷がおりた感じと、つみ残したものの大きさに圧倒されそうなお感じの中に今います。やってよかったと思います。ただ一年間のしめくりの意味でもってきた「自立した人間関係をつくるために」

学校で、家庭で、地域で」で二つの分解を見てしまったことが、どうしても残念でたまりません。「経済的自立」の必要性を説く立場と「経済的には自立してなくても精神的には自立しているし、一方で老親の看護、あるいは地域での消費者運動にかかわっている

ので」という立場と。(熊本・須藤久仁恵)

津守房江さんの「子どもと共に親は育つ」でした。「砂がこぼれ」のような思いのところ、又最後の親になった時どう生きるか……の四行、本当にそういうことなんだ

なあ、と心から共鳴し、毎日の子どもも相手に忙しさだけを感じてむなしくなり、悲しくなり、ヒスを起こしている自分とその生活を、こんなふうに見直すことができるのかと、とても豊かな気持ちになることができました。

(アメリカ・大西麻里子)

な。

◆家庭科の実践で、福島さんのものは良かったですね。ぶたさんの話、息子に話したら「人間と同じなんだ」って喜んでいました。NC9:」以来、福島さんのところは必ず読んできました。生徒とかかわりの中から、自在に方向を変えていける人なんですね。会話の入った文章も読みやすい原因か

四月号では、家庭科のところ、とても読みやすくなりました。森陽子さんの文章、これが家庭科?と何度も「新しい家庭科を創るために、中学校では」を確認したほど。だけど、これが「新しい家庭科」なんですよ。 「天気の良い日に、一時間だけ思いっきり遊んだ、たったそれだけ……メンツを保つ事ばかりに腐心した姿をはっきり見た」なんて書く先生は素晴らしい。ぞくぞくっとしました。この方がこの先、どういう風に家庭科というものを取り上げていくのか、とても興味をそそります。

生徒とかかわりの中で、自分の腐心した姿を見る教師。私も地域の中で、自分のそういう姿を見ることがあります。言っていること求めていることと違う私に気づくのは、とてもいやな、いつまでも後に残るものです。そういう部分に言える森陽子さん、素敵ですね。

(東京・松本法子)

# 男の台所

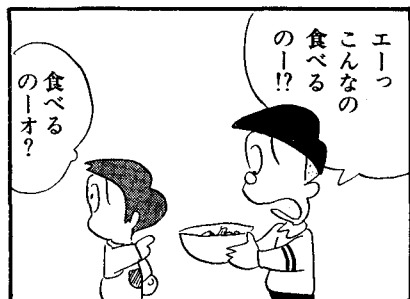
DAI

DOKO

★ブリは出世魚といい、幼魚から成魚になるまでに幾度か名前を変える。関東ではワカシ→イナダ→ワラサ→ブリ、関西ではワカナ→ツバス→ハマチ→メジロ→ブリ

## その2 アラ煮

## 高瀬 育

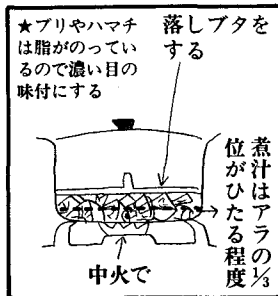
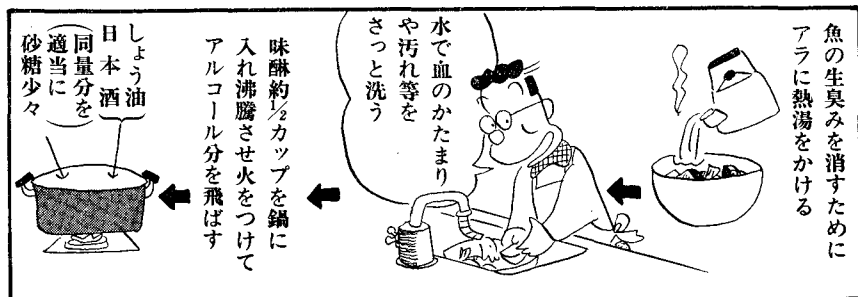


『アラ煮』

材料

ブリ又はハマチのアラ  
しょう油・味噌・日本酒  
砂糖  
長ネギ





隣家のおばあさんが、孫を連れて村の回覧板を届けにきた。

「それはまあどうもの。今日は久しぶりにいい天気で、いいあんなばいですのう。おや、くみちゃんもおばあちゃんと一緒にいいのう。まあちよつと寄っていかんかの。今ちようど、お茶が出ているところだすけえに。さあさあ、まあお茶一杯どうです」義母が誘う。

「それはまあ、悪いのう。じゃあ遠慮しないでちよつと寄せてもらわうかの」

「さあさ、くみちゃんもあがつて。何もないけど、こんなのつまんでくんないな」

こうして一時、茶の間に<sup>ひととき</sup>おばあさんたちの茶飲み話が繰り広げられる。

孫の成長ぶり、身体の具合のこと、村の誰それがどうしてこうして、と話が續いていく。お茶を飲み、せんべいや漬物をつまみながら、彼女たちのお茶飲みは果てしがない。

村の老人たちは皆、元氣だ。快活だ。

十数年前まで純農村だったこの村で、農業を担ってきたという自負もある。五十数戸のこの村の中で、三世代同居は98%を超え、四世代同居だって、予備軍を含めれば20%近くになる。核家族化が進んでいる現代において、

この数字である。息子世代が農業を継がず、勤め人になっている家が増えてきており、親たちと息子世代間に共通の話題がなくなりつつある（農作業を親子で共に担う中での知恵や技術の伝承も、だんだん減少せざるを得ない）。それでも、ひとり暮らしや、家族と住んでいても、ポツネンと時を過ごさざるを得ない都会のさみしさとは無縁のようだ。

六十年も七十年もこの村や近隣で暮らしてきたのだ。村のことならよく知っている。どこの家の中のことも、よく知っている。

「杉べえ（屋号）のうちのおじ（二男）が婿に行くそうだ。本当は分家させたかったらしいがのう。本人がこれでもいいと言っているというから、よかったことえ」

こういうニュースは、老人、特におばあさんたちに格好の茶飲み話で、村中に知れ渡る

のに二日とかからない。私の時もそうだった。

「正二郎サのところへ東京から嫁がくるそうだ」とは私がここに来る以前に村中に知れ渡っていたという。

私が夫と一緒に、慣れない畑仕事を始めた頃、遠近の畑で働く村の人が、さりげなく手を休めて私の方を見ているのだった。家に帰ってたぶん言うのだろう。「今さ正二郎サの嫁を見たよ」。見て、その人をわかったつもりになるなら嫌だなと思った。

良きにつけ悪しきにつけ、村の情報網は老人、特におばあさんたちだ。しかし、村の中に老人の目があるのはいいことだ。幼い子にとって、「おや、みおちゃん、自転車に上手に乗れるようになったのう」などと声をかけられることは、どんなに心安いことだろう。

若者、壮年層のパワーは「今少し」だが、老人子どもは生き生きしている。弱い者が生き易い社会は、私たちの望むところだが、果たして今の村の現状は、時代を一步先き取りしているのか、それとも遅れているのか。



## 高まる指紋押捺拒否への視点

宮本 なおみ

横浜の女子高校生であった辛仁夏さんの、怒りと悲しみにみちた顔が画面いっぱい映し出される。日本で生まれ育った彼女が十四歳に達した時、すべての在日外国人に課せられる指紋押捺の登録義務が待っていました。

日本人と同じように遊び学んできた彼女が「なぜ？」と問い、指紋をとらせなかったごく自然な感情の流れを十六ミリ映画「指紋押捺拒否」は追います。

「くやしかった」とまっかな眼をめぐう仁夏さん。国際記者をめざして外国留学をするこ

とになった仁夏さんは、再入国の際に、指紋を押していないと不許可になることから、結局指紋をとられてしまします。

仁夏さんの問いや怒

りは、在日韓国人・朝鮮人の共感をまきおこ

したばかりではなく、日本のありようや私たち一人一人の考えを問うものとなりました。

日本に在留する韓国人・朝鮮人は外国人全体（七八万人）の八三%をしめています。これらのほとんどの人々は、中国侵略の基地として朝鮮を支配した日本帝国主義の手によって、名前も言葉も土地も奪われ強制連行されてきた人々とその二世三世です。

「タマよけ」「強制労働」のために連行されてきた人々は、一九四五年の終戦の年には二一〇万人いました。そして一九五二年のサンフランシスコ条約と同時に一方的に外国人とされ恩給法や遺族援護法の適用からも除外されて「外国人登録法」の対象となります。

終戦直後の在日朝鮮人は、帰国できることになり、日本で生まれた子どもたちに母国語の教育をする朝鮮学校や学習の場を沢山つくるのですが、「赤化教育」とデッチあげられ、一九四九年に「閉鎖令」をしかけてしまいました。学校を死守しようとした十六歳の少年が銃殺されることを契機にして、激しい抵抗闘争がそのあと続きます。これらを抑えるものとして「朝鮮学校閉鎖令」の三年後に「外登法」はできました。

「外登法」の中の指紋押捺は抵抗にあい、実

施は三年おくれます。「外登法」は「在留外国人の公正な管理に資する」とうたい、戸籍法にさえない「管理」を強調しています。勤務先や職業など二〇項目に及ぶ記載と顔写真、指紋押捺が義務づけられています。十四歳からの登録義務が十六歳にはなったものの、「登録証」の常時携帯を怠ると二〇万円以下の刑事罰が課せられます。

「指紋押捺」の問題は、一番はじめに拒否をした韓さんの裁判を通して、あるいは全斗煥の来日をきっかけに、多くの人々の関心をよびました。この「指紋」がつきものの登録証大量（三七万人）書き替えを迎える今年、拒否運動の高まりはさけられません。二月二十八日現在で拒否をした人一〇三人。うち韓国籍七三名、米国籍十名、英国、ベルギー、インドネシア、イタリア籍の各一名が拒否を貫いています。東京・目黒区ですでに三人が拒否し、ともにたたかう輪が広がっています。

私たちはこの問題をどうとらえるのか、当然問われます。私たち自身も幾重にも輪切りにされた差別と分断政策の中にいます。それを払いのけて行くためにも、決してさけて通ることのできない問題として「外登法」の改正要求はあるのだと思います。



## CMの原則を軽視する風潮

鈴木みどり

CMとはコマ<sup>コマ</sup>・シャル・メッセージの略でテレビを宣伝媒体<sup>メディア</sup>に使った商品や企業の広告のことだ。こんな当たり前のことを確認したいと思うのは、この原則を軽視する風潮が広告界のみならず視聴者の間でも顕著で、そのような現状に不安を感じているから。

業界の調査の一つを紹介しよう。ビデオ・リサーチ社によるもので、視聴者のCM観を13〜59歳男女の年齢層別で調べている（テレビCM白書、83年）。その中に、「どのような内容のCMがよいか」という設問があり、①ムードのあるCM、②コミカルなCM、③商品情報を重視したCM、④商品名を連呼するCM、⑤夢のあるCM、⑥現実的なCM、という選択肢が用意されている。この選択肢

自体、CMの原則からいって、③を除けば情緒的かつ不必要なものばかりだが、回答の方は、次のように、もっと歪んでいる。

まず、回答者全体でみると（サンプル数六四七人、マルチ回答）、55%の人が⑤夢のあるCMが良いと答え、次いで多いのが②コミカルなCMで48%。CM本来の役割といえる③商品情報を重視するCMと回答したのは36%と、少ない。しかも、この数字は若い女性層でさらに減少し、20〜34歳では27%、13〜19歳では、わずかに17%という有様である。ちなみに、十代女性の57.5%が⑤を、64%が②を、また、43%が①を良いCMと回答している。

このデータから、中・高校生、あるいは大學生の女性は、少数の人たちを例外に、普段CMを見る時、その本来の目的をほとんど意識していないといえそうだ。代わりに、夢やムードを強調するイメージCM、あるいは面白さを描くナンセンスCMに熱心な今日の広告界のやり方を、積極的に支持している。いや、「支持」というほど能動的でもなく、彼女たちはもつと「優等生的」に、送り手の計画通り、期待通りの反応を示して得々としている。たとえば、こんな具合に——大原麗子を使ったサントリリーレッドCM「すこし愛して、

なが〜く愛して」を評して、親しみが持て、印象的で心に残る。同様の評価は武田鉄矢のサントリリーオールドCM「男の気持です」でも。山崎努の出るトヨタのクルマCM「男と狼」は男のロマンとムードがある、となる。

商品説明のないイメージCMを喜び、しかも、それに対して送り手の思惑通りの反応を示すような視聴者は、消費者としても、また一人の人間としても、依存的な生き方をしてるのが普通だ。この種のCMで消費者としての客観的判断は育つはずがなく、そういう消費者は商業主義に翻弄されやすい。一人の女性としての生き方でも、例にひいた三つのCMでも明白な性別役割分業観を批判的に見るなど、まず、できない（批判的に見る人なら、これらのCMを「夢やムードがあって良い」などと評価したりしない）。

しかし、現実には、商品説明を重視するCMは非常に少ない。説明があっても、広告主の都合のいいことしか言わない。CMの目的をしっかりと把握できれば、このような問題点にも気がつくはずだ。さらに、こうした数々の消費者問題を隠蔽するものとしてイメージCMがあり、ジェンダーステレオタイプがあるという事実も、見えてくるだろう。



## 女たちは何を うみだしてきたのか

主婦論争の30年

長谷川公一

有職であれ、無職であれ、女は結婚によって妻と同時に主婦になる。一見あたりまえのことのようにだが、家政のきりもりをおこなう「主婦」が妻とほぼ同義語になったのも、近代の核家族化の産物である。家父長制的拡大家族のもとでは、嫁がただちに主婦権をもちえたわけではないからである。

戦後四〇年の女たちの歩みと思想とが何をうみだしてきたのか。女性と男性が自立しつつともに歩むために、先輩たちは何を論じ、問題の所在をどこにみいだしてきたのか、何が閉却されてきたのか。私たちはどこから進むことができるのか。戦後日本の女性解放をめぐる思想の到達点と課題とを明らかにするために財産目録ができてよい頃である。

上野千鶴子編『主婦論争を読むⅠ・Ⅱ』勁草書房、一九八二年（各一九〇〇円）は若手女性学研究者による、そのような財産目録づくりの端緒ともいうべき本である。

戦後復興がなり、家庭電化ブームが訪れたちょうど一九五五年（私にとっては生まれた翌年）、石垣綾子氏の「主婦という第二職業論」がまきおこした主婦の職場進出をめぐる第一次論争、六〇年に磯野富士子氏の「婦人解放論の混迷」が提起した主婦労働の経済学的価値をめぐる第二次論争に、本書は、七二年の武田京子氏の「主婦こそ解放された人間像」をめぐる論争を加え、今は性の告白誌と化した『婦人公論』誌に主に掲載されてきた論文と、代表的な研究論文を収録している。

読む者は、とくに主婦的な閉塞状況に悩む子育て期の主婦は、三〇年前の論争に「主婦を取り巻く状況が根本的には変化していないこと、主婦に関する論点がほとんど出つくしている」ことを見出して、母たちの世代との連続性にある感慨を禁じえないに違いない。

主婦論争それ自体の成果もさることながら、駒野陽子氏の「『主婦論争』再考」や上野氏の解説を読んで、私が思ったのは、この論争を批判的にとらえかえしながら、主婦論が

成熟してきたことである。とくに、主婦論争を「家庭論争」として解読した上野氏のⅡ巻の解説は、諸説への鋭い批判に富んでいる。

主婦論争の問題点はどこにあったのか。今日の視点からみても重要なことは、「社会主義婦人解放論」に代表される家事労働社会化（万能）論者の議論の一面性と限界とがあらわになってきたことではないだろうか。

家事労働社会化論者の多くは、家事労働と家庭、双方のポジティブな位置づけを欠いていた。上野氏が筆法鋭く批判しているように、家事労働Ⅱ主婦労働という家庭内性別役割分業を不問に付したまま、個別化された家事労働を、社会化され、極小化されるべき必要悪として、否定的にとらえてきた。

家庭と家事労働は、人間の自立と共生にどのような意味をもつのか。駒野氏は「性別役割分業排除と矛盾しない新しい家事労働観」の確立を提起している。上野氏は公的領域から峻別すべき「性と生殖という人間の自然に基づいた」私的領域として、家庭の価値を説く。家事労働と家庭、両者についてポジティブで具体的なイメージを提示し、具現化していくこと。「新しい家庭科」の課題と人間解放論の課題の接点を、私はここにみる。

四歳といっても十二月二十五日生まれの私は満で二歳、茶目でおしやまで強情で行動的だったようだ。

「私生意気だから薬味でも何でも食べるの」と生意気を是認したり、「おみつけ飲み飲み御飯食べよ」と汁かけご飯を拒否したり、ご飯をこぼすと目が潰れると言われて「見えない見えない」と首を振ったり……これは母や周囲の人の話によって再生された記憶だが、満三歳位からは自分の記憶になったと思う。

人間の記憶は満二年八月という説があるとか。そういえば私もはつきり憶えているのが、橋の落成式に花火が上がり、ふわふわと落ちてくる風船の鶴を、大人数人が竿で取りこして着るうちに、隣家の酒屋に叩き入れてしまったこと。兄の肩車で提灯行列を鍛冶橋の袂に見に行き、橋の柱の灯が火事のように明るいので、火事橋なんだナと思い込んだこと。新聞集録で調べたら、前者は大正三年十月二十五日の鍛冶橋の落成式、後者は第一次世界大戦参戦の折、同年十一月五日青島陥落の祝賀行列とわかった。従って私の記憶初めは、二年十月ごろということになる。

母は五歳ごろまでお金をくれない。医者の子娘だったから、駄菓子屋は信用おけないし、

屋台は売手の手が汚いと言う。お八つは茶壺からもらうことになっていたが、祖母の巾着には一銭銅貨がいっぱい入っていて、日に一回もらっては屋台のえび煎餅を買った。(牛天やあんこ巻を食べたかったが、一銭では買えないし、母に叱られるのも怖かった。時たま父がお土産に買って来る、首にこよりのついで)

### 思えば思われる物語(二)

## 人間の記憶は？

### 丸山光子



た亀の子焼や鯛焼など、どんなにうれしかったことか。駄菓子屋で買うようになって、買った物をいちいち見せに帰らねばならなかった。ある時桃色のお釜の中に水飴の入っているのを買ひ、母が蓋をとると黴が生えていてそのまま取り上げられてしまった。そのころになるとシン粉細工も買う。梅干大の白餅と鞠豆大の五色の餅が、セットになって経木

の上のつてるのを買ひ、散々いじくり回した揚句、何もできずに手垢で薄汚れたその餅を最後に食べてしまうのだから、売手の手も心配だが、こっちの方も安心とは言えない。

母がお八つの茶筒を斜めにしよよく石童丸の話をしてくれた。「高野山というのはこんな急な坂だから、女の足では登れない。母を麓に残して石童丸一人で行くのだが、父の顔を知らないの、実の父の袖を捉えても名乗ることなく別れてしまふ」。ここに来ると母も私も涙をポロポロ流して泣いてしまふ。母の話は身振り手振り真に迫って上手だった。五歳下の妹は千葉に伝わる怪談や黄門漫遊記を聞き、怪談は今でもほんとに怖いという。

半分創作であろうか、父が台湾に行った時、迷い込んだ部落でかくれて見ていたら、生蕃がされ首を並べて叩いたその音が、シャロンシャロンシャロンだったという。その形容の絶妙さ、母の話は毎回創作脚色を加えられて、何度聞いても新鮮だった。

厳格でやかましい母だけど、話上手話好きが子どもに幸いしたと思う。

(注1)昼間打ち上げられる花火の中に入っている紙子の動物人形などの風せん

(注2)お好み焼の中に牛肉が入っているもの

時々、男の子たちが、「先生たちのいないクラブだといいなア」と言う。やれ、おやつだから手洗って並べとか、片づけるとか、早く帰れとか、うるさいのだと言う。「口を出すのは最少限に」と自粛しているつもりなのにねと苦笑い。オイ、マダ、コレデモウルサイノカ。

いつだったか、やはり、男の子たちに「ねえ、若くて、なんでもできる男の先生に来てほしい?」と聞いたら、一斉に「ヤダヨ!! そんなの」「Aみたいなヤツがいい」。A君は、運動苦手で、とかく軽んじられている子、予想もしなかった答に啞然とした。自分たちがそんなにも優位に立ちたいのか。それとも、大人がうっとうしいのか。

一ト月以上も前から「基地づくり」が続いている。男の子たちが、スーパードンボール箱をもらってきて積み重ねて、部屋の一隅にバリケードを築いたのに刺激されて、女の子たちも、負けじと拾ってきて、このほうは、小綺麗な小じんまりしたのを作り始める。男の子たち、やがて、粗大ゴミから、三輪車の類拾ってきて、二週間位、部屋のビニタイルの上乗り回し「童心に帰って」遊ぶ。粗大ゴミの「宝探し」始めると病みつきに

なるらしく、まあ色々なものを拾ってくることに!! 次々と所帯道具を調達してきて、手狭になると、かけ声勇ましく、バリケードつき崩して、また広げるものだから、部屋中基地だらけになり、ボール遊びもできなくなったが、不思議に誰も文句も言わない。

男の子たち、熊の置き物を、どこやらから



探してきて、全員の髪の毛を切って(頭の良くなるおまじないだそう)乗せ、「クマのごせんぞさま」と書いたダンボール紙を壁にでかでかと貼り、毎日、おやつのお出を呼びかけ、お供えする(ポテトサラダの山が三日ほど放置されていたので、以後腐るものはご遠慮願うことにしたが)。お祓い用の木の枝まであり、クマのごせんぞさまの朝礼(!!)

の式次第を書いた紙も貼ってある。

女の子の基地は、三年生が威張るので、なかなか完成しない。怠けている子がいるからと言って、すぐ「反省会」を開く。いつかも、ちよつとのぞいてみたら、ボス格のMちゃんが椅子に座り、他の子は正座し、お説教のまっ最中。「こわいなア」と言うと、「先生はあっち行って」と撃退されたけれど、何だか教師の叱り方のかたちだけ真似しているようにいやな感じ。Mちゃんに似たくない子たちは、三つぐらいのグループに分かれて、トンネルのようなミニ基地づくりに熱中。

男の子たちの基地、そつとのぞいてみると、おもちゃまで調達してきて、思い思いのこつこつでくつろいでいる。部屋の掃除は、いやがるくせに、基地の中だけは、掃除機ブービーいわせて大はりきりやる。「私は基地づくりが大好きです。……自分の家にいるような気がするから」と文集に書いたSちゃん。大人の目の届かない、自分たちの解放区なのかな。実のところ、ほぼ一年の間、こんなに長続きた「遊び」はないのです。

でも、バリケード築くと「戦争」したくなるのかしら。側を通ると、男の子たち、しきりに挑発する。その手にのるものか。

♥ フウフウフウふうふ ♥

## 役 割 分 担



文・絵 ウツのみや

朝の7時10分、目覚まし時計のけたたましいベルの音によって僕たちは叩き起こされる。「健全者」と呼ばれる機動力を持つ彼女は、素早く着替え、顔を洗い、「障害者」と呼ばれる僕の介護をすませ、二人でコーヒード飲んで、7時半過ぎには部屋を飛び出し、満員電車で揺られてオフィスへ向かう。

そして僕は、ウイ書房の鬼のような原稿のサイソクを受け、イラストつき〇〇円という低賃金労働にいそいでいるのである。

最近割と仕事が多忙になり、経済的には人並みに近づいたが、その反面さまざまな問題も見えて来た。

まず、介護に来てくれる人間とのコミュニ

ケーションが時間的に充分取れないため、その関係が物理的に「してもらう」だけで帰結しがちになる。こ、これではまるでボランティアにお世話してもらってるみたいだ。いろいろ考えた結果、仕事が一段落するまで最小限の人間しか呼ばない事にした。

最も近くに住んでいる健全者がトイレと昼メシのみ一緒にしてくれる事になった。ヘルパーは来てくれるが、これは余り戦力にはならない。

「奥さんの方が健全者の場合は自分の洗濯を自分でやってもらわないと」

（ダンナさんが健全者の場合はいいのだそう

だ。オトコの人だから）

まったく共稼ぎ夫婦ってどうやって暮らし

ているんだろ。

残業の多い彼女の職場から部屋に着くのは大体9時、ひどくなると11時である。

それから食事、洗たく、後片づけとなると家事の分担がなければやれっこない。

少しづつ部屋の中は荒れて行った。

しかも二人は仕事に疲労している。

きつと今まではオンナがガマンして家事一切を処理して来たに違いない。

締切りまでに仕事を片づけ、僕はため息をついた。

仕事をもち、女も男も同じように疲労して

いても無条件で家事育児をしなければならな

かった主婦はさぞかしつまらなかつただろ

う。言いかえればその犠牲の上にオトコたち

は「働き」「社会の中だけで」ガンパツテ生

## 「家庭科男女共修」母親たちの意見

消費者運動に熱心に取り組んでいる方たちに「これからの男の子に必要な教科!？」—家庭科共修とその後の人生—というタイトルで話をしました。タイトルのせいか、男の子をお持ちのお母さんが大勢参加され、熱心な発言があり、関心の高さを心強く思いました。運営委員会の方が届けて下さった当日参加者のアンケートの一部を、ご了解を得てここに転載します。家庭科が新しい局面を迎えた今、家庭科関係者と、生活や教育を真剣に考える市民や親たちが、共に意見を交わしながら家庭科の中身を創っていく上で、貴重な手がかりになると思うからです。

(半田)

◆あなたが過去に受けた家庭科教育

◆高校では女子必修、男子は数学でくやしかった。ゆかたを長時間かけて縫ったが無駄でなくよい思い出となっている。家庭科の本質をいった授業はなかった

(小・高男子の母)

◆家庭科というのは名ばかりで「家庭がいかに人間であることの基になっているか」「夫婦・親子の愛」「人間らしさ」とは遠くかけ離れた、諸々雑用のやり方、面倒くさいことを女だけに押しつけるという感じであった

(子どものない人)

◆結婚生活にすぐ役立つ教育を受けたとは思えない。小学生の時から少しずつつ手伝ったが、その方が役立ったと思う(幼男児の母)

◆調理実習は役立ったと思う。育児については覚えていない。洋裁・編物は母に手伝わってもらったのを覚えていてる

(幼男女児の母)

◆退屈で関心は全くなかった。私立女子中高であったので、良妻賢母の象徴のようでおさら反発した

(幼男児、小学女兒の母)

◆男女差別を感じつつしか受けられなかった教科でした。今考えれば、教える側もそう感じつつ教えたのだらうと思います

(小・中男女児の母)

◆小学生の時は男女共学であったのに、中学では体育が別々になったように別々になり、高校では女子のみとなった。男子は体育を習っていたと思う。体力・筋力が異なるように男女を分けて家庭科を教えないければならないものなのか、疑問である

(幼児の母)

◆つまらなかつた。教科書の内容に疑問。教師の姿勢に不満、良妻賢母型の教えをいわれた。家庭科を学んでいなくても、家庭生活に不満はなかつた(中学男子二名の親)

〈家庭科男女共修について考えておられること〉

◆中学の技術・家庭の参観の折、あまりにも両親の出席が少なく驚いた。英数の参観なら多いのに残念に思った。高校生の息子は現在、全寮生の学校で生活しているが、洗たく、針仕事まで短期間で教えて出しました  
(中・高男子の母)

◆ぜひ共修を。二単位よりも更に充実して、人間教育として  
(中・高女子の母)

◆人間として生きていく上で共修は当然のことと思う。二人の息子にも家庭科を学ばせたい  
(幼・小学男児の母)

◆内容の深い科学的な授業を希望、現在の小・中学の料理もインスタントものを利用してでは、何が子どものためだろうか  
(小・高男子の母)

◆日本の消費者が、今世界の国々の中でどういう関係や仕組みの中に位置づけられているかということや、そこで起きている様々な矛盾や不幸を、どうすれば解決できるかななどを教えていけばすばらしいと思う。幸せに生きる、幸せな生活、社会は安心できる家庭生活からということ、家庭がいかに

すばらしい所であるか、更に人間らしきとは、などを、子どもたちが考えるきっかけとする時間となればよいと思う  
(子どもなし)

◆家庭科をやる男の先生がふえることを――  
(高・大学女子の母)

◆男の子を持って、初めて考えさせられたがぜひ必要なことであると思う  
(幼男児の母)

◆中学では男女別学で習っているのに、高校では選択しているのは不思議。中学から男女一緒にあつてほしい  
(幼男児の母)

◆家庭科で学ぶのはあくまで理論的であり、家庭での実際の経験が重要だと思う  
(幼男女児の母)

◆この思いを具体的にどうやって運動につなげていけるのかと主婦の立場で考えています  
(小学女児の母)

◆家庭科Ⅱ料理・裁縫・洗たく、育児Ⅱ女という考えでなく、家庭科Ⅱ人間生活学の基礎Ⅱ男女共同で、と考えている。物・服の収納にしても、よりよいやり方を求めたり新しい家電品を冷静な目でみつめられる力や、あらゆる汚れを落とす科学的知識の導入、人間が生きてゆく上で子どもの教育、

老人の世話をいかに皆で力を合わせてやってゆかなど、まだまだ考えたらきりがなほいほど、生活に密着した問題を、男女で解決する力を教えてやってほしい  
(幼児一名の母)

◆ぜひよい家庭科「共育」を、男女を問わず理解しあうために共修を  
(小学男児の母)

◆核家族や单身ずまいがふえる時代です。全中高校に取り入れるよう運動していきたい  
(小男児・中女子の親)

◆家庭の意味を考え、生きていく力を身につける必要性は、男女とも変わりがあるはずがない  
(幼男児・小学女児の母)

◆ぜひ必要です。たとえ面白くない内容であったとしても、なお共修であるだけでも、そうでないよりは！  
(小・中学女子の母)

◆男女共学の学校の中で共修でないことが不思議です。高校は私学など男女別学もあるもので、やはり中学で力を入れるべきではないか  
(小学女児の母)

◆今後の生活において、人として生きていくのに男女共修が大切なことを、もっと多くの人に知ってほしいし、また反省するところもあった。  
(小学男児の母)



◆家庭科というのは、家の中だけの料理・裁縫などと思われがちだが、本来は人間が生きていくための基本だと思うので、学校も親もそういう姿勢で取り組めばよいと思います  
(小・中学男子の母)

◆今後の家庭科教育についてのご意見・ご希望

◆男女共修を続けて、男女が一緒に和気あいあいとした雰囲気の中で、将来共に家庭を作り、子育てをし、社会生活を営むであろう異性と共に、明るい希望をもって学べるようになればいいと思う。家庭でも一致して取り組まねばならないことだと思う

(小・中男子の母)

◆人間の生活する場、人間関係の場として「家庭」をとらえはじめた時、初めて家庭科の意義がわかるようになった。家庭科は衣食住をいかにうまくこなすかということだけでなく、家庭の意味、生活の意味、国家・社会を家庭の関係を考えたりする科目であってほしいと思う

(幼男児・小学女兒の親)

◆共修であるべきだと思うし、女性差別の一步をふませたくない。学校教育においては

絶対にいや。「何事も覚えておいて損はない」が母の口ぐせだが、これではないでしょうか  
(小学男児の母)

◆教科書内容をレベルアップする。教師の力量をつける。経済など理科の視点を入れたいと現代生活に適應できない  
(中・高男子の母)

◆共修にするには、もっと内容を発想転換すべきと思う  
(小学男二児の母)

◆家庭科というものが、裁縫とか調理だけでなく、なぜ男女とも必要とされているかというところから、押しすすめていかなければと思う。もちろん男女共修である  
(幼男・女児の母)

◆内容的にもっと中身の濃いものにすれば、男・女分けて習うことではないと思う  
(幼男児・小学女兒の母)

◆男の家庭科の先生がふえればと思う  
(幼男児の母)

◆性教育もこの中に含めたい。生物などで性を教えるよりいいと思う  
(幼男児の母)

◆一人の人間が生きていくために最低必要なことは家庭や学校で教えてほしいと思う。また昔よりも便利で簡単に生きのびられる

ようになった分だけ。見かけだけの美しさの裏に恐ろしい危険が多くあるので、目でわからぬ専門的なこともどしどし学校で知らせてやってほしいと思う。家庭や学校で協力して、おかしいと思うこと、消費者の害になる物を除いていけるようになってほしいと思う  
(子どもなし)

◆消費者教育、生活人としての営みや知恵を21世紀に向けて、自立できる人間づくりを。他の教科(保健・社会など)と重なる部分の家庭科教育としての特色は？  
(中・高校女子の母)

◆私は今保育所で働いています。生活そのものの中身が生きていく力につながるようにと、毎日思いをめぐらせ働いています。この中で三人の子どもを育ててきました。色々な不安を持ちながら働いてきて……家庭の中でもムリヤリ子どもに押しつけている家事労働という思いも「人間生活学」という見地に立てたことがとてもうれしかったです。参加することによって、貴重な休暇が有意義に使えて最高！です  
(幼一、小学男女各一の母)

### Ⅲ 家庭科という教科のとらえ方

「家庭科は子どもの具体的な生活事象を教材とし、実践的活動を多くとりいれて、生活について科学的、総合的に学ばせ、生活を創造していく能力を育てていく教科である」それは「憲法25条、健康にして文化的な生活」を自ら実現し維持する力を身につけ、民主的家庭建設の基礎となる力を育てる教科であることを全国教研家庭科分科会では確認している。

今回、ここで確認しておくべきことは、家庭科は、生活の具体的過程について知識と技能の両面から教育を行なう教科であり生活教育の中心的な教科であるということであろう。したがって、現行の家庭科は小・中・高で教科名や内容編成の視点にちがいはあるが、それらの矛盾を克服して同一の教科としての性格を強めてゆくよう、一貫性や系統性を求めてゆく手だてが今後とも必要であるとの認識を持って今回の試案づくりに臨んだ。

また、従来の日教組教研の成果をふまえて、国際婦人年・差別撤廃条約の段階にふさわしく、男女にかかわらず生活的自立の必要性和生活を科学的・文化的視点から主体的に把握させようとする事への踏み込み、両性が働きつつ生命を生み育んでゆくに当っての社会的諸課題への認識の広がりなど、視点を明確化することを試みた。

### Ⅳ 男女共学家庭科の基本視点

| 男女共学家庭科の基本視点                     |                                                                                                                                          |
|----------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| めざす人間像—男女ともに自立した生活者・男女ともに連帯する生活者 | 1. 身辺処理能力と生活能力管理                                                                                                                         |
|                                  | (1) 生活行為としての身辺処理能力を身につけ、生活管理ができるようにさせる。                                                                                                  |
|                                  | 2. 生活文化の継承と創造                                                                                                                            |
|                                  | (1) 衣食住など、生活事象を科学的視点から理解させる。<br>(2) 衣食住、家族の生活を文化の所産として理解し、継承発展できるようにさせる。                                                                 |
|                                  | 3. 生命の誕生と家族                                                                                                                              |
|                                  | (1) 生命の誕生・育成の意義と過程を理解させる。<br>(2) 家族・家庭について理解させる。                                                                                         |
|                                  | 4. 生活と労働の関係及び性別役割分業の変革                                                                                                                   |
|                                  | (1) ひとりひとりの生活権及び労働権を保障するための生活課題を理解させる。<br>(2) 定型化された性別役割分業意識を変革させ、自立した生き方を考えさせる。<br>(3) 生活のしくみを、生産・流通・消費の関連で学ばせることにより家庭経済・家事労働の本質を理解させる。 |
|                                  | 5. 連帯と共生の関係                                                                                                                              |
|                                  | (1) 地域社会における人間と人間の関係の中で、生きる意義を理解させる。<br>(2) 生活環境における人間の自然の関係について理解させる。                                                                   |

高校では1.と2.が入れかわっています(編集部)

日教組は教研の中で、家庭科の男女共学の問題を提唱し、各県における実践もつみあげ、文部省に対しても再三要求をしてきました。

昨年5月には「家庭科教育内容検討委員会」をスタートさせ、小・中・高一貫した共学家庭科の内容を検討してきましたが、

昨年12月「男女共学の家庭科の構想」第一次試案をまとめました。

家庭科についてのマイナスイメージが強く、新しい家庭科の輪郭をつかみにくいという方が非常に多いので、共学の必要性、教科のとらえ方、小中高を貫く基本的視点の項をご紹介します。（編集部）

## I（略）

## II 家庭科の男女共学の必要性

家庭科の男女共学の必要は、国際婦人年の行動計画や“婦人差別撤廃条約”を批准するための手段としてのみ考えられてはならない。それは現代教育の在り方に関する基本的命題につらなるものとしてとらえる必要がある。

- 1) 近代前の家産・家業によって生産の場をもふくんでいた「家庭」は、近代になると消費単位としてその機能を縮小し、さらに現代の「家庭」は放置しておけば、“解体”の傾向さえみせてきている。

増加し暴力化してきた少年の問題行動、とりわけ家庭内暴力や、中・高年離婚の激増、三世帯同居の高齢者の他世帯以上の自殺率の高さなどにその状況がうかがえる。また、核家族化、さまざまな別居家庭の問題等を含め、「家庭・家族」のありかたそのものが、問われねばならないところにきている。

- 2) 現代は人生80年の時代であるが、子どもたちが高齢者になる時は人生90年になるかもしれない趨勢にある。

この長い人生を生きぬくために、生活に根ざした自立と連帯の力は、男女ともにつけなければならない。

- 3) 日本の近代化における家庭生活の変則的な発達の上で、家事・育児の責任が女性にのみあると考える生活習慣即ち、男は外で働き女は内を守るという性別役割分業が、他の先進工業国に見られないほ

ど長くつづき、現在もその影響が牢固としてある。加えて、政府は社会福祉の部分をも女に肩代りさせようとしている。

- 4) 子どもたちの母親は既に広範な雇用・就業（80%以上）の下にありながら、家事・育児の責任を負って、いっそう生活の負担を重くしている。子どもや家族の生活的自立が、母の労働負担に大きく関わってくる。

同時に、子どもたち自身も、将来は、男女ともに仕事をもつ事が予測される時、両性の生活的自立は、生活運営の上からも、女性の社会参加の上からも必要な事になってくる。

- 5) 戦後の消費材・消費様式の変化は急激で、生活に関する知識・技能の基礎教育は学校教育に求められている。

こういう状況の中で、子どもたちが長い人生を主体的に人間らしく生きぬくために“自立”と“連帯”の姿勢と力量をつける事は、大事な教育課題となる。

とりわけ生活者としての日常生活の身辺自立の方法を男子も女子も最低限必要なものを習得することは人生90年を生きぬくために不可欠なことである。それは労働による経済的自立とともに、精神的自立を支えあうものであって、子どもが将来どのような境遇におかれようとも生きぬく力として不可欠なものである。

家庭はひとが最初に出あう社会であり、子どもたちはそこで人間関係のあり方（連帯）を学ぶ。

家庭科の男女共学は必要な事である。

鎮目恭夫氏が「月刊総評」三月号に書いて  
いる。

社会の産業化は、家業労働者を雇用労働者  
へ転化することによって、定型的な性別役割  
を国民大衆へ普及させたり、経済競争の激化  
によって性別役割を再強化する作用をも示し  
てきた。にもかかわらず、女性の雇用労働者  
化は女性を夫と家庭の束縛から脱却させる作  
用をも持った。それがボルノ情報やセックス  
サービス産業の発達、避妊及び妊娠中絶のた  
めの技術の進歩を利用することの普及と組み  
合わさって、男女の性行動が旧来の道徳・慣  
習から解放させる動きを次第に進ませてき  
た。その結果、性欲の満足の獲得（または性  
的欲求不満の解消）に関する男女の平等化同  
権化）がある程度まで進んだ。しかし今まで  
のところそれには三つの難点がある、と。

1、主に女性用。ビルまたは妊娠中絶の自由  
化に依存するもので、その点では男女の同権  
化とは言いがたい

2、ボルノ情報、セックス産業の発達によ  
って、男女ともしばしば性的欲求を肥大化さ

れ、却って欲求不満を増大させられているの  
ではないか。人間の心身は、性愛に関する強  
い刺激に対する慣れによって、いつそう強い  
刺激を与えられねば反応しなくなる場合があ  
り、耽溺に陥る場合がある

3、昨今のセックスの自由化の最大の効用  
は、人間の性生活の喜びを家庭責任から分離  
させることらしい……。

さらに、男女の平等化Ⅱ定型的な性別割  
の撤廃と、雇用労働者の雇用機会と待遇の男女  
平等化Ⅱは、家庭責任をもつ労働者ともたな  
い労働者の雇用機会と待遇の平等化なしには  
達成しがたい。後者の平等化のためには、

(1)男女双方の労働者の平等な労働時間短縮  
(2)各人の家庭責任の遂行を補う社会福祉機構  
の拡充 (3)家庭責任の実務を男女が平等に負  
担する社会慣習の確立という三条件が必要  
だ。しかし、国家間の武力競争、経済競争を  
はじめ、企業間の営利競争はもとより、社会

のどのレベルの経済競争も、男女の平等・同  
権化に対立する。科学者や技術者の研究競争  
もまた、近年ますます経済競争の一環にすぎ

ないものになってきた。陶淵明は、小  
さな町の長官のような職を辞し「高貴  
は吾が願いにあらず、帝郷は期す可か  
らず」と悟り、自家の田園に帰った。  
それから千六百年後の今日の科学には  
帰り得る田園はない……。

この論文を鎮目氏は「有志の賢明で  
勤勉で辛棒強い抵抗なしには正道が開  
かれえないことは確かだ」で結んでいる。

前号の「性をどう語る」から今号の「結婚  
の風景」へ。この間たくさん本を新しく読  
み、再読もした。取上げたい好著は机の上  
にうず高く積まれるばかり。科学万博の開幕  
は、家族の未来に思いを馳せさせる。……思  
案投げ首のところに飛び込んだのが、鎮目氏  
の論文だった。はっとした。四月号・五月号  
のテーマはもとより家庭科男女共修や雇用機  
会均等法も、ここを視座に入れて論じなけれ  
ばと思う。

さて、数多の本の中からあえて三冊を紹介  
しよう。

岡田秀子著

『反結婚論』

亜紀書房 価六五〇円

十三年前に出た本。「ホーム・セックスはワイセツだ」と論ずる山手氏。〈序章 エロスについて〉は、今読んでもシャープだ。

人間の性行為は、プライヴァシーの内奥深くかかるにつれて、ワイセツから遠ざかり精神性の領域に入っていく。プライヴァシーとは「個人の自由と幸福を楽しむ、私生活の公開を避けること」。「私」には、公衆に訴えて主張しなければならぬ部分と、人目を避けることで守られねばならない部分があり、セックスは後者、という。

へもつとも、これは、白日のもとにさらけ出して生活闘争として進められる筋合いのものではなく、まさに密室のテーマとして守るべきものかもしれない。そして歴史の末に、革命の酒と熟すだろう。今は時期尚早というしかない。

だがオープンにするのが解放という風潮の中で、十三年後の今もこの論は根づいていない。

駒尺喜美著

『魔女の論理―増補改訂版』

不二出版 価一、五〇〇円

ユニークな漱石論「男性原理の挑戦者としての漱石」を始め、魅力あふれる女論、男論、文学論が平易な文章で展開される。おもしろさは抜群だ。

駒尺氏によればエロスとは「人間の総体的な交流、融合、それを通じての全パーソナリティの解放、昇華」となる。漱石こそ、エロスの不在をテーマとし、真剣に取り組んだ作家だと。たとえば『行人』は、スピリットを求めて止まぬ結婚でありながら、夫と妻が精神的にすれちがう存在でしかないことを彫り上げたものだ。

妻が、男の生の手段となっていることも、娼婦が、男の性の手段となっていることも、本質的には何程の差もない。社会が妻の座を殊更にもち上げるのは、女みずから夫と子供の世話をする道具だと、気づかせたくないからだ。男の性的欲望を充たす娼婦、男の生的欲望を全面的に充たす妻、いずれがいずれよりも高等だとは言いがたい、と厳しい。

もろさわようこ著

『おんな・愛と抗い―近・現代のあゆみ』

ドメス出版 価一、五〇〇円

松のたき火かがやく土間のむしろにたむろして、若い男女がそれぞれに夜なべをしながらの交歓には、労働と遊びとエロスがあたたく溶け合う。(下北半島「めさらど宿」)

同じころ支配層の女たちは儒教倫理に生きなければならなかった。「色を以て男に事ふる事は妾のことにして、心を以て殿御に事ふるは正妻の御務に候。故に御興入先の殿御如何に多くの妾在しませ候とも、色を以て之を争ふなど端なき御振舞遊間敷候(『母の訓』)すでにわわしい女たちの歴史を次々に世に送り、その延長として「歴史をひらくはじめの家」を創った著者は、現代日本の病相を「甘えのイデオロギー」に侵されたものと見、それが差別を支えていることを看破する。

原始の女たちの強靱なやさしさに学び、基本的人権の確立をめざして努力してきた人びとの歴史にもまた学び、わが生きる場において実践し、男女・人びとと自然との出会いが豊かに成り立つ明日をめざしたい、と結ぶ。

# 彼

## 「結婚」

半田 たつ子

「結婚」という言葉を使う度に、二人の女性が心をよぎる。

九年前、栄子さんが手紙に書いてきた女性がその一人だ。栄子さんは埼玉県の高校家庭科教師、誠実な人。かつて福井県の高校で私のクラスだった人。

——郷里に帰省し、モヤモヤを抱え込んだ。何よりのショックは、二歳下の幼なじみが自殺したこと。高校を出て学校事務員をしながら通信教育を受けていたまじめな女性だった。婚期に遅れてしまったことを悲観していたらしいが、何度か自殺未遂をくり返し、今年の正月、家の前の田んぼの雪の中で睡眠薬を飲んで死んでいた。

栄子さんは続けて「都会に住んでいれば、彼女は絶対に死なずにすんだといえると思います」と記す。「〇〇さんとこの娘はいいところへ嫁いだ、仕度がどうの、結納をいくもらったの、田んぼや山がどうの……こんな類の話ばかりで、私は腹が立ち、悲しくなり、周囲は変わり生活も変わったが、人の心や考え方は変わらないな、とつくづく思うのです」(女性が)二十五歳すぎても結婚せず

にあの村にいたら、よほど神経の太い人でない限り、ノイローゼにさせられてしまいます。あの村に住んでいる限り、しつかりした新しい結婚観や家庭観や男性観は、あるほうが不幸になるのではないかと、思っています」と。

その女性が自ら命を断つに至る苦悩を、私がおしはかることは不可能だ。多分、親であっても、それは無理だろう。しかし、彼女を死へと追いつめていった周囲の状況には、いくらかの想像力を働かせることができる。総理府の「婦人に関する世論調査」の選択肢を借りるなら、「なんといっても女の幸福は結婚にあるのだから」「精神的にも経済的にも安定するから」「人間である以上当然のことだから」「結婚したほうがよい」と考える人が90%にも及ぶのではない。そんな土地柄なのだ。もし彼女が都会に住んでいたら、または総理府の調査で「一人立ちできればあえて結婚しなくてもよい」と考える女性が24%に達した現在なら、彼女は自殺しなかったのだろうか？「結婚」という言葉は、こんな暴力性も持っている。

もう一人は、私の幼なじみの綾子さんだ。彼女は恵まれた家庭で大切に育てられたお嬢さんだった。戦中・戦後の荒波に翻弄されてお母様が寝ついてしまわれてからは、弟さんの母親代わりをつとめた。弟さんは二人とも東大を出、就職し、幸せな結婚をした。肩の荷を下ろした時、綾子さんはいわゆる適齢期を過ぎていた。

彼女は趣味に生きがいを求め、染色家としての道を歩み始めた。しかし健康を回復されたお母様には、綾子さんへの負い目があったのだろう。ご両親がすすめる、虎の門の由緒あるお宮の神官との縁談がまとまった時、綾子さんは四十歳を越したところだった。先方

には大きなお子さんが二人。敬虔なクリスチャンである綾子さんには、信仰が最大の難関だったようだ。トコトン話し合い、理解が成立したので結婚に踏み切ります、とのお便りをいただいた。

帝国ホテルの披露宴で、幼なじみとしてのスピーチを乞われ、私はお慶びの言葉のあと「二人の娘を持つ母親として、いまお母様がどんなに安堵なさっているかと……」をつけ加えてしまった。後日、綾子さんから届いたスナップ写真には、その時目頭を押えられたお母様の一葉があった。

若い日、二人の弟さんを一人前に仕立て上げた綾子さんは、今度は義理のお子さんに同じ心を注がれた。何年か過ぎ、ご夫君がご病気がちとのお便りに心を痛めていたのだが、長い闘病の末、遂に彼岸に旅立たれた。そして二か月後、綾子さんの訃報が……。

お葬式では綾子さんの高齢のご両親のお姿が会葬者の涙を誘った。安定した家庭を築きつつあるお子さんたちは喪服でもはなやか。祖父母が冬枯れの野なら、孫たちの一家は一面の菜の花畑。血のつながらない両者はこれからどんな縁を育てるのだろうか。

式が終わって、綾子さんの青山学院大時代のクラスメートと語り合った。「学生時代、幸福そのものだった方。こういう人生を予想もしなかった」「あんなに優しい方が、こうまで報われないとは……」。誰かが「綾子さんは、結婚なんかなさるなければよかったのよ。染色家として一人立ちし、ご自分のセンスを伸ばしていращしやったら、こんなに早く生命を縮めることはなかったと思うわ」と言い、ほとんどの人がうなずいた。「お母様がどんなに安堵なさっているかと」など、したり顔でしゃべってしまっている私は、いたたまれぬ思いだった。

綾子さんは結婚しなければよかったのか？ 答を求めて、かつて書いた「結婚」という文を取り出した。結婚後二年たった綾子さんを訪ねたことを記したものだ。綾子さんはこう語っている。

「私は、一人で暮らしてきた年月に、よく人からさみしくないと尋ねられたわ。でも楽しみを創り出していたし、結婚生活を体験していなければ、さみしいという実感もなかったの。結婚したいと思ったり、このままでよいと思ったり、感情の大きな波はありました。そのうねりと、結婚したいと思う相手の出現とがなかなか一致しなかったの、長い独身生活を送っただけなの。

でも、結婚してはじめてわかったことは、以前から家族をはじめまわりのかたたちによかれと心づかってきたつもりだったけれど、それすら、自分を中心としたものの考え方できわめてわがままだった、ということだったの。結婚生活は、利己的な生き方では一日も満足に営めないということね。さまざまの制約や雑事で、自分の時間が持てないような日々なのですけれど、すべてが私の自由になった独身時代の生活は、やはりほんとうのものではなかったと思いますわ」

いまから十三年前の綾子さんの言葉は、決して古くなっていない。わずか二年でこう語った綾子さんの結婚生活は、きつと深いものであったに違いない。綾子さんは個人的な自由と引き替えに、結婚によって豊かな人間関係を広げていかれたのだと思いたい。

アメリカで好きな勉強に打ち込んで、結婚などどこ吹く風の上の娘に、綾子さんの言葉を味わう日はくるのだろうか？



◆通信◆ 養家研通信 2号

かたつむりの歩みに似たり養家研究？  
家庭科の研究会でも養護教育の研究  
会でもおどなりにされている感じがし  
ながら、現場では手さぐりの状態で皆  
悩んでいる。なんとか横のつながりを  
とりながらがんばりたい。そんな思い  
で作られた通信。

- ・内容 実践報告「肢体不自由養護学校で！」（小野美保子・福山養護学校）森田千代子先生訪問記「養護学校家庭科教育における教育観」（石谷圭子・中国短期大学）、文献・テキスト紹介、など
- ・B5判、6頁
- ・事務局 〒780 高知市塚ノ原128-50  
舟橋久子 ☎0888-43-0380

◆パンフレット◆ 「良い病院」とは―北区  
の医療を考える会会報

スパー・不動産・貸ビルなど多角経営をしているオリビックグループが突然、東京都北区東十条に病院建設計画を公表して一年。北区の医療を考える会は、「北隣の東十条保育園の日照を奪うもの」、「営利を目的とする企業が実質的に支配するレンタル病院は、乱診乱療による高利潤を追求する医療になるのではないか」と反対運動をしてきた。

- ・内容 公開学習会を集録。富士見産婦人科病院被害者同盟の小西熱子さんは『良い病院』だと思ったのに―の中で、「医者からももらった薬をただ飲むのではなく、これは何の薬なのか聞いてみる、健康な時から、話し合って納得のいく病院を地域に作らせる、というのも患者としての行動。医療を根本から変えていくのはそうした私たち患者の態度が一番大きな力になるんじゃないか」と語っている。資料「病院建設・経営業務にのり出したおもな企業」一覧
- ・B5判、12頁、一部カンパとして百円
- ・連絡先 〒114東京都北区東十条3-10-3

◆上映会開きませんか◆ 中絶―北と南の女  
たち ゲイル・シンガー監督・脚本、'84年

世界六カ国―イギリス、ベルギー、タイ、日本、カナダ、コロンビア―を取材し、人工妊娠中絶の実態と女の置かれた状況をありのままに描いたドキュメンタリー映画。

コロンビア 250ドル 女の命の値段、まともな中絶が行える費用。病院には、自己墮胎に失敗した危篤状態の女が次々に運びこまれてくる。そして死。

ペルー 中絶して刑務所暮らし、子供も一  
緒に。子供を預かる男がないから。

タイ 一年に一度、坊さんが病院に来て  
おきよめする。

製作スタッフは全員女性。

「望まない妊娠を成立させたのは男と女。でも女の体が妊娠する。女は体をもつて全人生を生きるのです。中絶は罰せられるべきではなく、医療の保護のもとに置かれるべきです」と。

- ・問合せ先 T & K テレフィルム (〒106 東京都港区六本木5-10-28 恵伊幸マンション 302) ☎03-405-0261, 0436







### 〈We大阪の会〉

◆二月十七日、前回

の豊中、桜塚会館の隣、福祉会館で、参加者十七名。「女が働くということ」について話し合いました。83・6月号「はたらくことをめぐって」の中の「波」を資料に、現在、自分

について、とても興味深く、うれしかったです。  
小里さん、奏さん、岡さんたち、主婦としてそれぞれの立場での悩み、働くということのとらえ方は、考えさせられることが多く、よい刺激になりました。  
充実した生き方を求め、そして働き、その中で輝けばよいと神崎さん。そのために、私たちが職場で、くらしの中で見直し、変えていかねばならないものは多い。共にがんばりましょう。次回は、五月十九日、場所は同じ福祉会館、一時から、テーマは「育てること、学ぶこと」の予定。  
(北川好美)

まず「共修をすすめる会」の報告を兼ねて飯田さんに話してもらいました。76歳の飯田

◆三月三日のWe武蔵野の会は二回連続の盛況

### 〈We武蔵野の会〉

さんの話には、外へ出て働く女の少なかった時代の困難を乗り越え、闘い続けてこられた重みを感じました。同じく私たちの先輩たち、楠崎さん、遠藤さん（なんと、私の小学校の恩師であつたのです）、司会の神崎さんの、エネルギーと、その話しぶりの限りないやさしさは、その真剣な生き方が、私たちに共感を与え力づけてくれるからなのでしょう……。

現代人を取りまく環境（文化）のメカニズムを読み解く上で欠かせない視点の一つではないでしょうか。  
たとえば、伝統的な共同体社会ではとても

望めなかった女性の自立、解放が現在では得られたけれども、情報伝達のネットワークが変化したことによって、子育て一つをとっても女性たちは孤立した不安定な立場に追い込まれてしまっているのではないか。時々ふと「何のための自由か！」と腹が立つことがあります。産まない自由とは（100%の避妊法がない以上）、妊娠の恐怖に脅えることか？？自由を民主主義、豊かさ、女性解放とおきかえてもいいです。理念として漠然、曖昧としてきたことを、もう一ぺん、疑ってみる発想の転換をせざるをえないみたい。やだなこの年になって、頭の中を全部組み立て直さなきゃなんないなんて。

昨年やや沈滞ムードのあつた武蔵野の会、

久しぶりにこんなことを考えさせてくれる刺激的な会となりました。（文責・小田亜佐子）

### 〈We江東の会〉

◆久々に十人を超えました。

よかったあ！ ノツたあ！

このところ、数人しか集まらない時が続いて、何故集まらないんだろう。ほとんどしゃべらないで帰っていく人たちがいると、そのことを考えて、とても重い気持ちになって、誰

ただ一人の男性村上さんの話は、職場・家庭

のための会なんだ……。話したいことがあっても吐き出せる場じやないと思われるような会なんて、意味がないと思っていました。もうやめちゃおうか！　とも……。

そんなわけで、今回は「Weの会」とどう関わりたいか問い直そうと意気込んで行ったのです。

ところが、今回は話がスムーズに展開していきました。流れがよどみなくって、自然で一人一人が胸の中のためにスツと吐き出していました。

そのきっかけを作ったのは菊池さんかもしれません。

——小四の娘が夫に「お父さん、女には生理があるのに、男はどうしてないの？」「男はだらしなからだよ」

一同、「ええっ!?!」

どうやら、「生理」と「整理」を聞き違えたとのこと。大爆笑でした。そこから性教育へと話は進みましたが、子どもとの関係という意味で「遊び」についても話し合われました。

おとなは、自分が今までに体得した「いたみ」をも含めて、子どもからの要求以上のこ

とを与えようとしてはいいないか。先の先までを見越して、「解放すべき」という別の形の管理を強いてはいないか。

とても楽しいおしゃべり、という印象の中で、こんな深いテーマを胸に残してくれました。江東の会、最高!

※半田さんのやさしい顔を見てみると、安心して話せるのよ。とメンバーの一人。でも、私たちの力で、「安心して話せる場」を作り、そこに半田さんが出席する。そうなたらもつといい。

※内村章一郎さん登場について。「やっぱり男の人がいると良いねえ」「そりゃあ、そうだよ」  
(松本法子)

### 〈We愛知の会〉

◆二月の例会は、まず「会の一年間をふりかえる」のレポート。私たちは①家庭科男女共学実現のために―制度改革のための具体的な運動 ②家庭科教科書の検討―実現のための説得材料であり、実現の後には制度をよりよく支えるものとなる教科内容の創造の基礎の二本柱を追究した。

①については、その時々の中的情勢に、月一回集まるのを原則とする会としては、可能

な限り迅速に対応できたと思う。

②についても、出版にたずさわる方から、直接検定の話を開いたりして内容にバラエティを持たせつつ、最終的には出版社にこちらの意見・要望を伝えて、それに対する一定の返事をもらい内容改善の見通しもついた、などの成果もあった。

もう一つT社の高校家庭一般への批判に対する返事についての報告があった。「核家族化のもたらす問題」の記述に対する要望に「実践例を」とのこと、早速各自の経験交流。小学校教師のHさんから、最近の新聞記事―高齢化世帯の増加・寝たきり老人介護問題・離婚の増加―を用いて、子供たちとこれからの家庭生活の問題を話し合った授業のことが報告されて興味深く聞いた。

### 〈Weの読者会カレンダー〉

- |      |       |         |     |
|------|-------|---------|-----|
| 4・20 | 城北    | 北区十条出張所 | 二時  |
| 4・21 | 湘南・三浦 | 藤沢市民会館  | 二時  |
| 5・12 | 武蔵野   | 御殿山C・C  | 一時半 |
|      | 埼玉    | 中嶋里美宅   | 一時半 |
| 5・19 | 大阪    | 福祉会館    | 一時  |

# WATKUSHIKARANA-TA-NI

◆初めてのメッセージです。

「育てる」号も一気呵成に「青ペン片手に」読ませていただきました。創刊より読み手側に安穩とさせない魅力がずっと感じて来ました。

東京から帰鳥し、21か月間の子育て業を続けつつ、初めて主婦という女たちとつき合いを持ちました。その仲間たちにWeを時折り手渡してみたりするのですが、反応が「？」でした。男女役割分担を正に受け持っている身としては、今の暮らし方総体を検証するしんどう作業が感じられるからでしょう。かてて加えて連れ合いの日常をも含めて問い返す必要も出て来ます。―閑話休題―

ところが、偶然出会ったM子さんに渡したところ「じっくり読みたいから貸して」。言葉が届いたという想い。彼女は既に地域で、

暮らしそのものの丸抱えの運動を続けている人でした。今の状況に「？」を持ち、何かをなし続けている人、あるいはなそうとする人、こそ、Weの心はしつかと届くのだという現実。彼女と集中して会い、

語り、彼女の地域での集まりにも加わり、新たな出発を画して、今ケンケンガクガク中。東京での私は、集会、デモと動いたが、地域を背負い込むまでにはなりません。子育て業にはいかに地域が重要なものか、このかわりから、今自分発見の途上にいます。

Weは読むだけの存在ではなく、実に育て合う関係に成立しているものです。そして育ち合おうとする人と人を結ばせてくれます。

私自身、女の子一人を育てつつ同志として、人間として生きる力を、共に伸ばし合いたいと考えています。片岡輝さんに共鳴した私

と、連れ合いの子育て業進行形。

鈴木祥蔵さんの①⑤は今まさに出会ったカップルで集う彼女たちとの共通のテーマ。組上に載せている段階なのです。この指止ーまれ。出会いません。か。出会います。近所の方、お電話下さい。

待っています。(0835-23-3074)

(鳥取市古海一四七)

高草団地九号・前田享子)

◆昨年十二月、群馬県高崎市で、

「男と女の新しいかわり合いを求めて」という討論会が持たれました。男社会の恩恵を受ける専業主婦を自認する私としては、今、社会の第一線で働く女性の生き方に出会い、多くの意味で啓蒙される所がありました。そこで、この会を太田市でも、という加藤由美子さんの呼びかけに飛びつき、生協で知り合った八人の仲間と共に、今年二月二十三日討論会開催に向けてがんばってきました。私個人としては、テーマの「男女のかかり合い」を話すことの他に、もう一つこの会に大きく期待するものがありました。

私は、この三年間幼稚園、小学校のPTA活動を通して、物事の本質を語り合うことを避けたり、面倒臭がる多くの人々との出会いにすっかり失望していたのです。こんな失感情症人間多発の現象は、私の住む狭い地域に、たまたま現れた特異な現象に違いないと信じたい私は、新聞がこの会を紹介してくれたことで、華々しい花火を太田市に打ち上げたような気がしていました。きつとこの花火をみってくれる人がいるはず、一緒に、「きれいな」と心の琴線をふるわせてくれる人がいるはずと、期待に胸ふくらませて会に臨みました。でも希望の風船は、みるも

哀れにしばらくでしまったというのが今の私の心境です。

どこから出てくる意見も、既成の夫の役割・妻の役割を賞賛肯定するものばかりで、夫も妻も、夫であり妻である前に、一人の生きている人間なのだという根本的位置づけが忘れられているような気がしました。

これから高齢化社会に向かっていくことは必至な状態にある日本で、女性も、家庭から出て、高齢化社会を支える経済力とならざるをえない将来は、きつと訪れると思われまふ。又自立という言葉を正確に理解して、自分の人生を歩もうとする世代も、確実に育ってきていると思います。

それなのに、参加した多くの人は、能力ある女性（主婦の場合）イコール家事・育児・仕事の全てを一人背おって消化している女性という公式に賛同し、「立派」という勲章さえ与えるのです。なぜ自分一人の時間で、家族全部の生

活を背おわなければならないのでしょうか。なぜ家族構成員の一人一人は、自分の生活を自分の時間でまかなおうとしないのでしょうか。

私には、その能力ある女性とやらが、かわいそうでなりませんでした。自分を愛せない人に他人を愛せるはずがないのではないのでしょうか。

彼女も、他人を本<sup>ひ</sup>当に愛するために、まず自分を愛して欲しいと思います。そして「立派」という勲章をはずしてやれるやさしさを、私たちは持つべきではないのでしょうか。男と女異なる性として互いに愛し惹かれ合う時、同一生活場面を持ちたいという欲求は、生き物として自然だと思ひます。お互いの人間性を高め人間性を認めるようなかわり合いをして生きていきたいと願ひます。そして、夫を通してではなく、自分の生き方を通して社会とかかわりを考える女性が多く育って欲しいと思ひます。私たち夫婦の愛する娘・息子

に、自立した一人の人間としてかわわてくれる人生の伴侶との出会いを願わずにはいられません。

（太田・松本真理）

◆同じ県内に住む未知のWeの読者Mさんから電話をいただき、いま宮沢賢治記念館でお会いして帰ってきたところです。Mさんは二十八歳から二十年の間勉強を続けて家庭科教員の資格をとったという方。そのような方特有の向学心とがんばりをお持ちの方と思ひました。Weの内容にひびきあうものと会うことで、岩手県の読者の集まりを——ということも期待されていたようです。

地の核が育って、それが拡大されるようになれば、と考えていることを伝えました。

Weの提案する男女共修や、平等な男女、自立した男女のあり方を求めることにはいささかも異論はなく、一人前の男と女であることが何よりも先決と強調しました。

二時間近くいろいろ話し合つて別れましたが、Weを介して全くの初対面の者同士が、会つて間もなく語り合えるなんて、不思議なような、あたり前のような、とにかく手応えある仲間を見つけた思ひです。

（北上・押切郁）

◆中学の後輩が卒業の際、女子だけ奇型児を産まないための注射をしたそうです。風疹の予防接種であることを、教育の現場でそのように生徒や親に伝えているのは、一地域の一中学だけででしょうか。妊娠する性を持つ少女たちにそのように語る人は、今生きている障害児をどのように考えているのでしょうか。

（東京・大仏レア）

■北海道 “いじめ”の克服をめざす取組みが学校・父母の対立に発展—札幌常盤小（毎日2/6）

父母が独自に展開した、子どもたちの“いじめ”に対するアンケートや事例学習が学校側には担任教師を無視して学級経営に口を出したゆきすぎの行為として対立に発展。親と教師・地域が協力して解決をはからなければならぬ今、逆に信頼関係の欠如を露呈してしまった。地域の教育環境の根本にかかわる対立であり、一面で硬直した教育現場の姿を浮き彫りにもしている。（広瀬直子）

■新潟 盲人用の市街地図完成（新潟日報2/19）

新潟市の点訳奉仕グループ「目陽会」が市から委託を受け、市中心部の点訳地図を作成、目の不自由な人から喜ばれている。同会は、これまでも、単行本、電話帳などの点訳を行なってきたが、点訳地図は初めての取り組み。東京の日本点字図書館の協力をえて、二年がかりの労作を完成させた。（山口久子）

■千葉 「ザ・夜間中学トークマラソン」（毎日2/1・朝日2/4）

生徒不足で存続が危ぶまれている市川市立大洲中の夜間中学を守り、夜間中学への理解

を求める集会が市川市で開かれ、夜間中学の生徒や先生、卒業生、支援者ら二百人が参加。一人三分間の持ち時間で、「百人トークマラソン」で思いのたけを訴えた。19歳のある卒業生は「登校拒否で昼間の中学には行きませんでしたが、夜間中学はとても温かい家族的なところでした」と披露。夜間中学は現在、全国に三十四校あり、約二千九百人が学んでおり、生徒数は年々増え続けている。

■東京 宇井「公害講座」3月限り（毎日1/22）

宇井純東大助手が十五年間、東大の教室で続けてきた「自主講座 公害原論」が3月で姿を消す。水俣病の教訓を生かし「生きた現実を教科書に、日本の公害をどうなくしていくかを市民らと共に考えたい」との呼びかけでスタートした本講座が、日本の反公害運動に与えた影響は大きい。「今後は、深刻化している第三世界の公害問題と取り組むことに活動の重点を移していく。公害先進国日本の教訓を伝え、運動にアドバイスを与えるのが私たちの義務」と語る。（三橋典子）

□女性委員欠く審議会解消を（朝日2/26）  
都婦人問題協議会（鍛冶千鶴子会長）は鈴

木知事に提出した報告書の中で、各種審議会に女性委員の起用を促進するよう提言した。

報告書は、「男女平等社会実現への道を阻む最大の障害は性別役割分業という固定観念にある」と指摘。男女平等の社会的風土づくりを推進するためにまず行政自らが姿勢をたせと。（編集部）

□知事「違法」を示唆—中野区教育委員の準公選制（朝日3/7）

東京都の鈴木知事は、仮に別の区市町村から教育委員準公選条例の適法違法の裁定を求められた場合「私は前知事の判断に拘束されることなく、私の判断で対処する」と言い切り、「違法」であることを強く示唆した。（編集部）

■神奈川 浮浪者襲撃から2年、七十人が意見交換（朝日2/4）

「あれから2年、今、私はどう生きるか」と題した集会が横浜市中で開かれた。事件後、取材を続けた青木悦さんは、「事件後、市教委ではブロックごとに連絡会議を作り、町内会、PTA、学校が“一体”となつて非行少年情報を集めている。このような形で、子供の管理ばかりを進めていては、問題を解決できるわけではない。もっと底辺からの見直しが必要

要」と。

(山口里子)

■埼玉 秩父に彫刻の森を計画(読売2/18)

「参加・開発・平和」をテーマとする国際青年の記念事業として、秩父市山田にある県青少年総合野外活動センターに青少年が制作する彫刻作品を設置し、「青少年彫刻の森」として整備する事業をスタート。全国でも一、二の若さの本県の平均年齢は三十二・五歳。活力ある二十一世紀の埼玉づくりに、国際青年への本格的な取り組みは欠かせない、というのが県の認識。

■石川 「家庭科教育」テーマに読者の声特集(北国1/28・2/4・2/11)

(村上悦子)

「男子向き、女子向きといった内容でなく人間として自立して生きていくため、男女で築く家庭はお互いに責任を持つように、同一教育課題で同一内容を同一教室でやってこそ真の男女平等教育と民主的な人間形成ができると考える」と共修を実践中の先生の声。

「理論として共修はわかるが、男女には、それぞれの適性や役割分担というようなものがある。人類的歴史の性別役割分担というものを損なわぬ程度に節度をもつて」という男性も。全体では、家庭科というところまでまだ料理、裁縫という固定観

念の根強さを感じられた。

(山田千鶴子)

■家庭教育学級研究集会開く―金沢市(北陸中日2/23)

市内小・中学校PTA会員約二百人が参加して「私と家庭教育学級―大人の成長を求めて」をテーマに熱心に話し合った。家庭教育での悩みは、胸に納めず一緒に考え学ぼう。子育てに手遅れはなく、気のついた時から頑張ろうと、今後も勉強していくことを誓い合った。

(宇野佳子)

■福井 青年団結婚の手引書発行(福井1/13)

県連合青年団は、20年余りにわたる青年団結婚運動の、今後の運動推進のための手引書として「21世紀へ向けて結婚を考える」を発行した。体験者たちの歩みやアンケート、座談会などを通して、持ち家社会や地域の慣習にとらわれない、当人を中心とした結婚の重要性を訴えている。

(山崎京子)

■教賀市で制服論争(朝日2/10)

新学期から市立中学校の男子全員に制服を実施する教賀市では、父母の間に反発の声も出ている。「管理を強めるのが教育なのか」「商品を選ぶ自由を無視している」。実施について「PTAの会報や一般の新聞を読んで初

めて知った」という人が多く、一般の父母の意見はあまり反映されなかったのではないかと批判もある。

(高嶋みどり)

■愛知 「夫の育児時間」名古屋でも(毎日2/19)

田無市が男子職員にも「育児時間」を認める方針だが、名古屋市の男子教員も、このほど同様の措置要求書を同市人事委員会へ提出。同委員会は正式受理、具体的検討に入る。

(岡本のりこ)

■熊本 授業実践を通じて「生きた家庭科」をつくり出そう(熊本日日2/17)

このほど熊本市で、九州地区家庭科教育連絡協議会主催で、「家庭科教育授業実践交流会」が開かれた。九州各県の家庭科教師ら七十人が参加、「女子向け家庭科から一歩踏み込んだ、人間の自立を目指す家庭科授業の試み」をたたき台に論議を深め、男女共学の必要性を確認し合った。二日間にわたった交流会では、各地の実践報告のあと、共学への糸口を探った。共学を実践している熊本の教師からは、「小中学校段階から、子どもたちに共学の思想を植えつけることが大切」「生徒を変えするためにまず自分(教師)自身を変えていこう」との助言もあった。

(中山そみ)

### 日米中学生「いじめ」の意識比較

日本青少年研究所は、日米両国の中学生の意識や行動を比較した調査を発表した。

日、米の中学生2300人と1500人を対象に、実施時期は約一年前。〈いじめを見聞きした〉〈友達にいじめられた〉は、いずれもアメリカのほうが多い。しかし、いじめの内容は〈欠点や弱点をしつこくからかわれた〉〈仲間はずれにされた〉〈持ち物を壊されたり、隠されたりした〉〈殴られたり、けられたりした〉など、日本のほうが陰湿なものが多い。学校が楽しくない理由が〈いじめられるから〉は日14.4%、米2.4%、いじめを見た時、日本では〈そっとなぐさめる〉36%、〈見て見ぬふりをする〉29%、〈自分もいじめる〉7%。〈止めに入る〉は日本では2割以下だが、アメリカでは4割。報告書は日本のほうが仲間はずれや暴力など陰湿なものが多く、生徒に強い負担になっているその背景は、①放課後友達と全く遊ばない日76%、米16%、②自宅での勉強時間日1時間以上が過半数、米1時間以内が圧倒的などにあると見ている。(3・23)

### ◆ 思春期の悩み総合治療 ◆

登校拒否や家庭内暴力の生徒を治療する専門施設「青少年健康センター」開設の計画が筑波大の稲村博助教授らの手で進んでいる。治療相談部門は、精神医療のほか、スポーツや作業、音楽や絵画を取り入れ、催眠療法、遊戯療法など。24時間態勢の電話相談も。対象は中学生から大学生。

稲村氏は「明るいイメージの施設を。国にさがけて民間で」と。設立資金は各界からの拠金でまかなう。建設場所は首都圏内の数ヵ所に的をしぼり、61年に100人入所できる施設を、63年までにさらに100人規模の施設をと計画。同センター事務局は ☎03・451・0932 (3・13)

### ◆ 伸び悩む女性委員登用 ◆

国際婦人年世界会議の世界行動計画にもとづいて、国内行動計画をまとめた政府は、「婦人の政策決定参加を促進する特別活動の推進」で「国の各種の審議会・委員会・懇談会における女性委員の割合を10%に」

を努力目標とした。現状は国政レベルの審議会などの委員は59年現在4642人。うち女性242人で、比率は5.2%、政府は婦人委員ゼロの審議会の解消に努めるとしているが、未だに45.1%ある。

総理府婦人問題担当室長の松本康子さんは「委員を委嘱するにふさわしい社会的地位のある女性が少ない。有能な女性が正しく評価されるような社会をつくろうとする意識変革が求められる」と。(3・5)

### ◆ 男女格差を解消 ◆

厚生省は生活保護制度の中の「生活扶助」の男女格差を、3月限りで解消する。

これまでの格差は明治7年に制定された生活保護法の前身「恤救(じゅっきゅう)規則」が、独身で病気にかかり産業を営めない者に「1日男3合、女2合の米を支給する」と定めたことの名残。しかし、生活保護の考え方が「一般国民との相対的な関係を確保するためのもの」と変わり、男女平等要求が高まって、110年ぶりの方針変更。4日、厚生省は扶助基準を一本化し、生活保護基準額を決めた。1級地(大都市)の20—40歳の男女とも32,470円。

(3・5)

### ◆ 復古調の教育提言 ◆

日本経済調査協会は「21世紀に向けて教育を考える」との提言を発表。戦後の教育制度、男女平等などに疑問を投げかけ、論議を呼びそう。

すなわち「母親の役割は、生物学的にみても教育上からも軽視できない。女性には母親としての教養・知識が必要であり、これを母親になる前段で施す必要がある。父親は「子供に対し抑止者としての役割を果たさなければならない」と規定している。

これは父親と母親の役割分担を打ち出したもの。

会の委員長は岩佐凱実富士銀行相談役、25人の委員は財界、学界の有力者、官界OB。岡本道雄臨教審会長、石川忠雄同会長代理、木田宏同専門委員、林健太郎東大名誉教授らも名を連ねている。

(毎日、3・26)





## ◆ 臨教審周辺 ◆

### 教委公選に賛成

臨教審の有田一寿第三部長は、日教組などが主張している都道府県、市町村の教育委員会の公選制復活について「教員が教育委員に立候補することを制限するなら、教育を地方、民間に返すことで、民主主義の上からもよいと思う」と述べた（朝日—以下同じ—2・28）

### 学者・文化人が「教育研」

「政府の立場からでなく、国民の立場から教育改革を考えよう」と学者、文化人らによる「教育問題研究会」（呼びかけ人代表都留重人）が12日発足した。臨教審を批判する立場から、今後、2、3年間にわたり研究活動、提言などを行う。（2・13）

### 国民の反応に十分な留意を

自民党の教育改革特別調査会（会長・森喜朗前文相）は、臨教審の教育改革論議について意見を交わした。「教育の哲学・理念の論議が不十分」「国民が関心を持っている改革点を重点的に取り上げるべき」などの不満や批判が相次いだため ①改革論議に対する国民の反応にも十分留意すべきだ②6月の答申では、教育が原因の病理現象の改善策を中心に据えてほしい、などの要望を伝えることにした。（3・14）

## ◆ 中野区の教育委員準公選 ◆

東京都中野区が4年前に始めた教育委員候補者選びの区民投票（準公選）2期目の結果が明らかになった。投票率が27.37%と前回より15.62%も低落した理由を関係者は①自民党が投票バイコット指令をした②前回の候補者は著名人が多く、今回は地域活動家が多かった③準公選の意義を知らない人が多く、候補者紹介が不十分であった——と分析。

しかし、明るい面もある。今回の8人の候補者のうち3人は委員になるが、残る5

人とも、貴重な知識や体験をもとに中野の教育をよくするための連帯をすることになった。もう一つは、日教組中野支部が今年1月に始めた教育懇談会。情熱的な先生に接した父母から今後定期的に懇談会をとの声が相次ぎ「ミニ教研集会」も検討中。（3・1）

## ◆ 本名使用呼びかけ——荒川区 ◆

東京都荒川区教委は区立小・中学校に入学する在日韓国・朝鮮人子弟の保護者に、本名を名乗ることを呼びかけ、人種差別の解消に向かって踏み出した。同区で外国人登録をしている韓国・朝鮮籍は5600余人。人口比では23区中最も高い。その子どもたち約560人のほとんどが通称名、日本名を使い、本名は10人前後。「在日韓国人問題研究所」の裴重度氏らも区教委の姿勢を評価している。（2・13）

## ◆ 小学五年生が死を選ぶまで ◆

2月16日、横浜市金沢区で小学校5年の男の子（11）が、受け持ちの先生にしかられた後、高層住宅から飛び降り自殺した事件は、教えるとは、子どもとは、大人とは、生きるとは……、さまざまな問いを投げかけている。2月28日の横浜市議会常任委員会では「今回の事件は、子どもの成長に学校の指導が追いつかなかった典型的な例。積極的に事実を解明する姿勢で取り組まなければ再発を防げない」と。（3・1,18）

## ◆ 「いじめ」 ◆

いじめを原因とした中学・高校生の殺人や自殺が相次ぎ、陰湿化するいじめが社会問題となっているが、文部省は全国的実態把握のため、各都道府県教委に調査依頼をした。7月ごろまでに集計の予定。（3・9）  
法務省は人権擁護の立場からメスを入れようと、全国の法務局に初めて通達を出した。（3・13）



## 《表紙のことは一加藤由美子》

結婚後、夫にご飯の炊き方を教わった。手で計る水加減のナント難しかったこと！

しかし10年も経てばトロイ私でも知ったのである。水は多ければ多いなりのご飯がちゃんと炊けると。逆もまた然り。結婚の風景も変わる。

## ★Weバックナンバーのご案内★

- 〈vol.1〉 6月号 共に生きる  
7月号 新しい家庭科とは  
8・9月号 反戦とは、平和とは  
11月号 家事労働を問う  
1月号 新しい男と女のかかわりを  
〈vol.2〉 4月号 教師は、今こそ声を  
6月号 はたらくことをめぐって  
7月号 コミュニケーション  
8・9月号 老いを考える  
10月号 今、教科書問題を問う  
11月号 食べるということ  
12月号 着るということ  
83年増 学校はよみがえり得るか  
1月号 「1984年」  
2・3月号 住むということ  
〈vol.3〉 4月号 PTAって何  
5月号 いまこそ、家庭科を問う  
6月号 地域に生きる  
7月号 少年・少女たち  
8・9月号 “遊ぶ”ということ  
10月号 支え合いつつ ひとり立つ  
11月号 “病む”ということ  
12月号 つきあいを考える  
84年増 自分らしさをこそ  
1月号 学び・教えるとは  
2・3月号 “育てる”ということ  
〈vol.4〉 4月号 性をどう語る

が届きました。  
(青木)

いたします。

(中野)

けて下さいませんか(馬場)

その人間関係”です。(半田)

◆横浜市の小五生の自殺。

たった11歳で死を選んだことが、なんともいたましくやり切れない思いでした。

同じ年頃の息子も大きな衝撃を受けたようで、新聞に見入っていました。翌日、

「先生、絶対話すよね」と

思い込んで登校したのですが「先生、新聞見なかったんじゃない」と彼。話題にならなかったと言います。

でも、どうぞ今後とも愛

とても残念に思っていたところ

読者のみなさまには右下

から左上に読み移るという

ご迷惑をおかけする結果にな

つてしまいました。

でも、どうぞ今後とも愛

まま始まった四年目。

もう一度お友達に声をかけ

◆三月一日、Weが出来て

♣ “We人気ベストテン”な

♥ この欄を書いてから、本号

きた時に「うわーッ、失敗」

でも「新しい家庭科を創

を届けたいまでの間に一刻も早くお知らせしたいことが

がって、担当したアンテナ

のために「それぞれが注目

3・30 We公開ゼミ、4・6共

っていたのです。工夫した

れないのが残念。次号で。

一方、本号で十月号の投稿募

結果があればね。

もちろん他の連載も好評

集をする：月刊誌のもどかし

「先生、絶対話すよね」と

思い込んで登校したのです

さを感じつつ、ご期待に添え

る誌面をとの願いは片時も心

## 新しい家庭科—

発行所/(有)ウイ書房

Vol. 4 No. 2 1985年4月20日発行  
〒530(年間購読料・増刊号含¥6700)  
編集兼発行人/半田たつ子

〒182 東京都調布市西つつじヶ丘2-25-14

☎03(326)1380 振替 東京6—59867

印刷所/(有)岩佐印刷所 〒112文京区春日1-6-7

|    |                |                |                |                |              |              |
|----|----------------|----------------|----------------|----------------|--------------|--------------|
| 川  | 富貴堂            | 野上書店、紀文堂書店     | 丸山書店           | 亀岡             | 亀岡書房         |              |
| 札幌 | 京栄堂書店          | 〈杉並〉木風舎、新愛書店、  | 江南             | 青雲堂            | 宇治書店         |              |
| 札幌 | 北東京堂書店         | ブラサード書店、たつみ    | 豊橋             | 文教書店           | 住岡書店ジャスコ     |              |
| 函館 | 矢野書店           | 書房、みどり書房〈新宿〉   | 豊田             | 耕文堂            | 多屋孫書店        |              |
| 青森 | 神田書店           | 紀伊國屋書店、模索舎、    | 田嶋             | 鈴彦書店           | 流泉書房、ヒカリ     |              |
| 盛岡 | 成田本店           | ブックスマイ、伊野屋書    | 崎              | カマクラ文庫         | 書店、日進堂、明文館、文 |              |
|    | 東山堂            | 房、ジョッキ渋谷〉すべーす、 | 張旭             | 活人堂            | 進堂書店、アイヨ書店   |              |
|    | みみずく書房         | いしかさい〈葛飾〉宏精堂、  | 瀬戸             | 三浦書店           | 西宮           | イカロス書房       |
|    | 信栄書店           | 中村書店〈世田谷〉やまべ   | 碧南             | ケイコウ書林         | 尼崎           | 宣文堂書房        |
| 花巻 | 誠山房            | 書店、江崎書店〈練馬〉か   | 愛知             | 日進書房           | 姫路           | 姫路丸善         |
| 水戸 | 松田書店           | じか書店、平形書房〈北〉   | 刈谷             | 酒井日進堂          | 明石           | 浅野八代書店       |
| 仙台 | こどもの本の店        | 愛京堂〈墨田〉業平堂〈江   | 岐阜             | 宝島             | 米子           | 学友書房         |
|    | ブルーの家、八重洲書房、   | 東〉文俊堂〈品川〉シグマ   | 渥              | 栗山書店           | 岡山           | 弘栄堂          |
|    | ボラン、萩書房、高山書    | 図書〈吉祥寺〉ウニタ書    | 新              | 万松堂            | 米            | 今井MC本店       |
|    | 店、金港堂、千忠書店     | 店〈目黒〉中川書店〈三鷹〉  | 小千             | 鳥谷書店           | 出雲           | 今井書店         |
| 古川 | 高山書店           | 第九書房、たべもの村〈調   | 新長             | 英進堂            | 広島           | 武田書店         |
| 秋田 | ホビット館          | 布〉みづは書房〈小金井〉   | 上              | 覚張書店           |              | やまびこ書店、い     |
| 酒田 | 加賀屋書店          | 店〈こがや書店〈府中〉国府書 | 越              | 福豊書店           | 竹原           | つみ書房、ニシヤ書店   |
| 山形 | 八文字屋           | 店会〈国分寺〉青野書店    | 尾山             | 福豊書店           | 福山           | 草間書店         |
|    | 高陽堂書店          | 〈国立〉増田書店富士見台   | 富山             | 清田書店           | 山口           | 岡田書店         |
| 尾花 | ほんべい           | 店〈立川〉石川書店、オリオ  | 岡              | 清文堂            | 松山           | 白藤書店         |
| 鶴岡 | 鈴木書店           | ン書房、泰明堂〈小平〉和   | 谷              | イソップ屋          | 観音寺          | 去来社          |
| 福島 | 阿部久書店          | 中書店、松明堂〈清瀬〉マル  | 松本             | 笠原書店           | 徳島           | タカハシ書店       |
|    | 岩瀬書店           | オカ書店、飯田書店〈町    | 飯              | 新光堂書店          |              | 雄徳堂徳野書店      |
| 郡山 | 西沢書店           | 田〉久美堂〈多摩〉くまざ   | 長              | 牧野書店           | 土佐山          | ブックスエミール     |
| 会津 | 松文堂            | 永山店            | 金              | 平安堂            | 北九州          | 依光書店         |
| 保原 | ニシザワ           | 横浜 文教堂、有隣堂、    |                | うつのみや          |              | 北九州書店        |
| 藤前 | 木村書店           | 栄松堂            |                | セールスセンター       |              | 白石書店         |
| 田中 | 川島朝日堂          | 横須賀 中央堂        | 福井             | 北国書林           | 福岡           | 黒崎ひとりつわB.C   |
| 水戸 | アルプス社          | 川崎 北野書店        | じっぶじっぶ、吉川隆文    | ひまわり書店、        |              | 福岡 金文堂       |
| 結城 | 至誠堂書店          | 早川書店           | 堂、品川書店、勝木書店    | 海光堂            | 二日市 近江スグレ店   | 二日市 近江スグレ店   |
| 浦和 | ツルヤB.C         | 中村書房           | 教奈 海光堂         | 海老山書店          | 久留米 菊竹金文堂    | 久留米 菊竹金文堂    |
| 川口 | 太陽堂            | 中村書房           | 尾松 尚古堂         | 尚古堂            | 唐津 日新堂       | 唐津 日新堂       |
| 久喜 | 岩瀬書店           | 大船書房           | 松三 高山支店        | 高山支店           | 佐賀 金港堂       | 佐賀 金港堂       |
| 越谷 | 須原屋            | 相模書房           | 大 旭屋書店本店、      | 旭屋書店本店、        | 長崎 文光堂       | 長崎 文光堂       |
| 東松 | 新井書店           | 藤沢 東松堂         | 紀伊國屋書店、ユーゴー    | 紀伊國屋書店、ユーゴー    | 佐世保 紅屋書店、金明堂 | 佐世保 紅屋書店、金明堂 |
| 和光 | ブックスサトウ        | 厚木 内田屋書房       | 書店、樋口書籍、米原十六   | 書店、樋口書籍、米原十六   | 熊本 高校生協、三章文庫 | 熊本 高校生協、三章文庫 |
| 狭山 | 温古堂書店          | 綾瀬 藤美堂         | 堂、藤川書店、学友、西坂   | 堂、藤川書店、学友、西坂   |              |              |
| 蓮田 | 日野屋書店          | 座間 王コウ書店       | 書店、呼文堂、増田書店、もり | 書店、呼文堂、増田書店、もり | 宮崎 松山書店      | 宮崎 松山書店      |
| 大宮 | 比企文化社          | 秦野 榎本書店        | 東大 文泉堂         | 東大 文泉堂         | 大分 開書堂、今村書店、 | 大分 開書堂、今村書店、 |
| 入間 | 山屋             | 茅ヶ崎 文泉堂        | 和泉 伊勢治書店       | 和泉 伊勢治書店       | 志布志 スズキ書店    | 志布志 スズキ書店    |
| 船橋 | 楓書房            | 小田 伊勢治書店       | 豊中 太陽堂         | 豊中 太陽堂         | 鹿児島 吉田屋書店    | 鹿児島 吉田屋書店    |
| 松戸 | マスタ書店          | 小田 百町森書店、吉     | 藤井 豊文堂         | 藤井 豊文堂         |              |              |
| 津田 | アリ書房           | 静岡 見書堂、森上書店、童心 | 高槻 豊文堂         | 高槻 豊文堂         |              |              |
| 鎌谷 | ベンギン書房         | 警田 宮崎書店        | 河内長野 河南書店      | 河内長野 河南書店      |              |              |
| 佐原 | ヤマトウ書店         | 田北 あつみ書店       | 吹田 アミーネ江坂本店    | 吹田 アミーネ江坂本店    |              |              |
| 市川 | 前原かつぱ          | 松谷 谷島屋書店       | 枚方 アイアイ書房      | 枚方 アイアイ書房      |              |              |
| 安房 | 西武B.C          | 津松 遠州堂         | 池都 春江          | 池都 春江          |              |              |
| 日成 | 元山書店           | 清水 戸田書店        | 京 松香堂書店        | 京 松香堂書店        |              |              |
| 三省 | 大和屋書店          | 宮 文正堂書店        | オデッサ書房         | オデッサ書房         |              |              |
| 東京 | 岡田書店           | 名古屋 ウニタ書店、     | 中島書院           | 中島書院           |              |              |
|    | 多田屋            | ボランの広場、日比野泰    | 井田書店           | 井田書店           |              |              |
|    | 大杉書店           | 文堂、谷口正文館書店、    | 恵文社神足店         | 恵文社神足店         |              |              |
|    | 千里堂            | 稲沢文光堂、白樺書房西    |                |                |              |              |
|    | 原勝書店           | 店、白揚書店、竹中書店、   |                |                |              |              |
|    | 〈千代田〉ビビ、       | 中目書房、きたやま書店、   |                |                |              |              |
|    | 日成堂、書肆アクセス、    |                |                |                |              |              |
|    | 三省堂本店、書泉グラン    |                |                |                |              |              |
|    | デ、東京堂〈豊島〉池袋書店、 |                |                |                |              |              |

読者の皆様へ 上記の取り扱い店以外の全国各地の書店でも、本誌は書店購入ができます。

お近くの書店でお求めの際は、「地方小出版流通センター」経由とご指定のうえ、ご注文下さい。